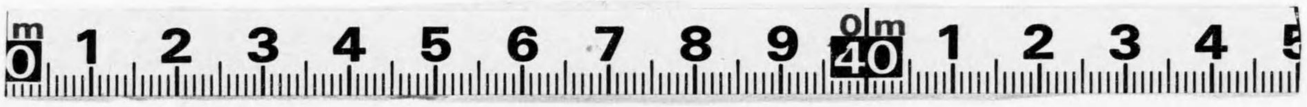
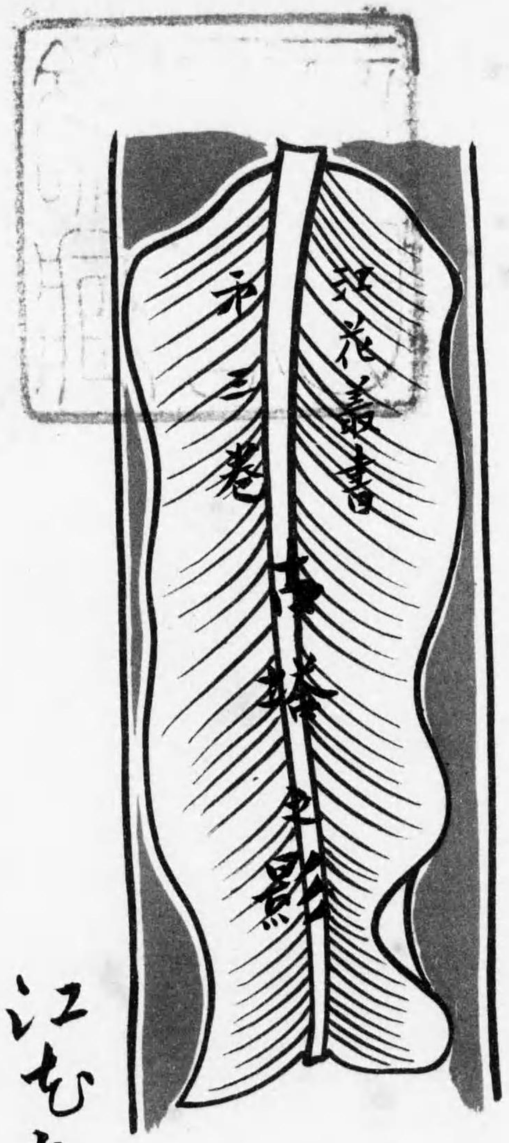
548
55

品



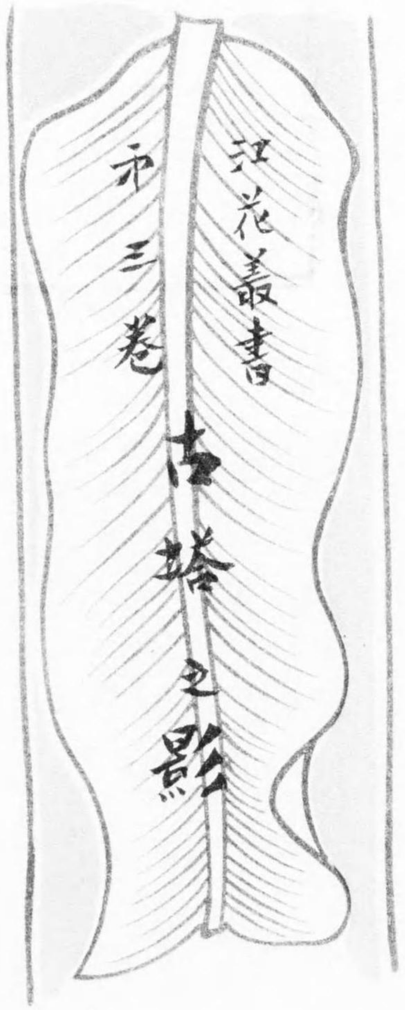
古塔之歌
江花蕊書



江北書發行

大正
15. 9. 13
内交

露光量違いの為重複撮影



江花叢發行

大正
15. 9. 13
内交

548-55

滿鮮の印象は古廟と古塔とである。廟にも面白いものは多いが、古塔に至つては、奉天の喇嘛塔、遼陽の白塔、又は鐵嶺の龍首山塔といつた物は、各々形ちこそ違へ、之れを望めば自づと滿洲氣分が濃厚になつて來る。この「古塔の影」は大正十二年の旅行記で、その八年以前の滿鮮記に比べると、甚だ大雜把な上に、相變らず非文藝的な新聞張りのものに出來て居る。終りの尻切蜻蛉になつてゐるのは、四五回分をブツ切りにした爲でもあるが、復路は何分晝夜兼行のため、執筆の機會を失つたからである。

大正十五年七月上旬
日覆窓下の小室に籠つて

著　者

露國コントラテンコ
少將戰死之所

目次

渡鮮する前夜……一
霧上つた曉色……四
搖れる搖れる……六
東萊で溫もる……一〇
文祿役の古圖……一三
在鮮人の不滿……一六
不幸な朝鮮人……一九
銀白頭の總督……二二
珍品盡し献立……二五
昌德宮の午餐……二九
朝鮮の古樂器……三二
尙雄君に遇ふ……三五
牡丹臺の戰談……四〇
撫順迄一飛び……四四
黑く輝く巨壕……四六
渾河の永安橋……五一
北陵の車馬行……五四
張作霖の饗宴……五九
聯れた御馳走……六二
滿洲は面白い……六五
宿不足の大連……六八
沙河の百雷鄕……七二
提出案の樂屋……七六
自働式の電話……八〇
久保田老驛長……八四
白玉山頭にて……八八
戰跡の小變化……九一
泰華樓の夜宴……九五
支那樂の裡に……九八
大連港の俯瞰……一〇二
大岸壁の利用……一〇五
入りふれ出船……一〇八

埠頭の作業振……一一二
一萬人の苦力……一一六
働いて溜める……一一九
星ヶ浦の半日……一二二
關羽の大見榮……一二五
呂洞賓の戀愛……一二八

私の初旅……一三三
ヰネビヤ……一四〇

編輯後記

挿繪

東雞冠山の江翁　コロタイプ
支那馬車上の翁　寫眞版
篠島先生と絶筆　寫眞版
以上別摺、其他本文刷込寫眞版多數

江花叢書
第三卷

古塔の影

井上江花著

渡鮮する前夜

下の關の旅館濱吉の二階に六十餘名の同業者が落合つた。私の室には新聞協會の幹部の人々の外、明治四十三年の新聞記者大會以來、未だ曾て一度も缺席したことの無い、いばらきの江戸周翁など十數名が陣取つて居る。かゝる所へ朝鮮から態々出迎への爲に來てある開催地側の同業者諸君がゾロ〳〵と挨拶に見えた。名刺には京城日報釜山支局長西海、朝鮮時報主筆關根重憲、釜山日報社會部長奈良好三、釜山商業會議所書記赤崎慶二などとある。是等の諸君は、內地からの出席者を順序よく且手落なく案內する爲、非常の苦心を爲しつゝあるので、今夜當地で一泊の人々は、明朝上船するに十分時間の餘

裕あれども、明晩汽車から降りて、直ぐ聯絡船に乘込まうとする人々は、グズ〳〵してゐると乘りはぐれる虞がある。併も斯うした手合ひがまだあとに六十名ばかり居る筈故心配でならぬと言つてゐる。諸君が出て去つた後風呂場へゆくと、浴槽は二人しか入られぬのに、六七人の裸体がゐて、弘業社の與田君もそのうちに居た。「井上君、北京へ往かないかい。僕は北京、天津、それから朝鮮へ引返して金剛山へ登るのだ。東京へは六月十五日頃に歸らうと思ふ。是非往かうぢやないか」そこへ江戸翁が入つて來ると「江戸君、どうだ君も北京へ來給へ。馬賊なんか恐がらなくても好いよ、僕が引受けて置く」などと勸誘を試みて居る。湯から上つて座敷へもどり、まだ飯を食はない者五人だけで膳につく。私も其の一人である。江戸翁は例に依つて德利を傾けて頗る愉快氣に北陸の温泉巡りやつた回顧談などを始める。江戸君は昨日午後五時三十分に水戸を立ち、それから當地へ來るまで乘りつゞけたのであるけれども、老体でビクともせぬ。私などは二十四時間の汽車旅行ですら相當に疲れを覺える。知章が馬に乘るは船に乘るに似たり、馬どころではない、坐つてゐてさへ聊かフラ〳〵する。まるで李白醉中の趣だ。それで

も勇を鼓し先づ第一信の筆を採るところへ、三階から降りて來た與田君が、「井上君、相變らず勉强だね。君だけだよ通信なんか書くものは」などと冷やかす。與田君は近來大いに健康を快復した爲、口も亦愈々達者になり、盛んに高談快語をやり一座の賑はひを添へて居る。時計を見ると最早十一時近くだ。あとは明朝のことにして、私も休息せねばならぬ。寢やうかと思うてゐると、釜山から來てゐる人が手紙を持つて來た。それは釜山府尹小西恭介君が、內地新聞記者團歡迎委員長として寄せた招待狀であつて、十一日午後七時三十分、釜山鐵道ホテルで晩餐を呈すると云ふのであつた。尙それに添へ明十一日及び明後十二日の私共の釜山視察日程なるものがある。日程によると例の通り隨分忙はしくお引廻しに與るわけであるらしい。（五月十日夜、下の關、濱吉旅館にて）

霽上つた曉色

旅行には何よりも天氣であるが、其の天氣が何うも甚だ面白くない。高岡を立つたときは恰かも數日來の雨が晴れあがつて、空は一面の星であつた。汽車の中は寒くて仕やうがないところから、例の運轉手着を鞄の中から取り出して着こんだけれども、オーバー、セーターでも尙凌ぎ切れぬほどであつた。然し金澤　たりから乘客が殖へ、福井からは身動きのできぬ窮屈さを感じたかはりに、人いきれで室内の温度も幾分か高まつた。琵琶湖畔で夜は明け、京都を過ぎ大阪を過ぎると、今日は又昨夜と反對に急激の暑さである。運轉手を脱いでセルの背廣にかへつたけれども、しまひには上衣をぬいでシャツ一枚となつた。そのうち空模樣は漸次惡くなり、ポツリ〳〵と降り出し、ポツリ〳〵から横しぶきになり細かい雨が車窓に打つかる。暑さは全く此のためであつたのだ。然し德山あたりから好い工合ひに雨は霽れ歇んだ。霽れ歇んだのは風のためで、内海の波は岸邊の岩石に當つて玉と碎け、日本海にでも見るやうな凄ましい奇觀を示して居る。兎も角も雨の收つた丈は好いあんばいだと思ふゐると、やがて下の關近くになり、雨は以

前の倍還へしに大粒の猛烈なのが、恰かも霰か雹かと思はれる響を立てゝ列車の上に落ちて來た。併も雨ばかりではなく風の應援までである。窓の外を見て居るとピカ〳〵〳〵と強い電光が目を射る。今度は雷だ。汽車の軌りと雷の轟きとで、話聲も打消されてしまふ。下の關へ着いて汽車から出ると、各室に分れ〳〵になつてゐた同業が一かたまりにプラットホームに集まつた。荷物は出迎への同業諸君と旅館の番頭に一任し、雨の中を濱吉へ飛込んだものゝ、天氣のことが氣にかゝるから、二階の緣側へ立出で空ばかり眺める。空は黑暗々、雨はしばらく歇んで又降り出す。時折雷が鳴りはためく。緣側のすぐ下は堀割の水で、小さな船が幾百幾千ともなく繫つてゐるらしい。宿にて聽けば上毛の篠原老人は先着第一で、しかも下の關に一泊せず、すぐ聯絡船で立て往つたとのことだ。「篠原は强い」と江戸翁も舌を捲いて驚いてゐる。明朝は晴れるだらうか、どうも覺束ない。これだけ書いて私は床に入つた。もう十二時過ぎた。之れからあとは翌朝書く。……いやもう夜は明けた。窓外は甚だ物靜かであるから、床を離れ障子を開け緣側へ出てみると、意外にも空は晴れ渡つてゐる。夜前の大荒れなどは嘘のやうでクロリと

した顔だ。馬鹿らしいこと此上もないが、愉快なことも此上ない。早速洗面所へ往つてWCへ入つて、今度は床の上へ腹葡ひになりながら、帆檣林立の間に差昇らうとする日の出を待つて居ると、「君は早いな」と江戸翁も目を覺ました。暫らくして堀割の船越じに空が明かるくなり、眞紅の太陽が「お早う」と言つて現はれた。船の舳には赤い火をチョロ〳〵と燃して居るものが三つ四つある。艫の方に雨傘を廣げて乾かしてあるのもある。曉色微茫として水のおもてはマダ靄で一ぱいだ。港では太い音の汽笛が、さながら今目をさましたやうにポーッ、ポーッと唸りを立てる。旭陽はキラキラした光りを放つて次第〳〵に帆檣を攀ぢ、光線は縁側の板の間を射出した。船の中では船頭共も起きたらしく歌をうたひながらガタ〳〵言はせて居る。（五月十一日朝下の關濱吉にて）

搖れる搖れる

搖れる搖れる盛んに搖る。私共の乘つて居る景福丸は四千二百噸と云ふ相當の大船では

あるが、底積の荷物が無い爲か、關門海峽を離れて沖へ出ると次第に船の動搖を感じ始める。昨夜の風雨の影響でもあらうが、風はまだ中々烈しい。甲板に立つてゐると、屢々烏打帽を吹き飛ばされる。然し天氣は上々で空は心地よく晴渡つて居る。八年前の渡鮮には夜船に乘つたので、關門海峽の風光を賞することが出來なかつたけれども、今度は發船の合圖の銅羅を鳴らしまわつたときから、室外のベンチを占領して、一方には下の關を見、一方には門司の市街を眺めてゐた。そのうち錨が引上げられ、汽罐の響きが船底に起り、甲板の鐵鎖がガラ〳〵と動く。船は出たのである。船の横には多くの和船がある。小蒸汽が走る。海は綺麗な紺碧だ。私の居るベンチのあたりには、夫人を連れた歐羅巴人だの、三等客の鮮人の群だの、私共の仲間はもとより、他の二三等の內地人がガヤ〳〵言ひ合ひながら見物してゐたものゝ、船が動搖し出すと大抵は姿を船室へ消してしまつた。倉田君の精美堂から出發前に持つて來た新しい寫眞機を持出してみたものゝ此のあたりは要塞地の爲め、ウッカリしてゐると寫眞機を沒收せられると云ふからやめた。驚いたのは北九洲の工業の盛んなことで、海岸一帶に無數の煙突が立ち連なり、そ

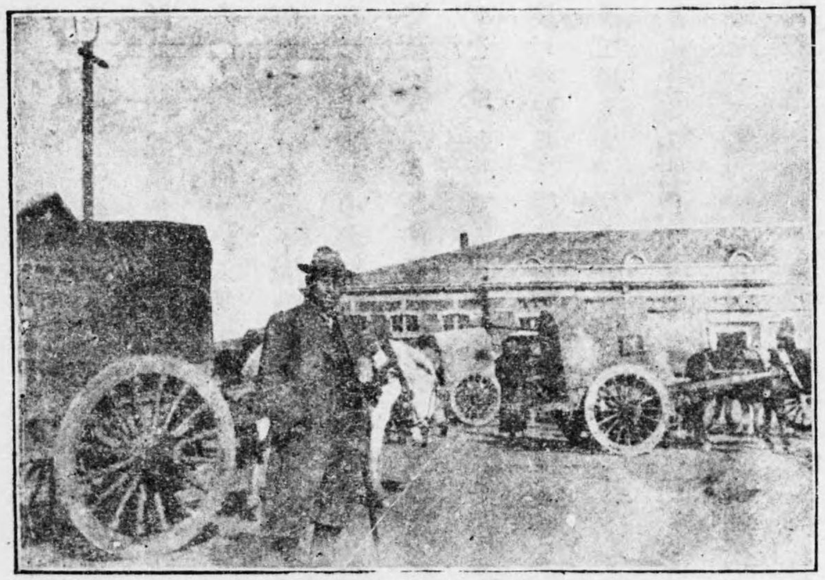
れから吐き出す煤煙は、濠々として天を掩ひ、陸上を充分見渡すわけに往かなかつた。「アレが六連島です」と、同業の一人が敎へくれる六連島の島々も寫眞に撮りたい景色であつた。曾つて佐々木蒙古君が大岡育造と云ふ政友會の大立物を向ふに廻して選擧を爭つたとき、此の六連島を根據としたとの話であるが、こんな島々にそれ程の人間が住んでゐるのかと思ふ。江戸翁は海上の景色から曾遊を回想し、「君のところの和倉あたりの海上は好いね」といふ。翁は能登と越中とを一つにして考へてゐるのだらうが、いかにも能海の風景を大きくしたやうな趣がある。甲板は風が強いので長く立つてゐるうちに寒さを覺えたから船室へもどると、いつの間にか二等室は滿員の体だ。江戸翁を初めブルジョア階級の同業は爭ふて一等券を買つた爲め、一等は特に全部塞がつてゐる。覗いてみると諸君はフツカリした寢臺に樂々と横たはつてゐるが、一等室は何うやら動搖も少いやうだ。二等の雜居團は何れも人間がお上品でないからか、今しもさま〴〵の無遠慮な話題がハヅミ切り、哈爾賓で露西亞風呂へ入り、ドアに鍵を掛けた中で美人の待遇を受けたと云ふ某君の實驗談が大喝采を博してゐる。私の横に居る一組の同業は花よ

り團子主義で、女の話よりか酒のことだと、ウヰスキーの壜を傾け眞赤な顏で「船に乘つたら酒に限ります。之れで以て船暈を調節するのですな」と、何時までも〳〵調節事業に從事して居る。私は是等の何れの間へも入黨の資格が無いのと、聊か胸も怪しくなつて來たから、休むに如かずと枕を貫つて寢轉び、船中で配布せられた大會出席者人名簿を披いてみると、二百二十六名の姓名がある北陸方面では新潟毎日、新潟朝日及び高田の三新聞で、高田新聞からは社長以下四人の名が載つてゐる。大會の常連とも云べき人々では水戸の江戸君、盛岡の禿氏君、山形の大石君、和歌山の毛利君、前橋の篠原君四日市の森永君などであらう。……一睡して覺めると三時だ。それから朝鮮に關する持參のパンフレットなどを讀み又ウツラ〳〵する。海上には最早何物も見えぬ。風は相變らず強い。そのうち對馬水道へか〴〵つたのか船は大搖れに搖れ出した。六時「山が見えた」と呼ぶものがある。起きあがつて窓から首を出す。成程朝鮮は近くなつた。（五月十一日景福丸にて）

東萊で温まる

船が釜山港内に進むとランチが一艘漕ぎ出して來て景福丸の前で歡迎花火を打揚げた。棧橋の上には「全國新聞記者團案内」と大書した枠張を立て、白色又は紅色の徽章を胸につけた多數の歡迎委員がズラリと整列してゐる一方に、白衣を着た鮮人の男女が幾群ともなく集まつてゐた。之れより先私は船中に於て禮服に着替へ大きな方の鞄は釜山の驛あづけにする手續きを爲し、片手に洋傘、片手にケースを提げて棧橋を降りると、光永星郎君がイツの間に來釜したのか、棧橋に立つてゐて「非上君は朝鮮は始めですか」などと聽かれる。歡迎委員諸君に一禮して停車場の方へ向うと、活動寫眞隊が撮影機を立て私共の通過するのをカチ〳〵とやつてゐた。停車場を拔けて鐵道ホテルの樓上で休む。そこに於て茶菓のもてなしがある。茶だと思つたから櫻湯であつた。例に依つて例の如く一括した印刷物が配られる。三四十分間も休憩してゐるうちに、食堂の用意ができたとの報知で、一同階下の大食堂へ繰込む。之れから洋食責めになるのであつて、今

夜は其の皮切りだ。ホテルの食堂は裝飾の無いあつさりとしたもので、盆栽なども大ものはなくて、幾つもの小鉢を配置せられてあつた唯ステンドグラスと、其の上へ差出した綠色の覆布とが目についた。デザートコースに入つて、釜山府尹小西君が歡迎辭を述べる。まだ壯齡の人で演說の言葉は明晰であつた。之れに對す答辭、釜山を祝福する萬歲唱和など總て型通りに運ぶ。晩餐會が終ると、ホテル前に整列してゐる自動車に分乘して東萊へ向ふ。釜山東萊間三四里の距離には電車の便はあるが、大一行を同時に送る



滿洲荷馬車と翁

ことはできないからであう。然しこんなに澤山の自動車が釜山に在るところを見ると釜山も大したものだと思ふ。昔は安奉線のガタ汽車で東萊通ひをしたものだのに、夜目ながら坦々たる道路の立派さ、四間幅か五間幅か知らぬが、路傍には街路樹が植へ込んである。通りかゝりの鮮人の女が「何ういふ男が乘つてゐるのか」と提灯を差つけて自動車の中の私共を見るのがあつた。勿論下層社會の女であらうが、女共がゾロ〳〵と此の寂しい道路を通る。東萊には大規模の温泉旅館があつて、蓬萊館、鳴子館、荒井館などは立派なものだ。私は蓬萊館へ入る。座敷は清麗で、室數も多い、取敢ず温泉へ一浴を試みると脱衣場にはヒゲを生やした鮮人が、無愛嬌な顔で番をしてゐた。泉質は無色透明、温度は攝氏五十一度、鹽類泉で慢性胃腸には最も偉功ありと書いてある。胃弱の私には効能書が有りがたくて堪らず、二十分間も温まり、ホテッた顔をして座敷へもどると十一時過ぎだ。之れから土地の官民でビールを出すとのことで、又別室へ引張り出され、十二時近く漸く床をのべて貰ひ、床に入つてから此の通信を書いてゐるのである。東萊は往年府使の居つた所で、日鮮外交上非常に重視せられた地である。附近には古蹟

多く南鮮三大寺の内なる梵魚寺には、今でも寺僧二百餘人がゐるとの話だ。それから四百年前に築かれた金井城址などは、高さ丈餘の城壁が蜿蜒六萬九百八尺に及び、小さな萬里の長城とも云ふべきものだ。文祿役の左水營も近い。そこには古碑もあるさうだ。然し明朝は七時に出發せなければならぬので、それらを見物するヒマはない。早く休まねばなるまい。別室のビール黨は妓生を呼べなどと大元氣であつたが、妓生は生憎箱切れだとの報で、おとなしく寢靜まつた。今は全館寂々として犬の遠吠が聽こえる。同室の近江新報布施君も、まだ印刷物などを讀んで勉強してゐるが、起きてゐるは恐らく布施君と私だけであらう。（五月十一日夜東萊にて）

文祿役の古圖

東萊で面白いものを見た。それは文祿役の古圖である。この古圖を二枚一組の繪はがきにしたのを蓬萊館へ來る浴客に頒つて居るけれども、今度初めて同館の主人が現物を出

して見せて呉れた。それは幅三尺丈四尺あまりの彩色密畫で同樣のものが二幅ある。一幅は日本軍が釜山鎭へ攻め寄せたところで、數十艘の船から上陸した兵士は城廓の下へ密集してゐる。韓兵は城の石垣の上に整列し盛んに矢を飛はし寄手を散々に惱ませてゐる中にも、正門の櫓の上に立派な兜を載せた、虎髯嚴めしい一きわ偉大な男が、勇氣堂々と構へ弓勢の手並を見せると、その矢に中つて倒れる者が多い。それは城將ださうな城廓のまん中の建物の中には、一人の婦人が手に劒を持つて立つてゐる。之れが城將の愛妾二人のうちの一人で、何とか云ふ女丈夫だが、此の役に主公と共に節に殉したとある。日兵の戎裝は甲冑など着けた者は一人もなく、何れも鼠色の筒袖に同じ色の猿袴のやうな物を穿き、頭には何をも被つてゐない。日兵の武器は両刀であつて、少數の者が鐵砲を持つてゐる。他の一幅は東萊城を取圍んだところで、こゝは城兵が門を開いて打つて出で、白兵戰が行はれてゐる。云ふ迄もなく城兵が強くて、日兵は意苦地なくもバタリ〳〵と斬り倒されてゐるにも拘はらず、南方の城壁を打破つて斬り込んだ一隊の日兵に追はれ、城兵は北門から遁け出すのだ。この遁げ出してゐるあたりが、唯今溫泉塲

のあるところださうな。この圖の最も奇妙な點は、日兵が大体左右の手に刀を揮つてゐることで、宮本武藏ばかりが出征したやうに見える。筆者の考へでは、日本人の腰に差す兩刀は、同時に二本共使用するものと思つたのであらう。私は此圖の說明をした物は無いかと訊ねると、主人は絕板の秘書で公にすることを其の筋から禁ぜられてゐるのだけれども御覽に入れると云つて、上下二冊の韓本を取出して來た。それは忠烈志と題するもので、戰役の顚末を叙し、尙二幅の繪圖の說明を加へてある。ゆる〳〵讀んでゐる閑の無いのは遺憾であつたが、其の筋では現今の鮮人にこんな本を讀ませば、愈々母國に對する思想を惡化するだらうと心配されるのである。然し畫幅を繪はがきにして出させて居る位ならば、ザツトした說明位は添へさせても好かりさうなものだ。蓬萊館に泊つた篠原翁は此の畫幅を見なかつたのであるが、その代り同翁は別に面白いものを見たそれは蓬萊館の附屬建物の前で、二人の鮮人が喧嘩をして、髮の毛を握り合つたとだ。之に對して翁の感想に曰く「文祿役に日本兵が强かつたと云ふけれども、其の實は鮮人が弱かつたのだ。あんな喧嘩の仕方では戰はできない。若し切れ味のよい刀を持つて働

いたならば、一人で十人に當るはワケのないことであらう」。翁は舊藩時代に武術師範をした人である。

在鮮人の不滿

東萊を朝の七時に立ち、釜山へ歸つて松島公園を一覽した。公園は市街の南方一里のところに在る半島狀の丘山で、脚下に釜山港を見下される。釜山港も以前より遙かに好くなつてゐる。始政五十年記念共進會の折には、工費三百八十二萬餘圓を投じた七ヶ年繼續事業の、第二棧橋築造、港内浚渫、倉庫上屋建築などが完成してゐなかつた。然るに是等の事業終はり、更に大正八年度から六ヶ年繼續工費九百十七萬圓の海陸連絡設備擴張、港口防波堤築造等を始め、それらも最早出來あがらんとしてゐる。今や港灣としてはまことに立派なものになつたわけだ。然し釜山港に在る内地人は之れを以つて決して滿足してゐない。公園の巡覽を濟ませ停車場の驛ホテルで發車時間まで休息してゐるとこ

ろへ、私をたづねて見えた人々がある。それは高岡出身の伊東祐義さんと、府廳の役人をしてゐる富山市の三輪松太郎君とであつた。伊東さんには先年も釜山で遇つたことがある。三輪君は曾つて富山縣廳及び藥專校などに在職したことのある人で、私の富山時代には熟知の間であつた。出發まで未だ少々時間があるからとて、伊東さんは私を廣間の横の別室に案内し、珈琲を命じて、いろ〳〵談話せられた。聽けば過日高岡から鐵道協會出席の爲、荒井さん、菅池さん、正村さん、それに高廣さんの一行四人が見えたので、東萊へ案内せられたさうだ「釜山は駄目ですよ。人口などは殖えもせず減りもせず、舊態依然として、少しも進歩しません」とて、話題の釜山に移つたとき伊東さん大いに總督政治の方針を批難せられた。それと云ふは餘りに朝鮮人本位に過ぎて、内地人の朝鮮に於ける發展を事々に妨害せられ、二十年來釜山に居住してゐる伊東さんですら今に戸籍を朝鮮に移すを許されず、在鮮内地人三十幾萬人は皆寄留者になつてゐる。隨つて内地人の心もちは始終日本以外の土地へ來てゐると云ふ考へが失せぬ。産業的發展の上にも殆ど保護を與へられぬので、不引合ひの爲續々引上げて去つてしまう「我國の

領分であつて見れば誰に遠慮することがあるか。成るべく多く內地人を移住させ、內地人の發展に依つて初めて同化が行はれるのである。內地人を追ひ出すやうな政治では、いつになつても鮮人の母國に對する反抗はやまぬ」との意見であつた。斯した意見は八年前京城に在る有力者の口からも聽いたことがある。そればかりか今度私共の渡鮮を迎へる鮮地新聞の論文中も同一の調子であつた。釜山日報は、我國の沿岸線七千里のうち四千五百里を占むる朝鮮の水產業に僅々三十四萬圓しか奬勵費を出して居らぬ。鐵道に至つては一千二百萬哩の內地總延長に對し、朝鮮は二百三十哩であるなどと殘念がり、朝鮮時報にも亦、今期議會の朝鮮に對する豫算審議に際し、僅々千五百萬圓の補助を、一人の議員も少額なりと云つた者はないぢやないかと、餘憤を議員に移してゐる。議論は兎も角、之れが在鮮內地人の不滿とするところである。（五月十二日京城行列車中にて）

不幸な朝鮮人

對鮮政策に就ては、釜山の伊東さんのやうに鮮人本位を批難する者の多いと共に、他の半面に於てはまた鮮人保護の冷淡を攻擊するものゝあることをも忘れてはならぬ。併も鮮人保護論者は、鮮人其の者の唱ふるのではなくて、同じく在鮮內地人である。彼等は朝鮮人ほど哀れむべく氣の毒な者はないと云つて居る。ナゼ左樣に憫然であるかと云ふに鮮人を職業別にすれば其の大部分は農民であるが、朝鮮の農民は生活が立ち往かぬ。其原因は固より單純ならざれども、第一は朝鮮人口の增殖の爲である。李朝時代には數代引續いで苛虐の政治が行はれた結果、民力が極度に疲弊してゐた上に衛生設備が無かつたので、青少年者は夭死するもの多く、人口は土地の割合に稀少であつたところ、併合以來衛生狀態の改善によりて死亡率が減少し、著しい人口の增加を來たした。之れ卽ち主なる一因であるが、農事改良の結果勞力を減少せられ、多數農民は仕事を失つて來た上に、地價の暴騰により、自作農は先を爭うて續々其の所有地を賣却し、其の金を以て廉價の奧地を購入したので、小作人の雇ひ手が無くなつてしまつた。それ之れにて鮮農

は衣食の道を求めて國外へ流出する。然るに國外へ出かけてみても面白いことはなく、滿蒙各地へ往つた者は、支那人の土地を特別廉價に借受け開拓に努力した迄は好いが、地主の下に居る土地支配人が暴虐な壓迫を加へる爲め、始終脅かされ通しで、生活は相變らず不安を極める。在滿鮮人の慘憺たる生活狀態などは、形容の詞もない位である。極端に云へば、在外鮮人二萬人は全部悲況に陷つてゐると云つても差支はない。飢と寒氣とに惱まされ、失望落膽の結果遂に不逞鮮人となる。殊に西伯利方面に在る者の如きは露國人から人間として遇せられず、子供迄が朝鮮人だと云へば汚穢なもの、不正をする者、油斷のならぬ者として惡むところから、愈强烈な反抗精神が養はれ、ヒネクレ民になつてくる。之れ實に數の免れざるところで、いつしか誘はれて不逞の團体に入るやうになるのである。從つて不逞鮮人の發生も亦、日本の政治が鮮人保護に冷淡なるより起るのであるとの議論がある。夫れかと思へば一方には又必ずしも總督政治ばかりを責めることもできぬ。それと云ふも畢竟內地人が、朝鮮と聞けば外國の事のやうに思ひ、何等の注意をもせないからである。と云ふ批難から、結局は鮮人保護主義反對論者と同

じく、朝鮮に對する經費を出し惜むことを責めて居る。殊に鮮人保護論者は滿州出稼の鮮人に無頓着にして、その子弟の教育に補助を與へないのが非常の不都合だと云ふのであるけれども、在外鮮人に對しては兎も角も鮮內に於ては今や教育制度は殆ど遺憾なく行届き、寒村僻地の兒童でも一通り教育を受け得ることになつてゐる。釜山京城間の長時間の汽車旅行中、郊野のうちに在る一寸した樹林地で小學兒童の運動會をやつて居るのを見たが、青々とした廣野に白、青、赤の子供の服裝の配合が非常に美しく見えたばかりでなく、哀れむべき朝鮮農民の子弟が斯して教育を授けられつゝあるかと思へば、總督政治を感謝したい心持ちにならざるを得なかつた。要するに何れの議論にもそれそれ理由もあり道理もあるであらうが、日本人本位論にもせよ、鮮人保護論にもせよ、共に一方にのみに偏すべきではあるまいと思ふのである。（五月十二日夜京城にて）

銀白頭の總督

大會當日は空模樣惡しく、會場なる朝鮮ホテルに居るうち、頓がて激しく降り出して來た。今回の大會には始めて新聞協會へ加入の手續きを取つた鮮人新聞の記者等が出席した。鮮人新聞と云ふのは東亞日報、每日申報、朝鮮日報などで、中にも東亞日報が最も有力なものだと云はれてゐる。總督府からは齋藤總督以下、有吉政務總監、丸山警務局長などの重立つ人々が臨席し、終日會場に在つて客となり、或は主人となつて、大いに私共團体に好意を表せられた。客となり主人となつたわけは、大會は午前に開かれ、引續き午餐會に移り、新聞協會の方から官民の有力者を招待し、晩には齋藤總督が同じ場所に於て私共の爲に饗宴を張られたからである。而して大會には總督が自ら祝辭を讀み午餐會には政務總監が謝辭を兼ねたる演說を試み、午餐後、大會場に充てられた室內に於て警務局長が講演をやつた。所謂三階總出の大勤めであると云はねばならぬ。之れ畢竟內地から全國百數十社の新聞代表者がワザ〳〵海を渡つてやつて來たと云ふので、遠來の勞を慰めんとの意味であるは勿論なれども、朝鮮の事情がまだ能く內地に知られざ

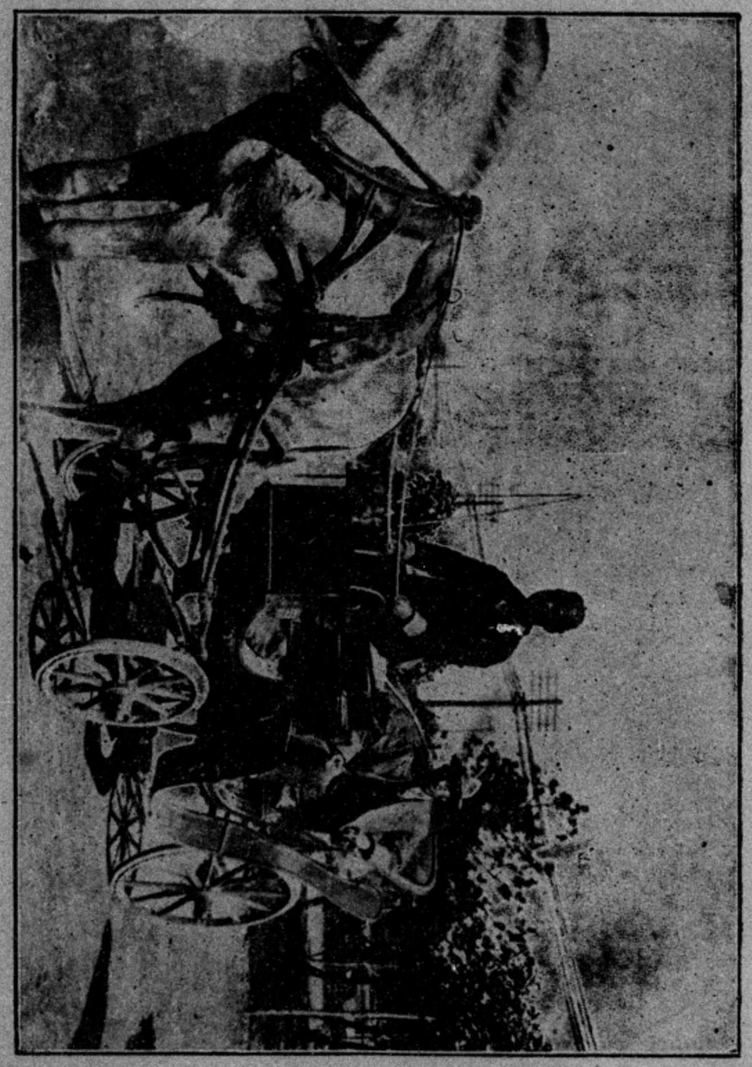
奉天驛前にて（翁の撮影）

る爲、多く眞相を誤り傳へられてゐるのが、當局者として遺憾に堪へないところから、此機會に一番新聞紙を善用してやらうとの深い所存が有つての事である。隨つて總督の祝辭にも「朝鮮事情の誤傳訂正を宜しく賴む」と折入つて囑望するところあり、政務總監は其演說に於て、日本は今や國際的に未だ曾つてあらざる窮迫した狀態に置かれて居るから、此際確かりやらねばならぬと、眞劍な態度で叫んだ。齋藤さんの銀白の頭と重厚にして堅實な其の相貌とは、非常に良好の印象を一同に與へたことと私は信ずる。往

露光量違いの為重複撮影

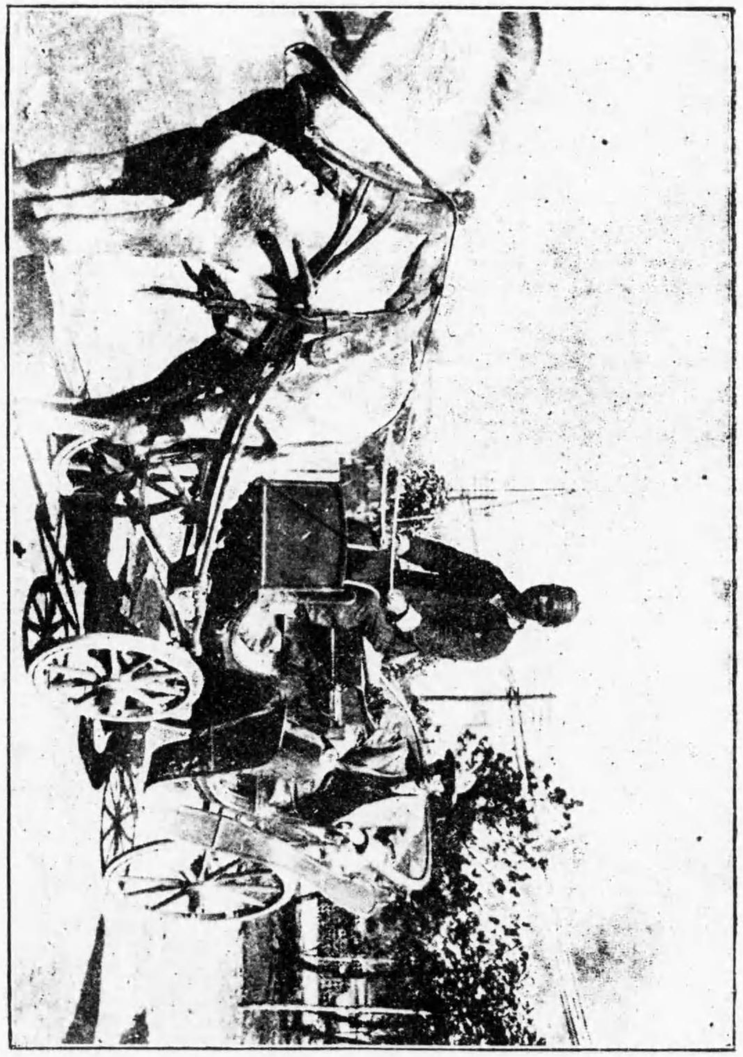
年京城にて寺内總督の招待にあづかつたが、其折も亦矢張り此の朝鮮ホテルで、寺内さんは軍服姿に拍車付きの長靴を穿き、ガチャリ〳〵と音をさせながら現はれ、ピリケン頭の嚴めしい顏で私共の前に直立された樣子は愛嬌のないものであつた。そればかりか總督の市中通行には、夥多しい巡査憲兵が堵列して物々しい警戒を加へるなど隨分大袈裟なものであつた。その威壓政治をば目のあたりに眺めた私には、現に文化的政策で押通しつゝあるフロック姿のドッシリした御本尊と對照し坐ろに今昔の感に堪へなかつた

有吉といふ人を私は今度始めて見たのであるが、何と喩ふればよいか、前に朝鮮で內務部長官をしてゐた現東京府知事宇佐美勝夫さんに張りを持たせたとでも云ふべき好男子で、其の演說は言語明晰にして語尾に力の入つた聽き心地のよいものであつた。警務局長の丸山と云ふ人は、頭の禿あんばいと云ひ、又其の容貌と云ひ、何處やら兒玉秀雄伯に似通ひ、兒玉さんの丈けを少し低くして、之れに潑溂たる活動氣分を帶ばしめたやうな一個の才人と見受けた。この人の講演は聊か沈重の趣を缺く嫌ひはあれども、輕舟激流を下るやうな調子で、聽者をして息をも吐かせぬ達辯であつた。併も警務方面の政治



露光量違いの為重複撮影

年京城にて寺内總督の招待にあづかつたが、其折も亦矢張り此の朝鮮ホテルで、寺内さんは軍服姿に拍車付きの長靴を穿き、ガチヤリ〳〵と音をさせながら現はれ、ビリケン頭の嚴めしい顏で私共の前に直立された樣子は愛嬌のないものであつた。そればかりか總督の市中通行には、夥多しい巡査憲兵が堵列して物々しい警戒を加へるなど隨分大袈裟なものであつた。その威壓政治をば目のあたりに眺めた私には、現に文化的政策で押通しつゝあるフロック姿のドッシリした御本尊と對照し坐ろに今昔の感に堪へなかつた有吉といふ人を私は今度始めて見たのであるが、何と喩ふればよいか、前に朝鮮で內務部長官をしてゐた現東京府知事宇佐美勝夫さんに張りを持たせたとでも云ふべき好男子で、其の演說は言語明晰にして語尾に力の入つた聽き心地のよいものであつた。警務局長の丸山と云ふ人は、頭の禿あんばいと云ひ、又其の容貌と云ひ、何處やら兒玉秀雄伯に似通ひ、兒玉さんの丈けを少し低くして、之れに潑溂たる活動氣分を帶ばしめたやうな一個の才人と見受けた。この人の講演は聊か沈重の趣を缺く嫌ひはあれども、輕舟激流を下るやうな調子で、聽者をして息をも吐かせぬ達辯であつた。併も警務方面の政治



滿の上車馬那支

方針について、萬事のこらず洗ひ洒らしに打明け、鮮人の對日反抗の內容眞相をば、列席の鮮紙東亞日報記者などを眼前にならべ置きながら遠慮もなく素破抜き、東亞日報に販賣禁止を食はせやつた痛快な事實を物語つたのは意想の外であつた「自分は腹心を披いていふのだ」と丸山君自ら看板を掛けてやるのだから、私共の盛んなる喝采を博したのは偶然でない。秘密づくめの官吏としては珍しい。內地の官僚諸君が何れも皆此筆法で私共に接して呉れたならば、双方の得策であり利益であるとは、私のツク〴〵感じたところである。總督の晩餐は全部材料を朝鮮の產物に取り、イロ〳〵の物を食はさせられた。餘りに長文になるから、本文は此邊で切りあげ、あとモウ一回つゞける。

（五月十三日京城にて）

珍品盡し献立

こゝで一寸朝鮮總督から我々を饗應せられた晩餐會のメニウを御覽に入れる

（一）鷄林の華　（二）全南の瑞　（三）慶尙の幸　（四）平南の富　（五）江原の譽　（六）平北の錦　（七）江原の精　（八）忠淸の榮　（九）八道の光

其の一には明太のカラスミ、白魚の筏燒、うに、鮑、ハムがあり、其の二は鼈のスープ其の三は鰆と蟹と蝦との濃漿、其の四は平壤牛と、香たけと鮮米味付、其の五は羊と栗其の六は義州白米のサラダ、其の七は金剛山の松の實のアイスクリム、其の八は京畿道あたりに多い落花生菓子、其の九は苹果だ。右のうち松の實だの羊肉は始めての代物であつた。ちやうど私の隣席に總督府事務官の張憲植君がゐたので、珍物の出る毎に、之れは何だ〳〵と質問を試みると、張先生詳細に說明してくれた。此の人は以前道知事として地方に出てゐた人で、李斗璜、鈴木隆、檜垣直右など云ふ人々についても色々回顧談を始めた。山形の大石君は私の向ふの席に在つて飛入りを試み「朝鮮人は李王に對してイカなる考へでゐるか」と張君に訊くと「それは恰も內地人が舊藩士に對するやうな情誼的のものである」と答へた。スルト大石君は「朝鮮の政治は結局李王を總督として之れに渡すべきものだ」と主張したので、張君は變挺古な笑ひ方をして「そんな事は勿

論現在の朝鮮の狀態では、不可能です。まあ〳〵長い〳〵將來のことだ」と逃げた。大石君は趣味の廣い、私と氣の合つた同業者の一人であるが、非常に鮮人に同情を表し、哀れむべき鮮人の貧民を救はねばならぬから、自分はどうしても晩年を朝鮮で送りたい。目下は仕のこした事業がある爲一寸來鮮するわけに往かぬけれども必ずやつて來ると云つた。談一たび鮮人生活のことに及ぶと、大石君の附近に居る在鮮內地人の某君が、朝鮮人には何の趣味もなく、一般民は向上心を缺いて居る。然らば何が樂しみで生きてゐるかと云ふに、性慾ばかりだと、小指を差出してみせ、鮮人の家屋の內部が溫突を焚いてホカ〳〵した小さな室で、そこに寢轉ぶのだから惡い。そして例の人參で强精を求める彼等の性慾たる內地人の急激的のものでなく、いかにも氣長く悠長に構へた持續的ものだ。それで體力腦力共に衰へ、薄ボンヤリしたものになつてしまふ。即ち朝鮮人を毒するものはヲンドルとニンジンだとの結論に到達すると云ふやうな意見であつた。惜むらくは其の人參をも今夕の御馳走に加へ、私共に不老長生の幸福を與へて欲しかつたと笑へば、張君は「いやこの松實は鮮人が稱して不老長生の靈藥とするものであります。う

んとお買ひなさい。南大門の市場に賣つてゐます。然しちと高い。實ばかりなら一合五拾錢位しませう。松かさで買つて往くもよいが荷物になる。松の實の菓子ならば鍾路で賣つてゐる」と敎へてくれた。但し松の實は脂肪に富み風味のよいものだ。人蔘について智識を持たぬ私は、當夜總督府の活動寫眞で、栽培から收穫に至るまでの狀況を見せてもらひ、初めて諒解ができた。人蔘に關する記錄も手に入れたけれども、こゝで知つたかぶりをする必要もないから省略して置く。宴後活動寫眞に併せ妓生の舞踊を見せられた。口と目と、換言すれば食とセックスとの御馳走であつて、之れが頗る會衆の御氣に召した。この時分には大分醉がまわつてゐるので、赤い顏をして大聲を發して笑ふものあり、例の在鮮名物老人大垣丈夫さんなどは鮮語を以て踊りを賞め稱へたものだ。宿泊中の多くの外國人も皆踊見物に出て來た。舞踊と云へば前夜も某所で踊りを見せるからとの、朝鮮の新聞社側の案內を受けたれども、私は仕事があるので失敬した。同業の元氣な人々は疲勞を意とせず出掛け、十二時頃に歸つて來たやうだ。大會の終つたのは十時半十一時頃でもあつたが、雨中を鮮人の車で宿へ歸り、每夜の睡眠不足で少々目がわるくなつたにも拘らず、馬力を出して深夜に此筆を採る。（五月十三日京城にて）

昌德宮の午餐

京城に於ける第二日目の日程は、昌德宮李王職の午餐の招待であつた。宴會は金色燦爛たる寺院の本堂のやうな正殿の向つて右方に當る廣間に於て開かれ、年齡最早七十ばかりかと思はれる、いかにも貴族らしい風貌を持つてゐる閔李王職長官が、鮮語を以て莊重に述べた挨拶の要旨は、李王殿下が特別のお思召により、珍客たる內地新聞記者團の諸君を丁重に饗應するやう御下命があつたとのことで、尙ほ殿下は相變らず御健勝に渡らせられると申し添へられた。饗宴の形式は立食にして、李王職の官吏等は席上を斡旋したが、それらの官吏は全部鮮人であつて、覺束ない內地語で私共の質問に應答した。併も其の應答と云ひ擧措と云ひ、まことに如才なきものにて、偶に私共の一人が卷莨を吸はんとて、ポケットに手を突込み燐寸を搜すのを、遙か彼方でちらと目を留め、直ぐ

馳來つてマッチを擦り差出すと云ふ風で、所謂痒いところへ手の届くやり方であつた。八年前には秘苑の宙合樓で、立ちながらビールとサンドウイッチか何ぞで、ホンの一寸した御もてなしに過ぎなかたばかりでなく、李王職には故伊藤公に使はれた小宮次官が居て、專ら内地人の官吏により案内せられた。それが今日の李王宮内は鮮人本位となり私共に禮を盡されるあんばいは、往時の「オイ來たか」位の内輪同志に對する待遇と趣を異にし、自然眞にお客さまの心持にならざるを得なかつたのである。卓上に並べられた食品は、例の神仙爐のゴッタ煮を中心として、總て純然たる朝鮮料理であつたのも、連日洋食責めに遇つて居る身に取つては頗る嬉しく思うたものゝ、年來午食抜き二食主義の私は胃腸を壞す虞がある爲、餘りに多くは箸を付けず、貰ひ受けた陶製の酒盃だけを持歸ることにした、秘苑の風物は舊に依りて泉石の美を極め、樹木鬱蒼として折柄霽れ上りの炎熱を銷避するに適したから、樹間を逍遙しつゝ撮影の箇所を求め、兩三回もシャッタアを切つた。帝都の宮中吹上御苑には、樹木が多くて有ゆる禽鳥の自由境となつてゐるやに承つたが、この秘苑内も亦同樣にて、屢々鶴群の飛翔するのを見受けるさ

うである。今日の秘苑は以前よりも一層開放主義を取られてゐるのであらう。私共の團体以外に、幾組かの團体がぞろ〳〵とやつて來るのに出遇つた。その中には朝鮮の中學生が教員に引卒せられたのもあつた。暴王苛政の遺跡とも云ふべき宮中庭園の八道別け水田（其の水田の良作であつた地方を第一に誅求すると云ふ闔引式のやり方をしたものだ）だの、某王の豪奢的の土木のことなどをも、以前には無遠慮に説明せられたけれども、今回はそれらに就ては全然説明抜きとなり、苟くも朝鮮王朝史上千載の恥辱となるやうな事實は、聊かも耳にすることができなかつた。之れは當然のことにて、左樣な裏面史を研究せんと欲すれば、別に幾らでも方法は有るのである。昌德宮並に秘苑を拜見して後、景福宮へ向つたが、八年以前共進會を開かれたあたりは、草蓬々として生ひ茂り、曾て置酒高會、夜を以て晝に代へた慶會樓も、之れが電燈の光り皎々として、無數の妓生が私共に酒をすゝめた所かと驚かれるやうに物寂びてゐた。

（五月十七日京城にて）

朝鮮の古樂器

新聞大會の當日朝鮮ホテルの一室に於て、齋藤總督は私共に妓生の舞踊を見せた。私は往年京城の明月樓並に釜山の東萊に於て鮮妓の舞踊を見たことがあるから、大會前夜、朝鮮新聞が妓生の踊を見せて呉れると云ふ招待會には缺席した。然し朝鮮ホテルでは勢ひ觀覽せぬわけに往かぬので、久しぶりに重ねて彼の哀調を帶びた歌と音樂とを耳にし巫女の舞のやうな無變化の踊りに痺れを切らした。然るに昌德宮に於ては特に私共の爲め、朝鮮の樂器を一室に陳列し、且赤色の正裝で冠をのせた伶人等を其の室内に立たせ之れは斯うして打ち斯うして鳴らすものであると、鳴らし方や打ち方までやつて見せられたが、陳列せられた種々の樂器は皆實に珍らしい物ばかりにて、總て五十四種金屬製、石製、絲製、土製、木製、革製、竹製、匏製に區別され、其の名稱を書き立てたところで素人の齒には合はぬばかりでなく第一活字が無いので省略する。兎も角も此の五十四種を現に李王家に於て用ひられて居るのであるが、昔は七十五種もあつたさうだ。何れも支那古代のものにて、是等の樂器が支那に於て早くも滅失し、跡方もないにも拘はら

ず、朝鮮に保存せられて居ると云ふは奇妙だ。そこでだん〳〵說明を聽いてみると、朝鮮の樂は遠く新羅、高麗の頃に盛んであつたが、降つて李朝に至り、太祖より九代の成宗までの間に正樂を改善完成し面目を一新した。然るに正樂は漸次衰退し、女伎の俗樂ばかりが盛んになつて來たところ、最近に女伎を全廢し雅樂に力を入れるやうになつたのださうだ。近頃宮内省雅樂講習所講師田邊尙雄氏が朝鮮に來り「李王家の音樂を聽いた時は天に昇つた如く感じた、之こそ眞の雅樂だと思ふた。我内地には一つも傳はつてゐないのに、朝鮮ばかりに古代の音樂があることは世界の珍である」と嘆じたとの話である。現に李王家に於ては田邊氏の忠言を容れ、樂師を養成して、此世界の珍たる貴重の音樂を保存することに力を用ひられつつあるさうだ。昌德宮では私共に樂器を觀覽させた後で、尙舞樂堂(何と稱するか知らず)に導き、舞踊を實演して示された。依つて此の機會に宮中舞樂と妓生の踊との相違を比較することができて非常に興味を喚び起したのである。尤も眞の正樂は神聖のものにて、滅多に實演せらるべきに非ずとあつて、俗樂の方を演ぜられた。樂堂は周圍が觀覽席で、觀覽席の方が舞踊場よりも一尺ばかり高

く、舞臺ではない舞場は浴槽のやうに眞中の凹んでゐるのも面白い。當日所演の樂名は左の三種であつた。

鳳凰唫（管樂）　四百五十九年前に創まり新羅時代から傳はつた有名なる處容舞に伴奏したもの

長生寶宴之舞（舞踏呈才）　九十四年前に宋の基聖節に於けるものに倣ひて舞はさせたもので私共に示されたのは童舞である

春鶯囀（同上）　千二百年前唐時代のもので聲律に通ぜる高宗が鶯聲を聽き命じて創めさせたのが傳來したのである

童舞と云ふのは男兒をして舞はしめるので、舞人は十五六歳の少年揃ひ、衣裳は妓生の夫れと同じく、中々立派なものであつたけれども、惜ひかな、少年の中には一人として菅秀才の御身替はりとなる程の眉目秀麗のはなく、色飽くまで黑く河童の從弟のやうな者ばかりであつた。但し妓生が舞ひながら秋波を送る不謹愼の狀に比較すれば、幾らか熱心に眞面目に緊張してやつてゐた。けれども樂器を取扱ふ連中には概して惰容が見え

中にも太鼓を打つ者などはケロリ閑とした顏で始終わきみをしてゐた。兎も角も朝鮮の音樂は世界の珍と言はれてゐるので、特に之れを一信に及ぶ次第である。（五月十四日京城にて）

尙雄君に遇ふ

京城の昌德宮に於て李王家の舞樂を演示せられた折、李王職の人々は「田邊理學士が斯う云つた」とか「彼あ云つた」とか言つて、頻に田邊氏の音樂に關する意見を有り難さうに振舞はしてゐた。田邊理學士とは、例の家庭ダンスの創作者として知られたる田邊尙雄氏のことである、李王家では何でも田邊氏を非常に偉大なる藝術家として尊重し、氏の言に耳を傾け、朝鮮音樂の保存に力を用ひることとなつたらしい。私は勿論田邊氏に遇つたことは無いが、曩に京城よりの通信中に一寸同氏の名を入れて置いた。然るに世間は廣いやうで狹いものである。過日大連から四晝夜ブッ通しの旅行をして歸社した

折、下の關發急行列車中、私の前の座席に居る洋服紳士の旅行鞄を見ると、北京某旅館の荷札を貼りつけてあつたから、多分支那歸りの人であらうと思ひ、試みに話しかけてみると奇なるかな其の旅客が私に差出した名刺に「田邊尙雄」とあつた。肩書は宮內省樂部講師理學士、東京府豐多摩郡落合村下落合五百十六番地とある。「ヤアあなたが田邊さんでしたか」「さうです」「過日李王家であなたの御意見の受請を聽いて來ました。お蔭で朝鮮の音樂が世界に於て最も貴重なものだと云ふことを承知し、通信を書きましたよ」「さうでしたか、あれは實に古いものです。私は奈良の正倉院を見ましたが、正倉院には聖武天皇時代に支那から贈つて來た奇妙な樂器がありますけれども、どうして夫を使用したものか薩張り見當が付かなかつたのです。然るに音樂調査の爲に朝鮮へ行つてみますと、李王家に支那傳來のいろ〳〵古い樂器がありまして、その中には正倉院で見ました物もあつたので、初めて使用方法も判明しました。肝腎の支那では古代の音樂は其の樂器と共に絕滅してゐるのに、朝鮮では今に夫れを使つてゐるのですから、之れは何うしても大切に保存せなければならぬと感じ、李王家とも相談して樂師の養成に力を

入れさせることにしたのです。音樂と云ふものは始終やつて居なければ、樂器と共に消滅するものですから」「だが、朝鮮人の樂師と云ふものは何と云ふ不緊張なダラシの無いものでせう。あれで良いのですか」「さうですな實に成つてゐませんよ。若し立派に緊張してゐるならば、奬勵の必要はないのですが、滅びかけてゐるから、之れは結構なものだと言つて矢たらに貴重がらせたのです。何しろ樂師の月給は貳拾五圓位ですから、勞働者の收入にも劣ります、不緊張なのは當然じやありませんか。そこで官制を改革して月給をも倍額にし、七拾圓の樂師長を百四五拾圓に

奉天忠魂碑と翁

昇して高等官とし、樂師を判任官にしたのです』『はゝあ、あなたはあの間拔けた太鼓打ち共の恩人ですね。道理でうけが好いと思ひました』『あなたは虎の樂器を見ましたか』『見ました、虎が坐つてゐて、その背部に魚の鰭のやうなギザ〳〵が立つてゐる。そのギザ〳〵を擦つて鳴らすと云ふ馬鹿氣たものでした』『いや〳〵、馬鹿氣ては居ません。あれが驚くべき物ですよ。朝鮮の古樂は、廣い場所で七百人からの樂人が五六十種の樂器で合奏するのですから、實に高い音をさせます。それを指揮するには尋常の樂器では駄目です。そこで彼の虎の鰭を木片で撫でるとシの音立をてます。シの音は一秒時間に一萬八千回の振動を空氣に傳へますから、どんな騷々しいなかでも耳に立つ。だから騷ぎを制するにシーッと云ふでせう。其の原理を應用して千幾百年以前に彼の巧妙な樂器を作つたと云ふは我々の驚くところです。其の他詩經だの史記だのに載つてゐる禮樂が皆朝鮮に求められるので、非常な利益を得ました。歐羅巴で樂器を使用し初めたのはツイ四五百年前からで歐羅巴の樂器は東洋の模倣が多いのです。その淵源は支那でありますけれども、實際古い物の保存せられてゐるのは朝鮮ばかりです』『支那へは何しにお出で

ぶした』『矢張り音樂の調査に行つたのです。朝鮮を調べてから臺灣琉球と歩き、臺灣では蕃界へ入つて、土人の首を切つて音樂を奏するところを見たりして、首を切るときに吹く笛をお土産に貰つて來ました。臺灣の田總督は私の父と深い關係がありますし、琉球舊王の尙と云ふのは元私の生徒で、調査上何れも便宜を得たのです』と臺灣談支那談それから又朝鮮談に立もどり『困るのは日本の官吏ですな、朝鮮の音樂を破壞する者は日本の官吏です。李王宮で正式の饗應があつて、妓生が座に侍りながら突然磯節を唱ひ出すから、聞いて見ると內務省の官吏がやらせるのださうで、甚だしきは鰌すくひを敎へることださうです。場所柄をも辨へず、正しい古樂と磯ぶしとを一つに思ふやうでは話になりません。品行方正を以て面目とした妓生を娼妓のやうに墮落させたのも內地人の責任ですよ』と品格のよい半白の田邊理學士は、さも憤慨措く能はざるかの如くに見えた。田邊氏が神戸で下車したとき、私は私共の曾て知らざる音樂藝術の爲に、不思議の調査に全身を突込んで居る紳士の後影を見送つた。（五月二十四日歸途）

牡丹臺の戰談

大會第二日目の午後十一時五十分京城發臨時特別列車に乘込んだ私共一行は、第三日目の午前六時十五分に平壤へ着き、七星館と云ふ料理屋の二階で朝食を喫し、九時三十分自動車にて米國人經營の病院だの、小學校、中學校だのを巡覽し、汗みどろになつて松樹の多い箕子廟へ登つた。丘上にある丹碧の殿堂が即ち殷の大宗箕子の廟で、箕子が朝鮮へやつて來たことに付いては歴史上に議論がある。傳によると、此の墓は八百余年前高麗王肅宗の十年に、箕子の墓を求めて此處に祀つたとの話だ。然し此廟の有名になつたのは、日清役の折、清軍が之れを占領し、元山支隊に向つて激烈な戰鬪を交へたからである。故に私共は元山支隊の攻擊をやる意氣を以て登山し、山傳ひに乙密臺と牡丹臺とへ上つた。此の兩山は何れも眺望絶佳で、脚下を大同江の大流が洋々として緩やかに流れてゐる。高濱虚子作「朝鮮」は私の愛讀するところのものだが、あの文章のやまは牡丹臺とお牧の茶屋だ。私は今山上に立つて俳趣味で見た、虚子の文章が頭に浮んだ。

乙密臺と牡丹臺とは共に此邊一帶の總稱なる錦繡山の一角に對峙して立つ丘山であるが昔は附近一面に老松密生し非常に好い山であつたと云ふ。今でも松林はあるが、其の樹木に古いものは少ない。兩臺の中間に殘つてゐるのが、原田重吉の名と共に知られた玄武門だ。私は平壤驛へ下車したとき、主人側から出迎はれた人がある。それは道事務官丹羽太一郎君とて、往年富山縣廳に在職した舊知であるが、現に道廳の勸業課長をして居られる由で、私はいろ〳〵其厄介になつた。玄武門を潛るとき「どうして之れを破つたのです」と訊くと、同君は「牡丹臺の上にも乙密臺の上にも敵がゐて容易に落ちないから、朔寧支隊は西方の山から進擊して牡丹臺を奪取したけれども、乙密臺の前に此の門があつて侵入することができぬので、三村中尉が決死隊十六人で門に迫つた。之れを目かけて乙密臺から盛んに銃火を浴びせ、危險千萬であつたのを事ともせず、一等卒の原田が、壁塀を乘り越へ、山上の敵に背を向け、内部から門扉を開き小隊全部を城内に導き入れて、遂に之れを占領したと云ふのですが、門の内面には敵が居なかつたと見えます」と笑つた。門の中は穹隆形のトンネルのやうに煉瓦で積んである。之れは牡丹臺

の下にある大同江の絶壁の上に立つ浮碧樓に入る通用門なのだ「今では恁麼に道を付けて体裁を作り、公園にしましたけれども、以前は道も何もない唯の山でした」とは同君の談である。乙密臺では眼鏡を掛けた年若い陸軍大尉の講話があつて、文祿役に小西行長が此ところで敵の詐術にかゝり、散々の失敗を取つたことから說き初め、日淸役に於ける我軍の攻め口、淸將徐寶貴の戰死に至るまで巧に且面白く、一々山上から地點を差し敎へて述べられた。何でも淸軍は一萬六千ばかり、我軍は一萬三千で、衆を以て守るは戰術上不利である爲、敵は一方の圍みを突き退却せんとしたけれども、萬一退路を絶たれては困ると思ひ、又城內に入つたのが失敗の基であつたのださうな。乙密臺の樓內に立つてゐる私は、大同江の方から吹く强い風に面を向け、講話を聽きながら見てゐると、江の對岸に陸軍飛行機の格納庫と、其の前に廣ッ場があつて、そこから二台の飛行機が中央高く翔けのぼつた。山を降るとお牧の茶屋で茶を飲んだり、繪はがきを買つたり、そのハガキに文字を書いたりしてゐる同業の一群れがあつた「お牧ですか、あれは何でも今のヶ所よりはずつとの下の方で元駄菓子のやうな物を賣つてゐたのですが、だ

ん〳〵仕上げて名高い女になつたわけです。もう大抵お婆さんですよ」と丹羽君は告げた。待つこと一時間にして、浮碧樓（床を張らぬもので、神社の繪馬堂然として居る）に於て午餐の折詰辨當とビールとが出たけれども、私は僅かに箸をつけたゞけで、篠原翁及び其の息秀吉君を誘ひ、直ぐ三人で山を下りた。一時間半の後一同は牡丹臺下から小舟に分乘して平壤の一端なる稅關埠頭まで下ることになつてゐるのであるが、篠原翁は早く休息したい爲、私は社よりの電報を受け郵便局まで往かねばならぬ用事を帶びて居る爲で、篠原父子よりも先きに車夫を急がせた。車は大同江に沿ひつゝ長い〳〵堤上を飛ぶ。江上には帆をかけた舟が幾つも通ふうちに、二人の支那美人を載せたのがあるその少女の一人は白衣に紫の袴をつけ、綠色のパラソルを翳してゐて、高い岸上から見下すと色の配合がまことに綺麗であつた。空を仰げば先刻の飛行機が二機共に鳶の舞ふやうに飛んでゐる。（五月十五日平壤にて）

撫順迄一飛び

用事を辯ずるに必要なる認め印を持參してゐなかつた爲、私は印判屋へ往つたり郵便局にもどつたりして、彼之れ時間を潰して後、停車場へ立もどると篠原父子は先着し居つて、怠屈で堪らんと云ふ、せめてものことに私共は停車場の内外に群れてゐる支那人（用事があるのか無いのか分からぬけれども、皆が悠々としてゐた）を見物して暮した。向ふでも私共を見物してゐるらしい。お互さまだ。その中に頭を非常にハイカラの束髪に結ひ、金縁眼鏡を掛けた白衣黑裳の妙齡の一美人が、三等待合の方から出たり入つたりブラ〳〵してゐるのを見付け出した。臨時汽車は午後六時に平壤を發した。昨夜通りの一等寢臺車で寢臺はダブルベットであるから、一人で占領するには緩くりしてゐる。即ち洋服を脱ぎ裕衣を借て樂々と横になる。然し兩隣も向ふ側も、上のベットも高談戯語を交へてゐて、十二時一時までも騷がしくて安眠を妨害さるゝこと甚だしく、原稿でも書かうかとペンを出してみたが、列車の動搖で思ふやうに筆が運ばぬから、まゝよと望みを絶ち、大黑天の顏はドンナ顏だつたかと思ひ出さうと勉めるうちに寢てしまつた。

鴨綠江はいつの間に過ぎたか、翌朝六時に奉天につく。昨夜は雨であつたらしいが下車の折は幸ひにも晴模樣になつた。驛の構内で朝食をして撫順行きの出るまで、私は吳日々の山口晃君と新市街を一巡りし、寫眞原料店で兩人共にヒルムを買入れ、表忠塔の前へ往つて互に一枚づゝ撮影し合つた。先年一寸當地へ立寄つたので大体の方角は知つてゐる。本通りよりも裏町が好いと、足に任せて三間道路に向つたら女郎屋町へ出てしまつた。女郎屋の看板には鴻聲書寓だの、中華茶園だの若くは艶樂書館、群仙書館、回春書館など、夫れ〳〵支那式の文句を拈ねつてある。書寓書館と云へは書店、茶園と云へは茶店の如く思はれる。而うして入口には必らず聯をかけて面白い對句をならべ、額には額で「人傑地靈」などゝ聽いて呆れるやうなていさいの好いことを書いてある。その附近には質屋があり、飲食店あり、飴屋があり飲食店には、一せんめしと云ふところを簡易便酌とやり、宛家飯莊と名乘つてゐる。女郎屋を撮るのもおかしなものと、他にそこらこゝら二三枚を撮つて九時奉天發、十時四十分撫順について、露天掘りの炭坑を見事務所前の驛から汽罐車付きの大きな電車に乘つて永安橋と云ふ公園めいたところへ着

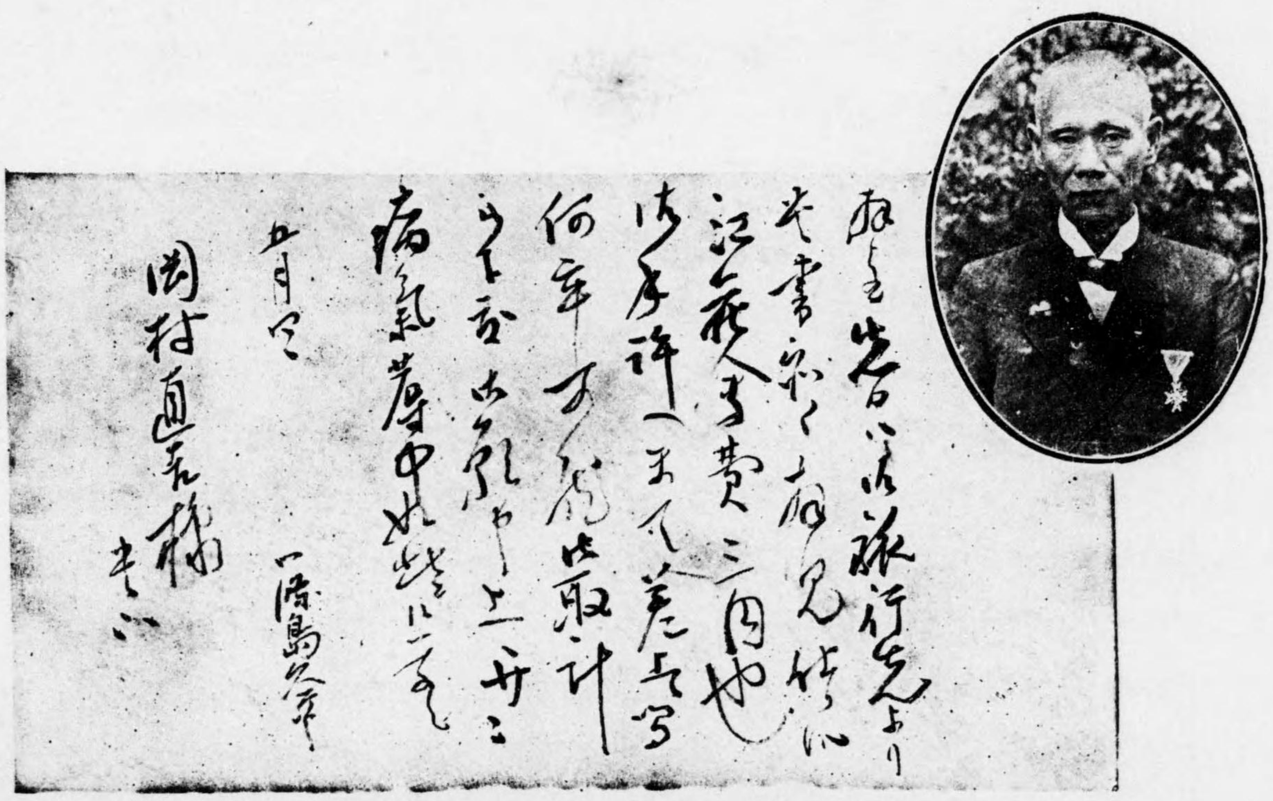
く。そこには樹林が茂つて墳水池などをしつらへ、四洲亭と呼ぶ建物がある。建物の間なる墳水のあたりに椅子を並べて中食の折詰が出た。滿鐵側の歡迎辭など型の如くにてその歡迎辭のうちに過日鐵道協會の團体をも此處で迎へたとのことであつた。毎度御迷惑と察しる。一時二十分永安を發し、發電所に下車、モントガス製造所だの、その附近の大山採炭の狀況を觀覽したが、石炭瓦斯の臭氣に堪へぬと篠原翁の訴ふるを幸ひに私は一行をぬけ翁を伴うて電車の中へ立もどり、暫時らく餘計の休息を取つた。私は撫順を見たことによりて大いに利益するところがあつた。炭礦に就ては後で一信する。

（五月十六日撫順にて）

黑く輝く巨壕

今日の經濟生活は、平時に於ても戰時に於ても、鐵と石炭とに支配せられ、鐵と石炭とは一國の興廢に關係する二大天產である中にも、石炭に至つては燃料問題の世界的となり居るとき、列國が諸共に血眼となつて其の產地の獲得を爭うて居るのである。隨つて撫順を訪ふことは、石炭に關する智識を求むる上に、今回の旅行に於ける目的の一となつてゐた。奉天から撫順迄の所謂撫順支線は三十哩九分と註せられ、途中に孤家子、深井子、李石寨の小さな三驛を挾んでゐる。此線は露國が曾て千金寨、楊柏堡、老虎臺の炭坑を買收の後、炭礦專用の鐵道として急設したものを、我國の占領後改修を加へ、其の後更に之れを完成せられたものである。撫順驛は初め千金寨驛と稱し、その東北三哩餘のところに撫順驛を置いたのを、大正二年千金寨驛を撫順と改め、元の撫順驛を永安橋と呼ぶことになり、後更に永安橋驛を廢止になつた。今日の撫順炭礦は千金寨、楊柏堡、老虎臺の三ヶ村に連亘せる總ての炭坑を一括した名稱であるが、こゝで一寸此炭礦の沿革を述べて置く。撫順炭礦は今を距ること凡そ六百年前、既に高麗人によりて採掘せられ、陶器製造の燃料に供してゐたさうである。然るに清朝乾隆年間に至り、政府は宗祖の墳墓たる永陵及ひ東陵に近きところ故に風水の害を來さんことを虞れ其の採掘を禁止した。降つて光緒二十七年、或清國人が政府の許可を得て採炭を開始し、その採掘

翁の内陣粉飾



篠島先生と絶筆

權をは露國の極東森林會社が買收し、大いに爲す所あらんとしたが、事業の未だ緒に就かぬうちに日露の役起り、我軍が之れを占領するや、野戰鐵道提理部に於て經營を引受け、明治四十年に至り滿鐵會社の手に繼承せられた。滿鐵繼承當時に在つては、前記三炭坑の外に煙臺坑あるのみにして、一日三百噸内外の出炭であつたが、後に、大山、東郷の二大竪坑を開鑿せられた結果、明治四十四年度には一躍一日平均四千噸の出炭となり、大正四年度よりは萬達屋坑及古城子の露天掘を開始し、七年度よりは新屯坑、龍鳳坑及び古城子第二露天掘の開鑿を始められた爲に、愈々出炭量の增加を來たし、現在は前記八坑及び露天掘を合せ一日平均出炭高約一萬二千噸、年額三百八十萬噸に達してゐる。併も滿鐵は之れに甘んぜず、所謂大露天掘の計畫を立てゝ、大正九年度から其工事に着手し、急速に古城子第二露天掘を擴張して古城子第一露天掘に連結せしめんとして居る。私共一行は撫順驛に下車すると、驛外には出でず、直に線路傳ひにツイ近くにある第二露天掘の作業を見た。撫順の採炭は從來殘柱法と稱する方法に據つてゐたのであるが、厚炭層にありては灑砂充塡法の得策なるを認め、大正元年楊柏堡坑に此方法を實

行して以來、之れを大山、東鄕、老虎臺、千金寨等の各坑に及ぼした。又萬達屋武鳳及び新屯の三坑は、當初より灑砂充塡法の採掘であつた。然るに礦區西端の地域は炭層の厚さ肥大し、包被地層の割合少きを以て、表土を剝離して採炭する露天掘に適當すとなし、古城子に初めて之れを實施されたのであるが、斯かる大規模の露天掘は世界無比と呼ばれて居る。唯看る夫れは廣くして深い、そして水の無い空掘である。壕端に立つて下を覗けば無數の採炭夫等が蟻の如く、其の中に立働き、あらゆる機械が其の中に運轉せられ、併も其の巨壕は全部眞黑の色を成してゐる。表土を剝離するには山の如きエキスカベーターが据付けられ、剝岩又は採炭には電力又は蒸氣ショベルが使用せられ、機械力によりて採取せられた砂は、電車によりて自動的に壕の底から注砂場に運ばれ、灑水裝置を經由し、鐵管に各方面の充塡箇所に導かれる。而うして充塡に用ひた水は喞筒によりて坑外へ排出される。技術員の説明によれば、第一第二の兩露天掘が聯結せられるときは、其の巨壕は周回五里ばかりのものとなるべく、現に撫順驛外に建連る堂々たる石造の總ての大建築は、何れも皆取拂つて露天坑としてしまうのであるさうだ。大い

なるかな撫順、私は古城子露天掘の丘上に立つて、東西十哩、炭層深きところ二百八十尺、含炭量十億噸を越ゆると稱する、滿洲の大黎黑鄕を目のあたりに眺め、斯うした炭礦を他に三つ四つも持つてゐたならば、我國の將來が如何に心强かるべきと暫らく慾張つた考へに囚はれたのである。（五月十六日奉天へ歸りて）

渾河の永安橋

露天掘を見學して後、炭礦專用の電車に乘つて永安橋に赴く。此の電車の中へ多數の藝者が乘込み、私共の座席の間へ割込んだ。それは永安橋に於て私共の爲め午餐會を催されるので、撫順市街に居る是等の女子をして給仕の役目を勤させやうとするのだ。永安橋と云ふ所へ到着してみると、そこに一寸した樹林地があつて、林の中に泉水を設け、島尾の旅館部とでも云つたやうな平家造りの建物があつた。なぜに此地を永安橋と云ふかと訊くに、大正十二年支那官憲によりて、そこを流れる渾河へ橋を架けたからだ。も

つと古いところでは日露戰爭の沙河會戰前後に、露軍の左翼たりしリネウヰッチ軍が此河へ軍橋を架けた。すると夫れを我が鴨綠江軍の南海師團が占領して、撫順に居る敵を攻擊したので、四國橋と稱してゐたけれども、平和克復後、其の橋は支那に讓渡せられ大分破損してゐた爲、淸國では四國橋を撤去し、今の橋を架けたのである。私共の導かれた場所は永安橋の南岸にある炭礦の水源地附近で、殺風景の赭土の廣原に開けた撫順市街民の爲、今は之れを公園地と爲し、傍ら私共のやうな視察隊を引張つて來る大切な場所としてゐるのださうで、先般鐵道協會員の一團も、矢張り私共同樣の取扱ひを受けたと云ふことである。撫順市街の住民が永安橋によつて慰安を求めること、大連市民が星ヶ浦で命の洗濯をするが如きものであらうが、それにしては貧弱な公園で可愛さうにも思はれる。市街民と云へば撫順に幾許の人間が居るかと訊くに、戸數五千に近く人口三萬に及ばんとしてゐるとのことだ。日露役以前までは寂寞たる寒村に過ぎなかつた渾河涯畔の一角に、圖らずかゝる大市街を現出したのは炭礦の爲である。偉なる哉石炭。撫順の市街は滿洲各地のそれと同じく新舊に區別せられ、舊市街は在來の支那村落を擴

張したものであるから、市街は不規則狹隘で、日支商人之れに雜居し、炭礦從事員を顧客として生活し、中々繁昌を極めて居るが、新市街は滿鐵の經營であるから、道路は碁盤形に造られ、歩道車道の區別を立て、上下水道から電燈瓦斯に至るまで施設至らざるなく、小學校醫院、圖書館、公會堂等も皆內地に見るべからざる立派なもので、市街の狀は宛然として歐米の住宅街のやうだ。永安橋の話が再ひ撫順へ逆轉して申譯はない。急いで引戻さう。さても私共は永安橋で折詰辨當に酒、麥酒、サイダーなどの飲料を給せられ、お定まりの歡迎辭に兼ねた撫順に於ける炭抗事業の大體講釋を聽問し、例の同行藝者から酒の酌をせられたのち、再び電車で運ばれ、モントガスで下車、モントガスと云ふのは、發電工場並にそれに連る硫酸工場、骸炭工場を總稱して呼ぶ通稱である。發電所は二萬二千五百キロワットの發電能力を有し、そこにモンド式及びリム式ガス發生爐並に副產物採取の裝置を備へ、石炭を電化して窒素分をアンモニアに變化せしめ硫安を製出し、又タールを造つてゐる。ガスは汽罐の燃料に供し、之れから電力を得る。次にホルベック式微粉炭燃燒裝置を備へ、石炭を四萬分の一吋大に粉碎して汽罐の燃料

とし、瓦斯のやうに完全に燃燒させ發電する。そうして其の電力は動力用電燈用として炭坑内外に供給し、をまけに奉天に迄送つてゐる。此送電裝置は三千キロワットを有する。前記硫安製造用として及び滿洲各地の需用に應ぜんが爲硫酸が製造せられる外、骸炭工場では骸炭爐三十基を有し、現在では之れを石炭低温乾溜に利用しコーライト、低温タール、揮發油を製出、剩餘瓦斯は家庭用に供給して居る。タール蒸餾釜からはクレオソート油、ナフタリン、ピッチなどを造り、外に煉炭製造機により、一日百噸の煉炭ができる。是等を一走一目して撫順を引揚げた私の頭に、この大黎黒郷の印象が何時までも消えないだらうと思ふ。（五月十六日奉天へ歸りて）

北陵の車馬行

北陵と云ふところを二度三度見物に往くこともあるまいとは思ふたけれども、一行と共に同一行動を取らなくては、團体の秩序が亂れるのみならず、自分に於ても都合がわる

い爲、奉天の二日目の午前八時、都ホテルの一室に私と同居する小樽新聞の坂牛君と、支那馬車に合乘して旅館を發した。御者は印度人のやうに眞黒の顏をした、根性の惡くなさゝうな男であつた。支那馬車は三人迄は同乘できるけれども、普通は二人で乘るやうだ。此日も天氣は快晴で、朝から强い風が吹いてゐる。御者が一鞭呉れると、私共の白馬は浪花通りの十間道路に砂塵を揚げて驅け出し、やがて新市街を拔け、郊外の恐ろしい凹凸道をドライブする。時候が好いので、途中北陵の方向さして練り行く幾組もの團体に出會つた中に、奉天第二小學校と書いた紫の校旗を押立て、支那服の男教員を眞先に一隊の支那小學校生徒か進行するのを見た。男生徒は何れも學生帽に洋服で、內地人と異ならぬけれども、その洋服は聊かダブ〳〵してゐる。行列の側には英國あたりの少年義勇隊のやうな服裝をした稍年長の少年が小旗を持つて、約二十人の間に一人づゝ平均でついて行く。男生のあとは女生徒だが、之れは大抵支那服で、女教員は黒裳白衣に紅いバラソルを翳してゐた。私共の馬車は小學生徒隊を後にして曠漠たる赭土の大原野を走りつゞけると、今度は朝鮮中學生の一隊に遇つた。教員は何れも例の白いツルマ

キをしてゐるから直ぐ夫れとわかる。惡路の爲幾度となく顚覆しさうになる馬車の中で右に左に身體をコツ酷く打付けられ、搖りあげられながら、どうにか北陵に近づいて灌木の林の中に入ると、あたりには梨のやうな樹木が立ちならんで、白くて細かな花が皎々として滿開してゐた。北陵の壁外には私共の一行を當込んだものか、或は昨今觀光客の絶えない爲か、幾十人とも知れぬ支那人の露店商人が、樹蔭に店を張り並べ、非常の賑はひを呈して居たことは、先年に於ける物寂しい初秋の訪問とは大分樣子が違つてゐる。さて馬車を棄て門を入ると、そこには支那官吏や軍人が私共を待受けてゐた。折角やつて來たのであるから、私は一同と共に念入りに見物する。奉天からこゝ迄は約一里支那里にすれば十里と稱してゐる。北陵一名昭陵とも云ひ、大宗文皇帝の寢陵であることは事新しく述べるに及ばぬ。陵のできたのは崇德八年、我が寛永十九年に當る。通路は、石甃を敷き通路の中央に碑殿、碑殿の後に三層樓の降恩門が嚴めしく建ち、そのうしろには陵碑を安置する奥の院即ち明樓あり、明樓の後の土丘が墓だ。四方は高さ二丈餘、幅一丈餘の煉瓦壁で積んである。滿洲には松林が極めて稀であるけれども、こゝだ

けは全陵松杉蓊鬱として茂り、境内の掃除も行届いて居るから、古蹟としてよりも遊覽地として價値付けられてゐるらしい。面白いのは通路の左右にある巨大の石像で、豹、獅、馬、駱駝象の五動物を各一對づゝ据えられてある。坂牛君も寫眞機を持つて來てゐるから互に材料を狙つてあるくうちに、支那人の家族らしい一行が來た、その中には妙

支那少年と翁

齡の美人もあれば老婦も居るから、之れぞ屈竟の配合とレンズを向けたとき、彼等はさも驚いた風で逃げ出してしまつたから、二人づれの少年を引張つて來て石像の前に立た

せると、彼等は厭な顔を見せず笑ひながら寫させて呉れた。陵内一巡後或建物の中で、支那の兵隊が張作霖の命を受け、私共にビールを饗應した。私は渇を覺えたのでサイダーの御馳走になり、再び目ばかり光る黒龍將軍の馬車に坂牛君と同乘し、馬首を南西に返へし例の見覺えあるラマ塔を眺めながら郊外を驅逐して舊市街に乘入れ、不潔で混雜な支那商區の狀況を車上から見物し廻つた。市街へ入つても黄塵の起つことは郊外と少しもかはらず、殆ど火事場を行くやうに目も口も開いたものではない。併も馬車や人力車や荷馬車を曳く夥しい支那人が頓狂聲を出して呼び立てるので、只モウのぼせあがるばかりである。漸くにして舊市街のうちに在る滿鐵公所の建物に入つて、幾つものバケツに汲んで出した冷たい水で顔を洗ひ口を漱ぎ、一室に入つて茶を飲みながら「隨分ひどい埃でしたな」と口々に挨拶を交した。滿鐵公所は、滿鐵會社が支那側と交渉する爲に特設しあるものにて、古い建物を利用したのか、但しは又故ざと恁麼風に建築したのか、構造は純乎たる支那式にできてゐた。（五月十七日奉天にて）

張作霖の饗宴

東三省保安總司令張作霖君から、素敵に大きな紅唐紙の狀袋に入つた招待狀が來た。封筒の表面には「井上忠雄先生」とあつて、中なる紅色の書簡箋には「五月十七日正午十二時潔樽候光、張作霖拜訂、席設省長公署」と書いてある。即ちフロクコートを着て、例の賓頭顱支那人の馬車に乘り、同宿の坂牛君と共に出掛ける。こゝで知つたがぶりを見せ一寸省長公署の何物たるかを説明すれば、之れは奉天省の最高行政官衙にして、省長は全省の民政各官及び巡防隊、警備隊などを管轄し、且つ政府の特別委任に依り財政司法、其他特別官署の行政事務を監督するのであるが、現在の奉天省長は王永江と云ふ人で、參議は干冲漢、政務廳長は玉鏡寰である。筆ついでに張作霖の官職にも註釋を入れて置く。一体支那各省軍政の長官は督軍であつて、地方により更に巡閲使を設置し、二三省の軍務を統轄させてゐるところもある。東三省の軍政は即ち此の例により、奉天吉林、黒龍江共各督軍を置き、更に東三省巡閲使を奉天に設置し、三省の軍政を統轄さ

せてゐるので、陸軍上將たる張作霖氏は東三省の巡閲使にして、奉天督軍をも兼ね、三省兵馬の全權を掌握してゐたところ、大正十一年春、所謂奉直戰爭なるものを起し、一敗地に塗るや、北京政府は直ちに張氏の官職を褫奪し、現在に至るも尙ほ復職させないので、張氏は北京との交渉を斷絶し、自ら東三省保安總司令と稱し、巡閲使其の儘の三省軍務統轄者となり、吉林、黑龍江兩省督軍を副司令と爲し、大盤石のやうに構へ込んでゐるのは、支那でなくては見られぬ圖だ。そこで保安總司令部の組織は、秘書、參謀副官、政務、軍需、軍醫、軍法の七處に分け、各々その處長を設け、別に顧問、諮議及び憲兵司令を置いてゐる。總參謀長は日本士官學校出身の少將楊宇霆氏にして、我が陸軍少將本庄繁氏及び陸軍歩兵大佐町野武馬氏は應聘顧問と云ふ名義で居る。閑話休題、本文へ引もどし、さて公署へ行つてみると、赤煉瓦造りの巨大の建物であるが、外形は支那式を取入れ、盆栽の鉢を門内に並べるなど大分文化的にできてゐた。門には衛兵が嚴めしく立ち、玄關へ上ると、其處にも兵隊が劍つき銃を持つて左右に控えてゐる。廣間で帽子外套を渡し休憩室に入ると、同樣の室が二個あつて、何れも大分古びてゐる。

待つこと約三十分の後宴席へ案内があつたので、元の廣間へ出で夫れを眞直に長い廊下を進むと、そこには幾づものドアがあつて、ドア毎に例の武裝した兵隊が左右に銃劍をピカ〳〵光らせてゐるのは省長公署のこと故、當然かも知らないが、劍の林を通らせるは至極滑稽であつた。最後につき當りの大食堂へ入るところには、尙更申す迄もなく武器で固められてゐる。食卓は籤引で、私には「張」の字が當つた他に玄黃などの文字のあるを見れば千字文で並べたものらしい。忽まち兵隊が氣を付けの號令らしいものを掛けると、主人公は宴席へ入つて來た。見れば黑色の支那服を着た痩形の小男で、一見平凡なやうで、よく見ると何處となくキカヌ氣の顏付をしたオヤヂである。寫眞では中々の美男子なれども、張君の實物はあんなに好い漢子ではなかつた。それよりか、張將軍の後に從ふた軍服の支那人達は風采堂々として天晴れのもの共であつた。主人公は「天」の席に着き、電通の光永星郎君が一行の代表者として、主人と相對しファイブレスを占める。そのうち追々と食品が支那服の給仕により私共の卓上に運ばれた。（五月十七日奉天にて）

聯ねた御馳走

元來私は交際少く世情に疎くして、支那料理と云ふものをツイゾ口にしたことはない。毎年上京の折屢支那料理の招待を受けたけれども、脂肪率の高い濃厚なものと聽いて之れだけは斷つてゐたのであるが、只今初めてこゝに支那料理にお目にかゝる機會を得たわけだ。先づ午餐菜單即ちメニウを一覽すると下の如く記されてある「午餐菜單　一紅扒魚翅、二清湯銀耳、三炸高力蝦、四扒龍鬚菜、五生菜鮑魚、六辣子鷄片、七八寶甜飯八紅燒黃魚、九清蒸塡鴨、十四喜豆腐、十一一品湯麪、中國民華國、十二年五月十七日奉天省長公署」然し之れは純支那式ではないと見え、器物だけは洋皿を用ひてあつた。而うして一人宛に長い箸と匙などを付けてある。やがて卓の中央へ運ばれる料理を、其の箸で皆が摘まみ取り、汁氣の物は匙で掬ひ取るのだ。献立の第二は白きくらげのスープで全く洋式にできてゐる。二は先づ魚の塩干のやうなハムのやうなもの、三は小蝦の

塩煮とでも云はんか、四は内地の海濱に生ずる野草防風に似たもので、先づ防風の酢味噌と稱してよい。五の鮑は變な工合に煮てある。六は唐辛子をケンにした鷄肉。七は牡丹餅と思へば間違ない。八は鯉の煮付で、九は鴨の丸煮、十は豆腐のあんかけ然たるもの。十一は普通の素麵。それから酒は奈良のあられ酒を薄めたやうで、あれよりは淡泊で飲みくちが良い。それに氷砂糖を各自適宜に摘み入れて飲むのだ。天の卓を眺めると主人公もツマ〳〵と食つてゐる。一つ鍋へ箸を入て食ふのは變な調子だが、そこに親しみが有つてよいのかも知れぬ。かくて最後の素麵入りの大鉢が出たときは、洋食のデザートコースに當るのか、主人公はスックと立ち、其の横に坐つてゐた通譯陶尙銘君が代理に日本語で口上を讀みあげた。陶君の日本語は一通りのできであるけれども、中には下品な言葉が交つてゐる「さうして吳れ」「あゝして吳れ」などは耳ざわりになつた聞けは此人は東京の帝大を卒業した秀才で、唯今の職は交渉署日本科長と云ふものであるらしい。演說の意味は日支親善の爲、新聞記者諸君の努力を望むと云ふやうな外交辭令で別に變つた點もなかつた。宴會終り紀念撮影があつて、張作霖君は廣間の右手にある督

軍の居室へ姿をかくしたが、室に入るときも、兵隊が幕をあげて之れを迎へ入れた。渡鮮前内地の新聞に、張將軍の第四妻が馬賊に捕はれたとあつたけれども、其後あれは何うなつたか、虐殺されたらしい風説をも耳にした。四人も持つて居れば一人位は何うでも好かりさうなものだとも考へられる。同行の坂牛君は張作霖に書をかいて貰うのだとて絹を携へて來たが、教育の主腦者何とか云ふのが「將軍は絶對に字を書くことはない」と云ひ聞かせ斷つたさうだ「それでも西洋の新聞に一度將軍の字と稱するのが現はれた」と云ふと「あれは秘書のかいたので張閣下は決して書かぬ」と說いたので、坂牛君は空しく其の絹を携へて退出した。張訪問の歸途私共は舊市街を通過して宮城拜觀と出掛けた。之れへ往年一度入つてみたことがあるけれども、大勢のつき合ひ故、又一緒について門を潛つた。之れは奉天唯一の古蹟として、內外旅客の參觀せねばならぬところのものだ。建ものは清朝の崇德二年の建造に係り、清の太祖高皇帝並に太宗文皇帝の宮居したあとである。東西三十三丈南北八十九丈墻を以てめぐらし、正門の左右に東華門文德房及び西華門、武功房など云ふのがある。正門は大清門と稱し、門へ入つて東樓を飛龍

閣、西樓を翔鳳閣と云つてゐる。この二閣は參朝する文武大官の溜りになつてゐたもので、崇政殿は皇帝が政治を裁斷した所で、今も玉座を保存してある。鳳凰樓は三層樓にして、上に登れば奉天の全市が見渡される。私はこゝで一二回アンスコを使ひ、尙坂牛君の機械で同君をも寫した。今都ホテルへ歸り湯に入つて机に對つてゐるところであるが、今夜八時四十分臨時列車で大連へ出發することになつてゐる(五月十七日奉天にて)

滿洲は面白い

張作霖君の招宴に於ては、主客互に政治談を避けやうぢやないかとの申合せであつたから、私共は其の心持で出席した。然し何を言つても一方は新聞業者の團體と來てゐるので、主人側の文武官に對つてサマ〳〵な質問を試みる。張作霖君の「天」の座席と私共の「張」の席とは大分間隔があるので、支那側に於ても何構うものか位の調子でドシ〳〵質問に應ずる。其中の一武官に昨年の奉直に參加したのが居て「アノ時、日本がウント

後援をして呉れたなら、決して負るのでは無かつた。我々の間では貴國の冷淡不信義を遺憾に思ふてゐる」などと恨みつらみを述べるから「直隷軍の背後には英米があると報せられた、あれは事實か」と訊くと「事實とも〳〵、それは最も露骨なものであつた。我々が一敗地に塗びれたのは偏に英米のためだ」と憤慨する「然らば奉直再戰は如何」「イヤ再戰はあるまい。裏面の事情によれば奉直間の關係は大分緩和せられてゐる」「それは確かな事か」「間違ひはないと思ふ」「スルト張作霖將軍と吳佩孚とは手を握るわけか」「イヤ夫れは面倒な問題で、兩者は其の性格に於ても恐らく一致することはできまい」「張作霖將軍は、いかなる人物か」「云ふ迄もなく武人であるから軍備の充實に熱心で、陸軍無線電信の如きは、從來齊々哈爾、吉林、哈爾賓、奉天の四ヶ所に在る物を以て滿足せず、新たに移動式の物を二十機獨逸へ注文した。飛行機も增設することになつてゐる」「飛行機があるか、それでは今日奉天の空を飛んでゐたのは平壤から來たものかと思ふてゐたが、あれは奉天の飛行機であつたか」「さうとも」「文化的施設は如何」「文化的施設は最も意を用うるところである。ことに教育には骨を折つてゐる。その結果滿

洲の兒童は近年大いに智識を增進して來た」「張作霖將軍は日本に對していかなる考へを持つて居るか」「それは分らぬ。然し日本近來の態度は我々の遺憾とするものが多い」「張作霖と日本の關係、それは双方共に腹藝を要することであらう。今日の我々の驩會も亦その腹藝の一つであると言はゞ云ふべきである。滿洲及び東内蒙古七萬四千方里、二千四百五十萬の生靈は、今ゝさに張作霖君の統治下に在るのであるが、北京政府は之れに對して指一本差すこともできず、奉直戰に失敗を取つたと云つても、此滿洲王の位置には微動も與へることはない。この事實は頗る重視すべきであらう。聞けば日本人にして張作霖君の顧問、平たく云へば居候たるものは、本庄將軍など云ふ頭株以外に隨分澤山あるらしい。中にも軍人あがりは待遇よろしく、少尉か中尉ぐらゐは、佐官若くは將官格で取り用ひられ、馬車や自動車で乘り廻すこともできるとは、滿洲ほど面白いところは有るまい。尤も俸給は安直で、佐官將官と云つても。年俸五六百圓とは心細けれども それで以て立派にやつて行けるらしい。我が社編輯課の蘇江伍長、偉軀にして莊齡、文才豐にして風采また揚がる。君來つて奉天の幃幄に參じ、金色燦然たる肩章胸章を支那

軍服に輝かし、白馬に鞭ちて滿洲の野を馳驅するの意あらば、どうだね早速やつて來ては、と云つたやうな手紙でも出さうかと思つてみたけれども、さりとて顧聘仲介の依頼を受けたわけでも無いから廢した。私は今此の戯談のやうな本氣のやうな記事を奉天から大連行の列車の中で書いてゐる。一体滿洲どころか本國の支那其のものが戯談か本氣か見當もつかず、想像もできない不可解の國、謎の國だ。どうや一睡でも貪らう。（五月十七日夜大連途中）

宿不足の大連

大連といふところは、以前は人煙稀疎の一漁村で、長汀曲浦徒らに蘆荻の茂つた物寂しい土地であつた。古い時代では例の八幡船が支那を荒らした時分に、此處へもヤツテ來たと云ふことである。降つて千八百六十年英佛聯合軍が天津、北京を攻撃するに當り、英國艦隊は大連灣を根據地として之れをビクトリヤ灣などと勝手に名を付けたものだ。

それより降つて直隷總督たりし李鴻章が旅順、大連を經營するに及んで、獨逸軍人ハイネツケンと云ふ男の建策により、柳樹屯に要塞を設け金州半島の要港とした。二十七八年戰役の際我邦は之を大連港の柳樹屯と呼んだが、三十七八年戰役に至り露名のダリニーを大連と改めた。露國は前に旅順大連を清國から租借すると、之れを一大商港となす計畫を立て、二千十八萬ルブルの豫算を以て、沙河口以東の耕地三千二百六十餘町歩を買收して、ダルニーに築港工事を起し、官衙區と一般市街との區域を定

北陵石獸前の翁（其一）

めてドシ〳〵建物を增加して往つたところ、我軍三十七年に此露國の新市街を占領し、翌年大連と改めたのであつて、初めは關東州民政署の手で民政を行ひ、のち關東總督府民政部の下に民政署を置き、純乎たる民政的都市となつた。かくて大正四年市役所ができて自治制度を認められ、各方面の設備と機關とは次第に完成し、市民も亦之れに從ふて增加するばかりで、現に戸數一萬八千、人口九萬七千と註せられて居る。廣々としたコンクート方塊板の大道路を通じたる此市街は、內地に見るを得ざるもので、大廈高樓は到る處に巍然として聳たち、電車の間斷なく馳走するさまは、初めて此地に入り來る者をして目を驚かしめる。ところが近來大團体の觀光客が次から次と當地へ入り込み、鐵道協會の團体などは四百名に上る大一行であつた爲、旅館が足りないと云ふ始末、只今私の宿泊する鎭西館の女中の談話では、待合、料理屋にまで旅客を押込んだ。其のため大連の待合に於て一種の異つた耽溺的情緒を求めやうと望んだ人々は大きに失望したらしい。着大當日の大連新聞を見ると、珍客が來る毎にそれを容れる宿屋がないので青くなつて奔走して居ることを笑ひ、會場の如きも一もヤマトホテル、二もヤマトホテル

で、差合ひの時は女學校の講堂や商業會議所の階上を借用するとは何たることだ。グレート大連もあつたものではない。まことに悲慘な滑稽ぢやないかなどと、地方官民へ痛いのを一本入れて居た。成ほど大連には未だ公會堂はないらしいが。然し公會堂はなくとも、それが大連の耻辱ではない。ヤマトホテルのやうな大旅館が果して我國の何處にあらう。之れを建てるに滿五年の星霜を費したルネサンス式六百六十坪の建物の中に、百十五の立派な客室を有し、蒸汽温水及び温氣暖房、昇降機、電話自働寫眞機、電氣時計、電燈、電扇、瓦斯燈、非常消火栓、安全庫、郵便收集裝置、浴漕等、何から何まで備はらざるなく整はざるはない。食堂は三百人の宴會位で緩つくりしたもの、此外に普通食堂、別食堂もあり、球戯室、讀書室、應接室、理髮室、酒場は勿論、自働車、馬車部、洗濯部があつて、管絃樂隊が食堂で奏樂する。之れならば一もヤマトホテル、二もホテルで澤山ぢやないか。公會堂論がやかましくなつてゐるのは、大連の慾望が增大したのである。若し夫れ旅館の不足に至つては、ヤマトホテル以外に遼東、花屋、盤城、大連、日本橋各ホテル、春田、吾妻、鎭西、桑島、長崎屋、富士屋以下多數の相當旅館

があるにも拘らず、猶且旅客を収容しきれぬほど、千客萬來を極めるのは、大連の市運がそれ丈け隆昌になつて來たからである。私は今朝停車場へ降りると、旅館にも入らず直に馬車にて沙河口の滿鐵工場へ出掛けたが、その途中即ち常盤橋から工場に至るまで大原野が次第に市街化し、そこに石造家屋が棟を並べつゝある狀況を見て、自分が越中に於て小住宅を建てるにすら容易に其の土地を手に入れられないで困り果たに比べ、デリケートの氣分が雲の如くに消散してしまつた。その時私は徳島日日の市原理三翁と支那馬車に同乘してゐたが、市原君も亦「滿洲へ來ると內地へ歸ることが嫌になるのは尤もですな。之れぢや內地の市街は鼻をつくやうな氣がする筈です」と分別顔の眞面目さで言つて、アチラコチラと見渡されるのであつた。（五月十八日大連にて）

沙河の百雷郷

大連の市街から西北四哩の地點に、滿鐵會社の沙河工場がある。往年當地へ來る時には

沙河口を見なかつたのみならず、近頃の新聞紙上に於て、同工場の職工幾千を解傭したとか云ふ記事も出てゐたから、之れを知らなくては滿鐵を語ることはできないであらうと思ひ、私の爲に指定せられた旅館へも立寄らず、大連驛に到着すると、そこから馬車を驅つて直に工場を訪ふた。尤も大連沙河口間には電車も通じて交通は極めて利便であるさて沙河口へ來てみると、そこは既に滿鐵工場を中心とした立派な工業市街を形ち造り市街地の面積は二十萬坪に近しと註せられて居る。私共は工場構內の假屋に於て折詰辨當の朝餐を終り、然るのち場員の案內を受けて工場を一巡した。一巡と云つても夫れは却々容易の業ではなく、五十五萬四千坪の敷地內に二十七萬七千二百坪の建物が列んでゐる上に、尙十一萬一千五百八十四坪の工場を增設する豫定になつてゐる。既設建物の棟數は五十個と算せられるが、專門的智識無くして夫れらを一々觀覽し廻るのに相當の疲勞を覺えさせた。殊に連日の快晴に暑氣愈々加はれる折柄、百雷の一時に落下するが如き凄じいハンマーの響きや旋盤の音、赤く靑き火花の飛散つたりするなかを通過することとて、誰も彼も皆眞赤な顏から引切りなしに流れる汗を拭ふに忙はしかつた。私は

曾て熱田の車輛會社に於て、車輛製造に關する機械作業の大体を見學したことはあるが機關車の製作を見るは今が初めである。併も其の機關車たるや、內地の鐵道に使用する物の二倍大、輕便線の物などに比べては三四倍も有らうと思はれる怪物で、半成品から稍完成した物まで幾つかゞ工場內に列を作つてゐるのは壯觀であつた。工場の區別は組立、旋盤、製罐、鉸鋲、仕上、鍛治、鑄鐵、鑄鋼、眞鍮、模型、貨車、製材、客車、塗り、裁縫、車臺、電氣工具などにして、別に動力室あり、分析室あり、倉庫あり、一ケ年間に於ける車輛の製作は、機關車二十、客車四十八、貨車六百、外に修繕をするのが機關車二百四十、客車三百六十、貨車三千六百、この作業に要する一日の電力一萬一千キロワット、蒸汽九十萬封度、壓搾空氣一百二萬立方フートと印刷物に記されてある。撫順が炭坑として東洋第一であるのみならず、露天掘に於ては世界無比として誇つてゐると共に、沙河口工場の車輛製造も亦同じく東洋第一であらう。當工場の沿革を聞くに明治四十年會社創業當時の工場は、まだ大連驛の構內にトタン屋根の粗末な假建物を設けたばかりで、規模も小さなものであつたが、四十四年に現在の工場が、竣成して斯く事

業の發展を來たしたのである。最近淘汰減員後の職工は三千二百一名で、支那人と日本人とは約半々になつてゐる。賃銀は支那人の最高日給八拾錢とか八拾五錢とかにて、六七拾錢は上等の部に屬する。それで彼等は不服も言はず、眞黑になつて力限りに働く。撫順でも其通りである。大連の或邦人は支那人の車夫を年中雇きりにしてゐるが、車も食事も車夫もちで月給貳拾圓、それで滿足してゐるとのことだ。沙河口工場の鍛治場に於て、朝から晩までアノ大きなハンマーを下してゐるのも日本人ではなくて支那人だ。英國人は牛の如く鈍重で忍耐に富むと云ふけれども、支那人と來ては論外に屬し、實に恐るべく驚くべき糞忍耐力をもつてゐる。然らば支那人は扱ひ易きやと言ふに、工場當局者の說明によれば、日本人職工が全精力を傾けて範を實行に示せば、一言の訓戒を要せず彼等は忠實に勞働する。それ故未だ曾て支那職工に小言を言つたことはない。唯日本人職工を激勵するだけである。その上滿鐵の職工の子弟を敎育し、其の子弟をも職工として使用し、職業を世襲的のものとしてゐるので、支那人職工の一家は永久に生活の保障を得、安心して働いてゐると云ふことだ。此の方針の効果か否か、年々工賃は增加

すれども、製品は却て廉價で仕上り、以前拾萬圓の機關車が八萬圓で出來、更に六萬何千圓とかで完成するやうになつたらしい。工業家は傾聽すべきである。工場巡覽を終つて旅館に入り、風呂に浴し午餐を取り、斯くて私は花屋ホテルに居る篠原翁父子と共に滿鐵本社に赴き、川村社長に遇つて挨拶を述べたが、川村さんは私共に對し頗る懇切であつた。（五月十八日大連にて）

提出案の樂屋

大連に於ける私共の大會では、滿洲各新聞社側の提出に係る、旅順大連不還附宣言案が問題の中心となつてゐた爲め、大會當日、會場なるヤマトホテル階上の別室に於て、同案に關する幹部會を開くことゝなり、私も其席に列した。然るに其の席上滿洲日々の代表者は、大いに支那新聞の暴狀を訴へ、彼等在滿支那紙は、山東回收の調子に乘り、頃日盛んに旅順大連の回收論を唱へ、我國を侮り輕んずること甚しきものあるが故に、此

際日本新聞紙の態度を明かにして、同問題に對し强硬の宣言を發表せなければならぬと主張するのであつたが、內地側には之れを不穩當となし、支那新聞紙の挑戰に應ずるは故ら平地に波瀾を起す嫌ひあるに付、寧ろ默殺するがよい。換言すれば滿洲新聞社側の提出案は撤回するに如かぬと說くものあつて、双方の議論に夫れ〳〵贊成者を生じ、形勢頗る面倒となり、かくするうちに時間は刻々進み、大會開會時刻は既に經過してしまつた。そこで仲裁論なるものが現はれ、滿洲各社から出た原案の字句を成べく穩當のものに改訂し、支那紙の反感を起さしめざる限り、宛曲に日本新聞界の意のあるところを中外に知らしむべしと云ふに決定し、滿州同業側並に反對論者側と折衝の結果、遂に原文を改め「旅大に於ける日本現在の位置は、世界平和の爲に動かすことのできぬものであるから、日支兩國の民衆は、之れを妨害するやうな言動なきことを希望する」との意味で大會へ持出された。大會に於て同案を決議したあとで讀み返してみると「平和を確保する所以なり故に」とやつたのは字句が拙かつた「所以なり」と云つたら「故に」は重複不用である。其の他あの文章は全國の新聞を代表するものとしては、文字の國たる

支那の同業者に突き示すに聊か氣恥しいものであると心付たけれども、要するに夫れは大會直前に於て折角立派にできてゐた原案を修正したからである。幹部會の席上、私は新聞協會内に對幹部反抗の潮流を認める。このデモクラシーの氣分は大いに注意し置く必要があるとのことを述べたばかりで、旅大に關する宣言案の議論に介在するのを避けたれども、あの原案修正は何處までも無用にして、苟くも在滿支那紙が我れを侮つて傍若無人の言を弄するならば、大會を機會に頂門の一針を加へ、在滿日本新聞紙に氣勢を添へてやらなければならぬ筈のものであつたと思ふ。私は大連に於て、青島から歸來した一商人に遇つたが、其の商人は大いに青島の還附を惜み、實際同地に於ける日本の施設を見ると、悉く永久的であつて、軍隊の宿舍と云ひ、官衙、學校の如きは云ふに及ばず農事試驗場の建物でさへも、内地に見るべからざるものであつた。之らを見ると我國は果して還附の意思があつたか何うかを疑はれる。それから市街の構成と云ひ各種工場と云ひ一として目を驚かさるゝはなく、實業的發展に於て世界に誇つてゐた獨逸の施設と之れを比べるも決して遜色はない。現に獨逸が青島を失つて後、一時非常に衰退した青

島の貿易も、日本人によりて之れを回復し、山東の文化をして其の面目を一新させたのであるから、山東還附の事なくんば、山東より南滿をかけて、支那の中原に臨み、日本の將來を幸ひすると共に支那の福利をも增進することができたと信ずる。然るに支那の手に渡つた山東鐵道に乘つてみると皆目運轉が駄目で、午後八時に着く列車は翌朝の六時七時になつて着く。停車場は塵芥だらけで足も踏入れられぬ。切符を買はんとすれば切符賣は城内へ遊びに往つてゐて汽車の音が聽えなければ歸つて來ないで、時間などはどうでも好いと云ふ狀態だ。それ故外國人はセメテ鐵道と青島だけは日本で持つてゐて貰ひたかつたと愚痴を溢して居る。山東にして此の如し。旅大を折角こゝ迄にして支那へ還附せんか、忽ち總ての秩序は失はれ、總ての文化施設は逆轉せざれば已まぬ。之れを我國で管理するのは東洋平和の爲でもあり、又東洋文化の爲でもある。斯う云ふ說であつた。（五月十八日大連にて）

自働式の電話

大連に於て特に私の目を惹いたものは自働式電話であつた。最も頻繁に電話を使用せなければならない私共新聞業者に取うては、文明の利益たる電話の恩惠を感謝せなければならぬ筈であるが、其の實電話の不便に愛想が盡き、動もすれば電話機を叩き壞したい位焦かしく思ふことがある。と云ふのは、電話の連結交換が、一々交換手なる人間の手を煩はすこととなつてゐる爲、その連結交換に屢々錯誤を生ずるのみならず、時として急用の場合に比較的長時間連結のできぬことが有つたり、甚だしきに至つては、交換手の感情の加減で、故意に電話の利用に妨害を與へられるやうな、奇怪千萬の事實さへあるからだ。然るに歐米各國に於ては、交換手無しの自働式電話なるものがあつて、此の機械に據るときは、絶對に前いふ如き錯誤を生ずることもなければ、故意に利用を妨げられる虞もない。この重寶な電話はマダ我邦に使用せられて居なけれども、大連だけには既に採用せられてあるから羨ましい。大連電話局は、日露戰爭當時に開設せられたものであるが、其の後累年加入者を增加し、從事員も亦之に伴うた爲に、局舍の狹隘を告

げ、四千名以上の增設不可能となりたるにも拘らず、一方には電話利用者は愈々增加するばかりにて、電話局の移轉並に大擴張の必要に迫つたと同時に、交換機の方式に就いても種々研究せられた結果、從來の手動交換では、交換手の拂底に苦しめられ、其の上支那人加入者六百名は、言語の相違より來る交換の困難を感じ居る事情もあるので、遂に自働式にあらためることとなつた。自働式は創設費に多額を要すれども、維持費少く、人件費を節約し得る點に於て經濟的にも有利と認められたのである。殊に大連の空氣は、乾燥し居るを以て、高壓電流の使用に適してゐるので、創設費貳百貳萬圓を投じ本邦最初の試みを斷行せらた。その起工は大正八年十一月で、十一年三月に竣成し、自働交換機の据付も既に大半出來し、去る四月一日から實用に供せられて居る。本機は今より三十六年以前に、米人の發明に係るものにて、發明の動機は、或人が急用で、發明者の店へ電話を掛けた處、交換手がお話中を喰はしたので、電話を掛けた男は他店に商品を注文した。後に之れを聽いた發明者は大いに憤慨し、人間の手を借りて交換を行ふ間は、到底電話の誤謬や不都合を免ることはできぬと感じ、爾來心血を注いで研究を積

北陵石獸前の翁（其二）

み、遂に他の發明家の助力をも受けてその目的を達したと云ふことである。然らば自働電話機は如何にして使用するのかと云へば、加入者各自の電話機に番號盤（ダイヤル）と稱するものが取付けてあつて、交話せんとする相手の番號の數字通り番號盤を廻はすと交話機が自働的に働いて相手の電話に接續する。それから受話器を耳に當て、番號盤の信號か耳に傳はるを確め、數字の最初の字の番號盤の指孔に指先を挿入し、指がストップに當るまで番號盤を右へ廻はして指を拔き、自然に番號盤の後戻りするを待ち、あとの數字をも同一方法を繰返し、全部廻轉し終つたならば、受話機を耳に當てた儘、相手の應答を待つ。かくすれば交換機から信號電流が相手の機械に送られて電鈴が鳴る。併も本機實行の結果は極めて良好にて、交換手の無意旨の誤謬若くは故意の不都合を全然防止し、大いに便利を居られるのである。現に私の投宿してゐる旅館の自働電話を使用してみたところ、何の造作ない簡易のものであつた。要するに大連なるが故に斯うした新機關の試みも敢行せられるのであつて、内地に於て自働式電話の普及せられるは何時のことだか分らぬ。然し畢竟我邦の電話は全部自働交換に據らなければならぬものである

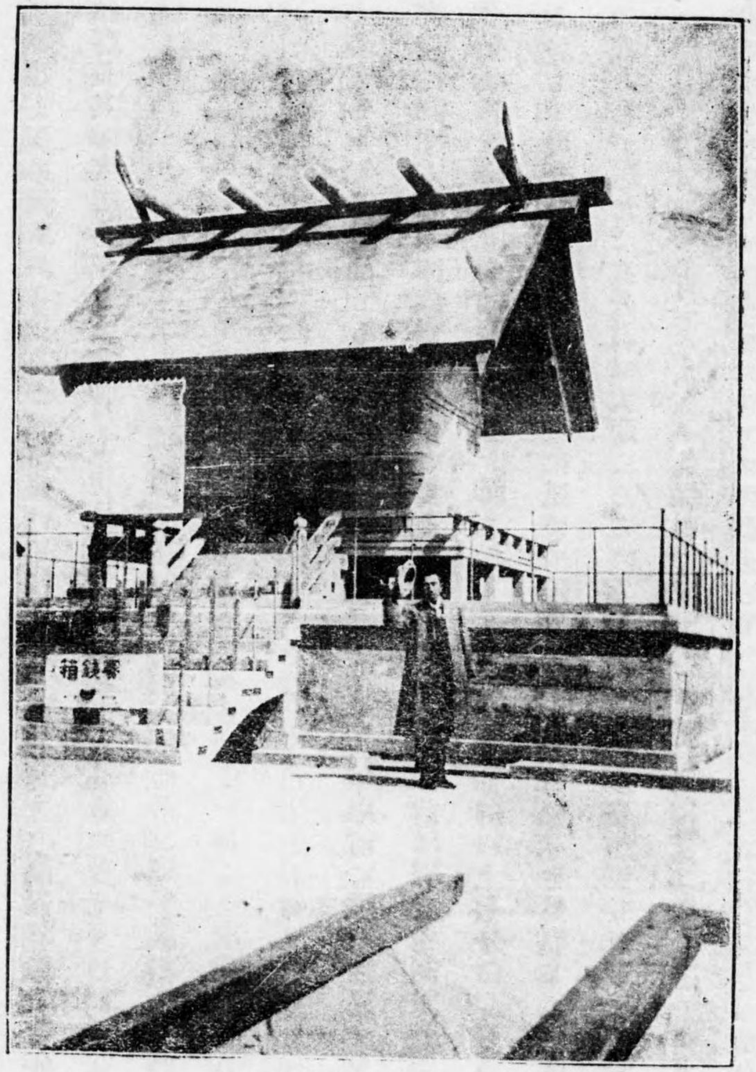
と思はれる。（五月十八日大連にて）

久保田老驛長

大連の第二日目は、旅順行の日程にて、先づ戰跡を巡覽し、然るのち關東長官邸に於ける午餐會に臨む段取になつてゐたから、私共は打揃ふて大連驛から午前七時四十五分發の列車に乘つた。此列車中に於て私は「あの男はまだ旅順に居るかな」と久保田驛長のことを想ひ出さゞるを得なかつた。八年前の昔、旅順驛で戰跡案内人の周旋を賴むと、ツーリスト、ビューローの何とか云ふ青年が甲斐々々しい洋服姿でやつて來て私の馬車に同乘した。然るに驛長の久保田君は「今日は貴賓の送迎が一つありますけれども、それ迄少しく時間の餘裕がある故私も御案内を致しませう」とワザ〳〵白玉山までついて來て頗る懇切の説明を試み「自分は日露戰爭の當時、最初から終りまで從軍し、乃木閣下はもとより各將軍の知遇を辱なうしたものである」と云ふやうな履歴ばなしに及び、

自餘の各砲臺は、遺物陳列所に勤務せる、之れも日露役の一勇士である人を紹介し、その人から説明を爲さしめることにして呉れた。而うして私共が旅順を立去るときにも、久保田驛長は、車窓の下へ來て私共の旅行の平安を祝するなど到れり盡せりの待遇を與へたものだ。さて今久しぶりに旅順驛へ下車してみると、停車場の構造は依然として昔の儘であるが、驛外に軒を列べる土産品賣店は、其の數を增加し、戰跡案内所の大看板や、休憩所、旅館等の看板が著しく目に立つやうになり、是等の家々には繪はがき、地圖類から銃砲彈の破片、表忠塔の小模型、銃彈製の火箸などを鬻ぎ、傍ビール、サイダーなどの飲料或は水菓子類をも用意し、互に競ふて戰跡巡覽の旅客を呼んでゐる。然し驛外の光景を眺めたのは、私共が馬車の上に身を置いた後のことであつて、それ迄は何處が何やら辨別するに由なく、人波に押されて漸く或一つの馬車に飛乘つたまでに過ぎぬ。ナゼならば停車場前には私共の爲に二百近い支那馬車がギッシリ並んで、さながら垣を造つたやうになつてゐたからで、其のため例の久保田驛長が居たか居なかつたに注意するだけの遑もなかつたわけである。戰跡の山路を攀登する爲に、旅順の馬車は全部

二頭立てになつてゐるが、二百名近き二頭馬車が、數丁にわたる長列を爲して蜿蜒曲折せる白玉山の傾斜路を進行するありさまを、馬車の中から見渡すのも亦却々の奇觀であつた。私共は表忠塔下の賣店前で馬車を棄て、先づ納骨堂に參拜した。納骨堂前には壯嚴な大華表を立て、砂石を敷き詰めた境内は一塵をも留めず綺麗に掃清められ、鐵柵を周らした社殿のあたりからは、俯して旅順港の全部を脚下に見渡されるばかりでなく、港口の左にある黄金山一帶、右に隆起する老虎尾半島、それから東方に目を轉ずると、勞律嘴より白銀山までの各砲臺、次第に北して東鷄冠山、吉永砲臺、其の前のコブ山砲臺、更に其の前の望臺砲臺、後にもどりて東鷄冠山、北砲臺、一ノ戸砲臺、東盤龍山、西盤龍山、鉢卷山、二龍山、松樹山、グルリと首を西に廻すと更に又案子山、その後の椅子山、今少しく遠くには陣笠、爾靈、赤阪、海鼠一七二、一三一の各高地から高崎山に至るまで、折柄の快晴に何れも皆歴々として指點することができた。私と馬車を共にした阪牛樽新君はソコ、ココとカメラを向けるに忙はしく、納骨堂を背景として同君の立ちたるところを寫すため「君一つ」と私にレリーヅを押へることを頼まれたので、私



旅順納骨堂の翁

も亦交換的に自分と納骨堂とを撮つてもらつた。然るときに納骨堂の背後に於て戰跡說明の講話が始まると云ふから、そこへ出掛けて行くと、圖らざりき講話者は、八年以前の久保田驛長其の人であつた。(五月十九日旅順から)

白玉山頭にて

講演者はテッキリ久保田君であると思ふたものゝ、それは八年以前に唯一回遇つたばかりで、容貌に關する私の印象は稍薄らいでゐるのみならず、以前は驛長の制服姿であつたのが、今は羽織袴で併も無帽である。而うして其の頭髮は半白以上七分白くらゐに變つてゐるから、幾分疑惑を生じ、誰ぞに訊いて確めたいと、あたりを見廻すと丁度そこに滿日の武井君が居た。武井君は大連にゐるのであるから、多分知つてゐるであらうと「あの、講演者は何と云ふ男ですか」「久保田です」「ぢや旅順の驛長ですね」「イヤ今は驛長をしてはゐませんけれ共以前はヤッテゐました」「今は何をしてゐます」「私のとこ

ろの旅順支局長です。中々能辯ですよ」「僕も一度、驛長時代の大將の說明を聽いた覺えがあります。彼れから續いて白玉山頭に立つて辯じ立てゝゐるとすれば定めて手に入つたものでせう」「それはウマイものですとも」私に取つては說明を聽く必要は無かつたけれども久保田君の談話を再び聽くことに少からぬ興味を抱いたので、適當の位置を選んで座席を占め、尙そこらを見廻すと、以前私を爾靈山まで引張つて行つて、私と一つに同山の紀念標下に立つて寫眞の中に入つたツーリスト、ビューローの若者を發見したイヤあの當時は若者であつたけれども、今では中年の立派な男になつて、矢張り甲斐々々しい旅行服を身に着け、細い華奢なキットの長靴を穿いてゐる。言葉を交さうかとも考へたが、向ふは年中多數の旅客を案內して居る者であるから、素より記憶の有らう筈はあるまいと思ひ返してやめた。かくて久保田君の講話は始まつたが、洗練せられた話術は、恰も伊藤痴遊君の講談でも聽く如く、非常に緊張した併もシッカリしたものであつた。談は第一回總攻擊から二回三回四回と進んでゆく、費すところの砲彈四萬三千六百六十發、小銃彈四百七十九萬八千發、死傷將卒四千四百五十四名と註せられる四回總

攻撃に至つては戰況愈佳境に入り、久保田君は眉昂り氣激して能辯雄舌あたりを拂ふの概を示した。四回總攻撃は十一月二十六日より十二月五日に亘つたものであつて、之れを撃退したるステッセル將軍が訓示を下し「偉勳は凡て汝等の所有なり、嗚呼汝等勇士よ、至難なる任務の爲に努力せよ」と激勵したことなどを思ひ出し、此壯烈な事實と露國の現狀とを對照し、其の驚くべき國狀の變化に戰慄を禁ずることができなかつた。私は今回の旅行に際して行李の中に一冊の「旅順攻圍軍」を收めて來たので、こゝで之れを取り出して十一月下旬の條を見ると、十一月二十九日付志賀さんの書信に「尙去る二十六日以來大戰鬪連續致し、小生は攻城砲兵の山頂に宿泊致し居り候處今や兩軍龍攘虎擲の眞最中に有之、餘り長きこととて一先づ第三軍司令部に歸り、未だ此義に關しては御書き送り申すべき時機に立ち到らず候折柄、滿洲を實用的に調査するは最早一日も忽がせにすべからざる事を悟り、山を下りて直に此編起草致候。然れは胸裡殊に多忙を極め居り候まゝ、行文の亂雜なること平常に幾倍するは自ら愍笑致し候へ共、當局者が愚陳の如き方針を以て、滿洲を疾く調査せんことを、偏に希望に堪ず候……」とあつた。

「旅大を棄てゝ堪るものか」とは忠勇な國民五萬の骨を納むる、白玉山納骨堂の一角に座し戰話を聽き戰記を讀んだときの私の感想であつた。（五月十九日旅順にて）

戰跡の小變化

納骨堂に於ける久保田君の戰跡說明講演が終はると、私共一行は、當日特に開扉せられたる納骨堂下に降つて、そこに安置せられてある戰死將卒五萬の遺骨を見たが、そこは石材を以て堅固に疊める地下室になつてゐた。納骨堂の石段を下つて白玉山南端の表忠塔に導かれ、一行が正面の廣い石階に集まつたところを撮影してもらひ、港內を眼下に收められる表忠塔の背面に廻つたとき、久保田君は戰話の第二席目を演じた。その冒頭は奏忠塔建設計畫から完成に至るまでの工事經過及び其の材料出處、資金の關係など頗る詳細を極め、戰爭に依つて巨利を博した商人等は、進んで寄附をするであらうとの發起者乃木將軍などの豫測がマンマと外れ、彼等商人が出し惜みをしたことを痛罵し、と

んだ所でとんだ連中の面の皮を引剝いてしまつたのは面白かつた。それから主として我が海軍の行動に說き入り、二月六日日露の國交斷絕するや息をつく間もなき同八日に我が聯合艦隊が旅順港外に敵艦を襲擊し、ツェレザウ井ツチ、レトウ井ザン、バルラダに大損傷を與へ、越へて十三日より十四日にかけ我が艦隊は砲擊を開始し、第一回閉塞隊天津丸、報國丸、仁川丸、武揚丸、武州丸が二十四日の夜半港口に突進し沈沒を試み、敵軍の心膽を寒がらしめたこと、三月二十一日老鐵山を越へて砲彈を市街に落下せしめたときの旅順市民の恐慌狀態、それから千代丸、福井丸、彌彥丸、米山丸の第二回閉塞廣瀨中佐の戰死、さては四月十三日旅順口外の海戰に於てペトロポウロスクが機雷の爲に爆沈して旅順の士氣が沮喪し始めたところへ、老鐵山を隔てた砲擊が愈威嚇力を發揮し、フランク男爵の家屋へ大きな奴がドシンと落ちて一家族の命を奪ひ、引續き新發田丸、小倉丸、朝顏丸、三河丸、遠江丸、釜山丸、江戸丸、長門丸、小樽丸、佐倉丸、相摸丸、愛國丸の第三回閉塞となり、我軍の勇氣愈壯なるに反し、旅順艦隊は港外に逃げ出さんとして果さず袋の鼠同樣となり、市民の信賴全く艦隊を離れ、此上は救ひを神に

呼ぶの外なしと敎會堂に集まり祈禱を捧げてゐる最中、我が砲彈の頭上に飛び來つたので、敎會から遁げ出すところへ一彈又一彈、市街の各所に彈丸の爆烈する混雜至極の光景など、二十一年前の活劇を目前に睹るが如く辯じ立てたけれども、之れを第一席の陸戰談に比ぶるときは、海軍に關する說明は遙かに平凡にして精采を缺く嫌ひがあつた。かくて私共は表忠塔下に待たしてあつた馬車によつて、白玉山に降り、山麓を西から南へ、南から東へ廻り、山の中腹に在る關東長官々邸へ赴き、午餐の饗應を受けた。伊集院長官は恰も上京不在中なるを以て、土岐總長が主人役となり、後庭の石階前に立ち丁重な歡迎辭を述べられた。その演說のうち、我國が旅大を租借し居るは侵略主義に由るにあらずして、日支共存、東洋及び世界的平和の爲であるから、之れを手離しすることは取りも直さず兩國の存立を危うくし、世界の平和を失ふわけであると力說し、私共の團體が前日大連に於て、旅大不放棄の宣言を決議したことに深甚の同感を表するところがあつた。午餐會後私共は再び馬車を驅つて東雞冠山に登り、こゝでも又一武官の陸戰談を聽き、露軍築造の掩堡、ゴンドラチエンコ將軍戰死の跡などを一巡した。此のあた

りの形狀は八年前に見たところと何等の變化はないが、掩堡内に繪ハガキ及び記念品などの賣店ができてゐたり、堡壘の中心地に「東雞冠山北堡壘」と刻した花崗石の標柱が立つたり、ゴ將軍戰死の跡には立派な記念石標が建つたりして、私共カメラ黨に撮影材料を與へた。露の勇將も亦瞑すべきである。ゴ將軍の戰死は三十七年十二月十五日で、我が二十八珊砲の集中により、咽喉部掩蓋を粉碎せられ其の破片に中つて斃れたものだが、露軍の士氣は之れが爲に遽に衰へたと云ふほどゴンドラテンコの武威が輝いてゐたのである。之れにて日程も終り、私共は東雞冠山を辭して歸途につき、直に旅順より大連へ引還した、國民が其の國家の爲に現はした、驚くべき奉公の精神と天魔鬼神にも等しい活動力とは戰跡旅順に於て知ることができる。國民の思想を健全ならしむる爲にも旅順は大切な場所だと思ふ。（五月十九日大連にて）

泰華樓の夜宴

旅順から大連へ引還した當夜、大連官民の私共に對する招待會があつたので、直に監部通り支那人經營料理店泰華樓と云ふのへ出かけた。泰華樓の建物は、銀行などの構造のやうに、中央部を屋根裏まで打ち貫きにして、二階三階共廻廊の建物の内部に付けてあるから、廻廊の手摺に身を寄せると、階下中央部の屋内庭園の青々とした樹木や噴水等を、俯瞰することのできるやうになつてゐる。二階には多數の小室があつて、當日は夫れらの各室を休憩所に充てられ、三階の大食堂を宴會場とせられた。例によりて一卓を圍むもの六七人づつで、私の食卓には三越呉服店出張所長中島吉平、方外軒主人加茂貞次郎、大連市會計課長江口正兵衛、特許辯理士久保通猷、山東大民主報滿洲總支社主任蔣民梯、同社記者某、外に小樽新聞坂牛直太郎の諸君が着席した。久保通猷君は、往年富山縣に警察部長（其のころは警部長と云つた）たりしことあり、その後高知縣の内務部長となり、臺灣の民政署長となり、官吏を罷めて一度代議士選擧を爭ふたけれども落選した。爾來杳として消息を聽かなかつたところ約二十年ぶりで茲に圖らず一堂に會した

のは奇遇とせなければならぬ。久保君は大連へ來て最早七八年になるさうであるが、特許辯理士の外久保商會なるものを設け、染料を商ひ、他に二三の製造業などにも手を出してゐるとの談である。警部長時代には覇氣と鑾氣とに充ち切り、その上盛んに遊廓荒しをやつたもので、井波の遊廓に耽溺したときなどは、恰も日露戰爭の初め我が艦隊が旅順港外に活動してゐた折柄とて、久保君自身の筆蹟らしい投書を新聞社へ寄せ「放蕩艦一隻井波灣を攻擊して敵艦數隻と舷々相摩し、砲戰終夜に亘り砲身熱して火の如く、我勇氣愈加はり敵艦に對し大なる損傷を與へ、終に之れを降伏せしめたり」などと奇妙奇態の消息を漏らして平氣なものであつた。時に富山の某樓に美妓あり、久保君之れを征服せんとして肱鐵を喰ひたる腹癒せに、警官を其の樓前に立たせ、登樓客の姓名を訊問させてゐると聽いたときなどは、私は之れを新聞紙上に書き立てゝ警部長の赫怒を招き、警察部へ出頭を命ぜられた。行つてみると久保君左右に數名の警部や石崎老刑事などを控へ、厲聲一番私を睨み付け「不都合な記事を書くと豫戒令を喰はすぞ」と叱咤した。尤も其のころ富山に在つた文士小林翠君や、現富山市會議長金山米次郎などにも豫

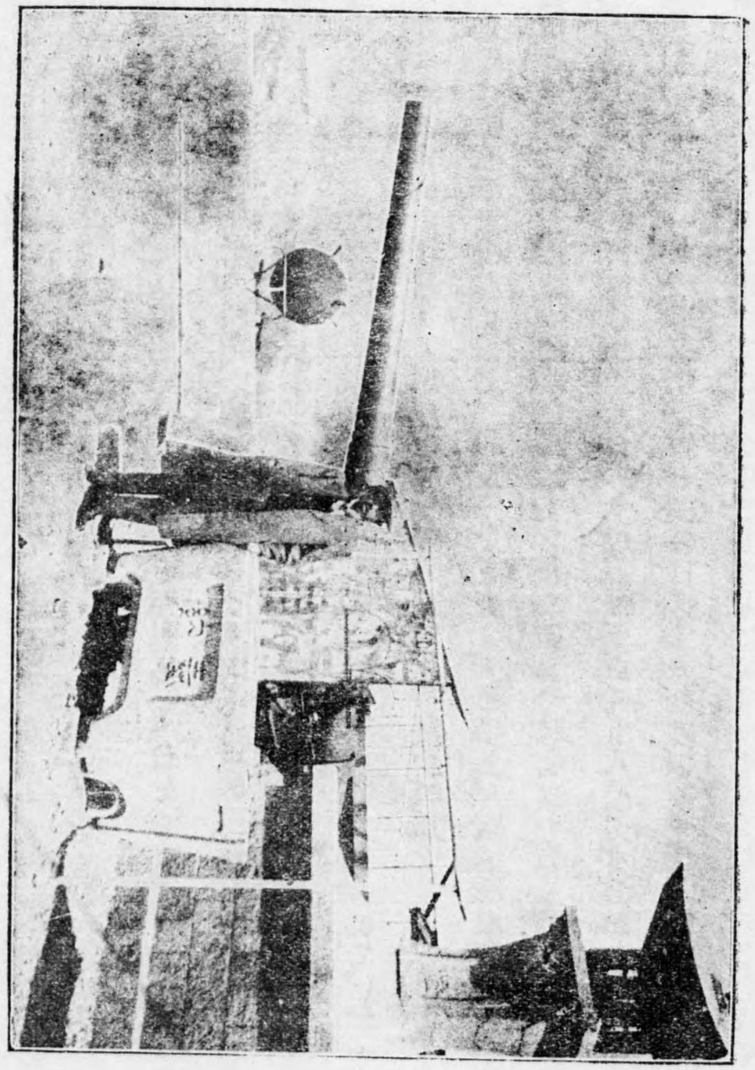
戒令を命じたやうに記憶してゐるので、久保君の鑾氣から推せば、或は私にも理由のない豫戒令を出すかも知れぬと考へたものゝ、こちらは左樣なことに驚く筈はないから、賣言葉に買言葉「やれるなら行つて見ろ」と席を蹴つて立去らうとするとき、久保君は俄かに態度一變「オイ〳〵、さう眞面目にならなくてもよいぢやないか、この色男を君のやうに窘めるもんぢやないよ」と笑ひ出すから、私も笑つて濟ませた。久保君の頭はヒドク禿てゐるので、周圍の髪を前の方へ引張つて來て梳き押へてゐたから、私は屢々其の禿頭を材料に、一陣の風で上置髪を吹まくられた爲某妓が禿頭に愛想をつかせ肱鐵を食はせたのだと書いた「色男を窘めるな」とは夫れを言つたのであらう。私は今かうした古い記憶を喚び起しながら當年の快漢久保君を見ると、精悍の調子は依然たれども僅かの頭髪さへ最早白くなり、容貌もグット老けてゐるので、成る程二昔の歳月は恐ろしいものだなと、一寸寂しい思ひに打たれた。（五月十九日夜大連にて）

支那樂の裡に

當夜の主人側を代表して大連市長村井啓太郎君が私共に對する歡迎辭を述べ「こんな片田舍へ能くまあおいでになつた」と挨拶したのは耳に立つた。挨拶が終はると支那音樂が始まり、支那藝者の唄が強く鋭い樂器に合せて聽神經に痛いやうな刺戟を與へる。私は例の黃酒だの紹興酒などを入れた錫の銚子で酌をせられ、チビリ〳〵と嘗めるやうに夫れを飲みながら、支那の宴會の音樂と云ふものは、まるで流行歌を歌つて來る門付けの乞食三味線だと思ふた。久保君は私の爲にいろ〳〵のことを說明して下さる。其の說明によると、泰華樓は極めて廉價で多量の料理を提供する爲、大連の邦人等は、邦人經營の料理屋へ行かないで、宴會と云ふ宴會は多くこゝで開かれるやうになつた。隨つて非常の繁昌で千客萬來の体である。之れを見習つて泰華樓の向ふを張り、別に又新らしい支那料理屋を開業せんとして居る。支那人の勉强ぶりには迚も邦人は及ばない。料理ばかりでなく、雜貨類の如きも、邦人の店に比べ支那人の賣つてゐる物は一割若くは二割方は安い。內地から引く日本製品でも支那人の店で買ふ方が遙かに低廉であるから、

邦人でありながら誰しも日本商店へ往かないで支那人のところへ出掛ける。それは彼等の薄利多賣主義と、資本の豐富である爲、廉く仕入れるからだ。こんな內情を聽いてみると、大連市街の外形が大都會の盛觀を呈してゐるとは云ひながら聊か心細からざるを得ぬ。私共は前日滿鐵工場を參觀して其の大規模に目を驚かしたけれども、大連から滿鐵の事業を引去つたならば、果して何が殘るか。否大連のみではない、滿洲に於いて見るべきものは、撫順の炭坑にもせよ鞍山の鐵にもせよ、目星しいものは悉く滿鐵の經營であるから、全滿洲から滿鐵の事業を除いたならば、あとは恐らくゼロであらう。久保君の今日に就ては知るところなきも、以前の同君は官吏としてはヤマ氣たつぷりの性格であつたが、その久保君の口からして滿洲に在る邦人が何れも不眞面目であるとて慨嘆せられたことに徵しても、其の一班を推すに足る。在滿邦人等は口を開けば、齊しく共に政府の滿洲に對する政策が冷淡にして、國費を吝む嫌ひありと做し、盛んに不平を漏らしてゐる。例へば關東廳の國庫補助は目腐り金に過ぎないにも拘らず、一方に於て滿鐵の利益を年々一千萬圓宛も搖り取つて行くなどは不都合だ。金を投ぜなくては滿洲は

發展せない。金を入れると共に關東廳の權能を擴大し、自由の手腕を揮はしめなければならぬ。關東廳なるものを朝鮮、樺太、臺灣などの各政廳と同一に取扱ふなどは以ての外である。須らく滿洲だけは內地延長主義の政治を棄て〜獨立せしむべく、年々滿鐵より奪ひ去るところの一千萬圓も亦まさに關東廳に委讓して可なりと云つた風の氣焔を揚げられるのであるけれども、金の問題よりも更に重大の問題は在滿邦人の頭であらねばならぬ。滿鐵沿線の曠漠たる大原野は到底金力のみを以て經濟的に活用せらるべきものに非ずして、滿洲の開發は一に邦人の頭に據るべきであると信ずる。然るに其の邦人の爲すところは迚も支那人の勤勉努力に及ばぬとあつては實に情ないではないか。久保君は明日競馬大會のあることを告げ、久保君は之れに關係を有するに付是非觀覽すべく勸誘せられた。併も其の競馬には何うやら賭博が伴うものらしい風評である。然し私は日程多忙の故を以て出席を辭した。この時支那藝者が私の傍へ來て例の錫の銚子で酒の酌をするついでに、酒に入れる氷砂糖の大きな一片を一寸とつまんで藝者自身の口へほうり込んだ。（五月十九日大連にて）



白玉山頂の翁

大連港の俯瞰

大連に於ける最終の團體行動日程は、第一着に埠頭及び港灣を視察することになつてゐたから、私は二十日午前八時前、同旅館に滯在する福島民報の三瓶翁と馬車に同乘して埠頭事務所を訪ふと、先づエレベーターにより七階の屋上庭園へ案内せられた。極東唯一の自由貿易港たる大連港の全規模は、此處から一望の下に收さめられる。云ふまでもなく埠頭は滿鐵會社の經營する所にて、その以前露國の手中に屬してゐたものである。露國は東洋に不凍港を得んと欲し、關東州を支那より租借し、東清鐵道會社の名義にて一千萬留の豫算により港灣の築造を開始するとなり、取敢へず第二埠頭だけを完成したが、此第二埠頭の突出は延長千九百六十尺、幅三百五十八尺、水深二十尺乃至三十尺を有するものにて、一萬噸以上の巨船を横付けにする計畫であつた。尚之れと並行して第一埠頭の工事にも手を着けてゐたけれども、未だ完成に至らずして三十七八年の戰役

起り、大連は我軍の占領するところなり、戰後之れを支那より租借するや、滿鐵會社は漸次增築を加へ行き、第一埠頭を長さ九百六十尺、水深の如きも第二埠頭に等しきものとなし、兩埠頭の中間に於て更に中央埠頭と稱する長さ千二百二十五尺のものが出來上り、次いで又長さ二千尺、幅四百尺の第三埠頭が築造せられて、港を圍むに總延長一里一町餘の防波堤を以てせられた。その壯その雄、まことに偉觀である。私の傍に立てゐる事務員は説明すらく「大連の地方風即ちローカル、ウインドは北でありまして、當港の最繁忙期たる冬季には絶えず北の强風が吹いてゐます。然るに埠頭は北々東を指してゐますから、北風を斜めに受け、大型船舶を繫船する場合に時々危險なことがありまして繫船區を變更することもあります。露西亞が此の埠頭を建設するとき、どうして其の方向を北々東に取つたものか、其の理由は今に判明しません。一体埠頭は地方風を直正面又は直脊面に受ける方向に築造するのが理想となつてゐます。夫れは風に向つて船舶を繫留するのが最も便利でもあり安全でもあるからです。夫れにも拘はらず露國は妙な築造を試みたものであります。私の考へますには、此の埠頭を今少しく東方に向け航路に

對し便利なる方向を取つたならば、いよ〳〵北風を横に受け船舶の繫留に危險を加へると共に、之れを北方に向けたならは航路に對して不便となるから、止むを得ず北北東を指して埠頭を造つたのでありませう」專門にわたる斯うした問題に就ては、唯之れを聽問するばかりである。依つて港灣と氣候との關係を訊くと「左樣です大連の氣候は所謂大陸氣候でありまして、當港の最繁忙期には寒氣が强く、時々荷役の困難を感ずることさへあります。その上海水が氷結して船舶の發着か意の如くならぬこともありますけれども、埠頭所有の小蒸汽船中、大型の物には皆碎氷設備を施してありますから、氷結の爲に船舶の發着が不可能となるやうなことは有りません。左樣ですね、今日までに海水の最も厚く氷結したのは約八寸位でありませう。冬期には前申す通り北風の强烈なのが吹いて來ますけれども、船舶の出入發着に困難を感ずることは有りません。冬を除いて他の季節には地方的風として著しいものは吹きませんので、內地でやかましく言ふてゐる二百十日又は二百二十日前後の暴風などは當地に於て何の影響も感じません」かくて事務員は屋上高所から北方を差して「柳樹屯は彼のあたりで、西に寄つた灣底が臭水子

東方に出張つて大連灣を擁してゐる陸地が金州半島。灣口に點在して釜山ならば絶影島とも云ふべき役目を勤めてゐるのが三山島。それから方向を南に轉じ、大連市を隔てた一帶の山地のあちら裏即ち南方には老虎灘、傳家庄、星ヶ浦などがあります。之れで當港灣の地形の一般がお判りになつたならば、埠頭設備を實地に御案內致しませう」と私共をエレベーターで階下に送り出した。（五月二十日大連にて）

大岸壁の利用

事務所を出でて埠頭の岸壁に立ち、その堅牢極まる構造を見て居ると、事務員は又說明を加へた「御覽の如く岸壁は總て混凝土の方塊で築き上げてありますが、最下部の方塊は一個四十八噸の重量です。この邊の海底は粘土でありますから、基礎工事に便利でして、單に割栗捨石を入れた丈けで岸壁を築造することができるのであります。防波堤の築造方法も之れと同樣になつてゐますが、上部の幅は狹きヶ所に於て十尺、廣い部分は

三十尺です。基底部の兩側には無數の捨石を入れてありますから、防波堤は安固になつてゐます。此の捨石は埠頭北方の對岸なる海猫島を碎いて取つて來たものです。海猫島と云ふのは、曾て李鴻章が大連灣防備の爲に砲臺を築造したことのある島でありまして全山岩石からできてゐるものです」「岸壁の上に短い柱がありますがあれは繫船柱でせうね」「左樣です。百尺宛の間隔を置いて立てゝあります。然し滿潮の時には繫索の角度が大きくなり、暴風の場合に於ては船舶を時々岸壁から吹き離すことがありますから、岸壁の上端から四十尺を隔てゝ非常繫船柱を立てることになつてゐます。海水の干滿は平均差八尺でありますが、一ヶ月二回の大潮が來ます」「岸壁の區別は何うなつてゐますか」「石炭專用岸壁、輸入專用岸壁、輸出專用岸壁、輸出入混用岸壁、旅客船專用岸壁、礦石の輸出鐵材、木材、枕木などの輸入に使用する岸壁、石炭艀舟積專用棧橋、港則による危險物揚積の寺兒溝棧橋、沿岸貿易の戎克を專用する大山戎克埠頭、撒貨物の荷役に用ふる濱町の埠頭一名X棧橋などに分れてゐます。このうち旅客船の岸壁では、內地定期船は十九區を專用し第十區の修理工事が出來せば之れに變更する筈です。上海定期

船は目下第七區を用ひてゐますが、修理後第十二區を專用します。內地定期船は、大阪商船會社のバイカル丸（五、二四三噸）ハルビン丸（五、一六九噸）台中丸（三、二〇七噸）台南丸（三、一七一噸）の四隻が各四日毎に大阪、神戸、門司、大連間を定期運航し、大連出帆の際は長春發急行列車を船側まで運轉して旅客の爲聯絡を圖つてゐます。上海定期船は滿鐵航路船 榊丸（三、四〇一噸）と西京丸（二、八四八噸）で、大連汽船會社の手に運航され、各四日毎に大連、青島、上海間を往復するのですが、以上の定期船は何れも皆貨客混合船にして、貨物の揚げ積みは夫れ〴〵其の專用岸壁に於てやつてゐます。尙今年中には第十區十一區に跨りて建造中の鐵筋混凝土建坪百五十坪の岸壁上屋の二階を定期船客の待合所とする計畫であります。以上の他の旅客船も少くないので、之等は特定の繫船區なく、其の揚積荷の關係に依つて適宜繫船區を定めて居ます。要するに旅客船に對する設備は甚だ不行屆きであります。元來當港の生命は、滿蒙農產物の輸出でありまして、冬季の繁忙期に及べば、現在の埠頭も狹隘を感じ、時には三四十隻の沖待船を生ずることさへあつて、岸壁、上屋も亦其の輸出入貨物の收容に非常の不足を來し、己

むを得ず之等の貨物を野積にして、岸壁には聊かの空地もなくなるのです。それで自然貨物の收容に逐はれ、旅客設備を施す餘裕が無かつたのでありますけれども、上屋が完成すれば幾分缺陷を補ふつもりです。尙第四埠頭の工事が完成すれば、旅客船專用の岸壁を設け旅客に對する充分なる設備もできることと思ひます」目下增築若くは新築中のものは延長九百尺の丙埠頭、長さ二千尺巾六百尺にて第三埠頭と並行する第四埠頭、石炭專用のカーダンバー式埠頭の外寺兒溝棧橋の擴張、大山ジャンク埠頭の改築及び防波堤築造などで、大連埠頭は絕えず此種改良工事の爲に忙殺せられて居る。（五月二十日大連にて）

入りふね出船

港に關する智識を得んが爲に、大連に於ける船舶の行動及び其の作業狀況に就て更に細かに質問を試みると、事務員は下の如くに說明を加へた「總噸數一千噸以上の船舶は、

大連の港則に依り、水先人の嚮導なしに埠頭に着離することはできないのであります。夫れ故水先案內は船舶入港の場合に於ては小蒸汽船により、出港の場合には岸壁から本船に乘込み、その船舶を嚮導することになつてゐます。水先人は關東廳の免狀を有するもので目下四人居ますが、各自交替して其の任に當つてゐます。發着に要する曳船、押船は會社の小蒸汽船を使用し、繫船のとき岸壁の上屋と船艙との關係や風向きの工合により臨時の方向を取りますけれども、繫留には必ず出船の姿勢を取ることになつてゐます。左樣それは風向きの關係からであります。曳船は埠頭所有の小蒸汽船を以て依賴に應じ都合により小蒸汽船を賃貸します。給水は岸壁の給水栓から隨時隨所に自由にできるが、一栓で一時間の給水能力は先づ六十噸位です。沖合での給水には三隻の給水船がありまして、一隻の給水能力は一時間三十噸から五十噸であります。それから給炭ですが、貨物炭又は焚料の炭のみを積込む爲に入港する船ならば、石炭專用バースに繫留して給炭し、其他の船は岸壁に於て貨車から直接に積込み、或は又石炭艀船で海面から給炭することもあります。目下のところまだ機械的給炭設備はできて居ませんので、給炭

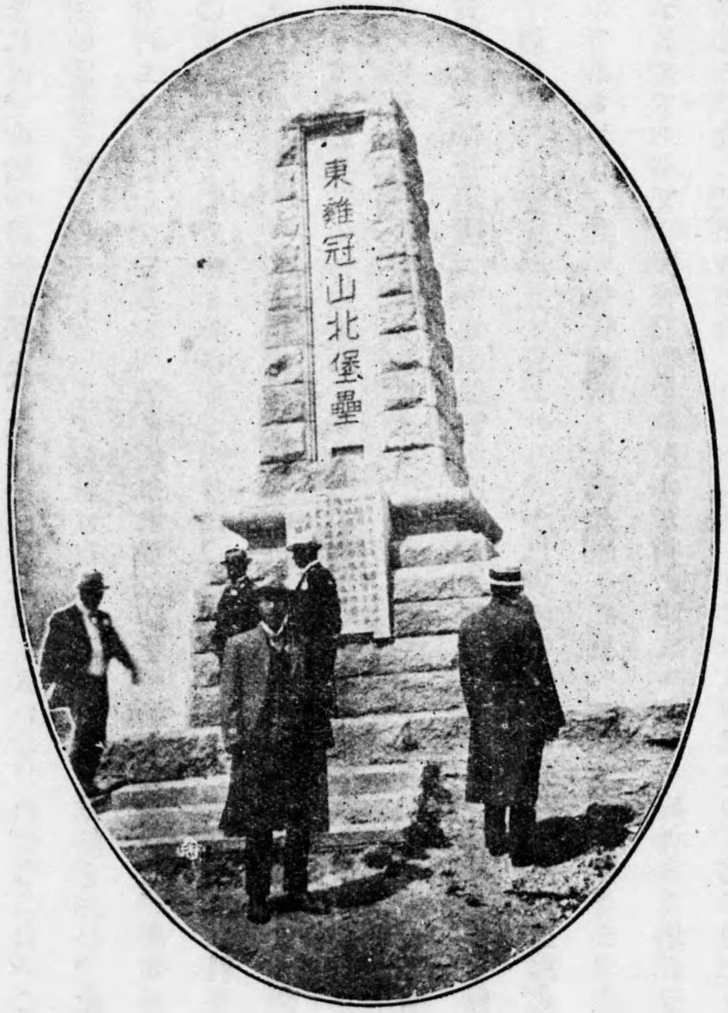
は全部苦力を使用して居ますが、其の能力は決して機械的設備に劣りません。沖合での給炭は艀船によりますが、近頃石炭の輸出が益増加して來ましたから、カータンバー式の石炭專用埠頭を設置することになつてゐます。荷物の陸揚げは船舶から提出する積荷目錄によるもので、貨物の事故に關しては陸揚げと同時に、船の責任者が立會つた上で責任を明かにするのです。陸揚げをした貨物に對しては埠頭に於いて揚荷目錄を作つて船舶に交附し、船と埠頭との貨物受授は皆此の目錄面の記載によりて決するのでありますけれども、船舶によつては事故貨物ばかりに對して目錄を作り貨物の受授を行ふこともあります。それで若し引渡しの場合、目錄に記載のない貨物を發見したときは埠頭は其の責任を負うことになつてゐます。起重機を要する重量貨物は、豫め船會社又は代理店から其旨を當所へ申込めば、當所では其準備をして置きます。埠頭に於て陸揚げすることのできぬ危險物の陸揚げは、寺兒溝棧橋で扱ひますが、然し其の數量の少きときは便宜之れを艀船にて沖取りにした上、寺兒溝の方へ持つて往くこともあります。それから又積込みのときは、船積申込書と船積指圖書によつて行ひ、荷物は一旦岸壁の上屋に

受入れ、更に船積みする元則になつて居ますけれども、直接船積みすることもありますと之れを直積と云つてゐます。市内から持込んで船積せんとする貨物は岸壁上屋へ入れて積荷主から受入れ決して直積みには致しません。積荷貨物に對しても積荷目錄を作り、其の船舶又は代理人へ交附するのです。特種の荷役設備としては、第三埠頭の基部に豆油撒き積用のタンク五基(容積各百二十噸)を有し、之れから鐵管を引いて第二十七、二十八、二十九、三十一の各區に於てポンプより撒積することができるのです」大連の埠頭は大連驛なる鐵道終點と相當距離を有する爲、その間に貨車聯接の軌道を敷いてあることは先に報道した筈である。そこで說明は鐵道貨物のことに及ぶ「埠頭の到着列車は日本橋下に於て大連鐵道事務所から引繼を爲し、之れを吾妻橋の解結場へ送つて仕譯の上夫れ〳〵指定の保管場所へ送り、埠頭から發送する貨車は吾妻橋の解結場に於て列車に編成し大連鐵道事務所へ引繼いてゐますが、埠頭到着の鐵道貨物は全部到着預け委託ですから、其の貨物の受入れ作業と申しても宜しいのです。此外市内から持込む寄託貨物は、指定日時に指定場所へ持込むのを計畫した上で庫入れし、出庫は荷主の請求に應

じて全部又は一部自由に之れを出すことができます」貨物に關する作業の狀況は之れにて大体諒解することを得た。(五月二十日大連にて)

埠頭の作業振

大連港の埠頭に於ては、同港獨特の作業として誇るところの繰替作業なるものがある。それは構内に於て保管貨物を一つの場所から他の場所へ移動する作業のことで、保管地域たる倉庫地域と船積地域即ち岸壁及び同上屋との間の貨物の聯絡を圖ることが其の主なる目的である。埠頭にては倉庫營業を兼營し、構内は大略、船積地域と保管地域とに區分せられ、岸壁即ち船積地域に於ては長期に渉つて貨物の保管を爲すことができぬから、此の岸壁と保管倉庫との間に貨物を聯絡移動させる必要を生ずる。この聯絡作業が繰替作業の本體であるわけだ。繰替作業は主として鐵道によつて爲せども、自動車、馬車、電氣トラクター、小車などに據ることもある。繰替作業の貨物の種類は一樣ではな



戰跡に立てる翁

く、揚荷繰替と云ふのは、船舶から陸揚したる貨物が、其の假置猶豫期間内に引取られないときには、次船の荷役關係上、之れを假置倉庫に入れなければならぬ。この場合に一々荷主の請求を待つ暇なきを以て、會社は自ら荷主の計算と危險を思ひ、此等の貨物の繰替を行ふことになつてゐる。故に假置猶豫期間を經過した揚荷は、全部繰替へらるべきものと看做して假置料を受けると同時に、繰替手數料として殘荷取扱料を取立てゝ居る。次に積荷繰替、一名船積繰替と云ふのがある。之れは埠頭に保管せられた貨物を船積せんとするとき其の保管場所より船積すべき岸壁へ繰替へることにして、現在の繰替作業の大部分は此種の繰替である。次に普通繰替と云つてゐるのは保管場所の關係により、貨物を一保管場所より他の保管場所に移す作業のことで、特に之れを保管場替とも云つて居る。次に發送繰替と云ふのは、小口貨物の貨車積は全部小口發送倉庫に於てなすものであるから、其の保管場所より該倉庫へ繰替へる必要がある。この繰替を發送繰替と云ふのであつて、保管貨物を發送する物に第二ホームへ繰替へる場合などには普通繰替となる。次に又配替と云ふのがある。それは十五間以内の距離に於ける貨物の保

管場替のことにて、改裝、看貫、包裝の修理などを爲す場合にこの作業の必要を生するのである。以上の各作業即ち船舶作業、船舶貨物作業、鐵道貨物作業、寄託物作業、繰替作業などに附隨する雜作業としては、農産物の包裝の取更へ、修理等をする「改裝」があり、農産物の斤數を計る「看貫」がある。例へば混合保管豆粕の斤數檢査の如きが夫れにて、尙其の他の農産物の受渡しをするとき、荷主の請求により斤數を計量することもある。看貫と改裝とは同時に起ること多く、各袋の中味を混合し、更に各袋の斤數を同一にして、包裝するやうな場合が夫れだ。其の他貨物にマークを刷り込むところの「マーク刷り込」又は馬車及び貨物自動車を有し、船客の依頼によつて其の配達を爲す「船客手荷物の配達」なども亦雜作業のうちに加へられて居る。伏木港を有する富山縣地方に取りて、大連港の作業組織を一通り知り置くは强ち徒爾ではあるまいと信ずる。

(九月二十日大連にて)

一萬人の苦力

大連埠頭に於ける各種作業は、殆ど全部人力に據るもので、この作業に從事する勞働者の全部は支那苦力である。埠頭の作業は總て埠頭事務所の手に行はれ、荷主直接に、或は又個人にて受負ふやうなことはないから、埠頭構内及び埠頭に繫留中の船舶内に於て各種作業に從事する勞働者は、一切埠頭事務所から供給するか、然らざれば、事務所の認許した勞働者でなければならぬ。事務所の勞働者即ち支那苦力は福昌公司から供給するもので、福昌公司は埠頭の東南山麓に苦力宿舍を持ち、そこに苦力を收容して居る。埠頭の繁忙期は冬季に在りて、昨今は幾分閑散であるにも拘らず、私共が埠頭を巡覽する折、疎服を纏ひ、若くは半裸体となつた百人ばかりの苦力が一團となつてワイ〳〵騷ぎ居るを見受けた。埠頭事務所員に就て苦力に關する説明を聽くと、下の如くに語つた。

「苦力は其の作業の方面から本船苦力、陸上苦力、石炭苦力に三別せられて居ます。本船苦力と云ふのは、船舶の荷役に從事するもので、陸上苦力は鐵道貨物の積み卸しや繰替へ、改裝、看貫などに從事するもの、石炭苦力は石炭のみの船舶と、貨車積卸しをす

るものであります。苦力には苦力頭があつて指揮監督を爲し、一人の頭の配下は本船苦力と石炭苦力に在つては四十名乃至五十名ですけれども、陸上苦力は大低二十人前後を一團とします。本船苦力は一船艙を作業の基準とし、陸上苦力は一貨車の作業を基準として、之れに對する人員數を以て一團と致してゐます。それから頭の下に第二苦力頭（支那語にてアールトウ）があつて、其の團体に屬する苦力の世話を燒き一名の先生（センシャン）が會計の任に當り、作業高などの計算をして呉れることになつてゐます。苦力の賄は其の團体の苦力頭が、福昌公司から受取つて部下に分配するので、福昌公司は苦力收容所の各室を團体の人員に應じて頭に賃貸し、頭は部下を之れに起居させて部屋代と賄代とを含み、之れを苦力から徴收するのです。苦力の性質は單純で其の生活も亦至つて簡易である。文化の程度は非常に幼稚で、自己の年齡を知らず姓名をも自署することのできぬ者が多いけれども。友誼に厚く團体の作業には中々重寶なものであります」

そこで苦力宿舍は是非視察ありたしとのことであつたけれども、私共の日程には省かれてあるので、獨り拔けがけをするのも如何のものかと遠慮し、福昌公司第一苦力宿舍碧

山莊の配置圖と云ふのを貰ひ受けて見ると、其の規模は頗る宏大にして一個の大市街を成し居てることがわかつた。收容所碧山莊と呼ぶは埠頭の東南約一哩程の山麓にあるので、明治四十四年關東都督府の許可を受け、滿鐵會社の承認の下に、相生由太郎君が創立したもので、同年中に大半の建設を終り、爾後增築に增築を重ねた結果、今日では第一、第二の兩收容所を合せ敷地總坪數二萬九千坪、宿舍延坪數七千九百九十坪に達し、優に一萬二千人以上の苦力を收容することができるやうになつて居る。宿舍の設備はオンドル式で、各戸に炊事場を置き、其の火氣を利用し全床を温める仕掛けであるが、排水は地形の傾斜を利用し、煉瓦又は粗石にて縱橫に溝渠を築き、其の先端を暗渠に通じて溪へ落してある。衛生を重んじ春秋二回に大消毒法を行ひ、天然痘、腸窒扶斯、虎列拉などの流行に際し無料豫防注射を行ひ、流行病患者を發生すれば、病室へ移す碧山莊內に個人經營の浴場あり低廉の入浴料にて入浴させてゐるさうである。（九月二十日大連にて）

働いて溜める

福昌公司碧山莊の苦力收容は季節によりて一定せないが、十二月より翌年の六月に至る繁忙期に於ては一萬二千人內外に上り、七月より十一月に至る閑散期は八千人內外の苦力がこゝに居住する。其の年齡並に苦力の出身地を區別すれば、二十歲乃至三十歲のもの五十五プロセント、三十一歲乃至四十歲のもの三十プロセント、四十一歲乃至五十三歲のもの十五プロセントで、彼等は主として山東省より集まり、山東省のもの九十プロセント、他は直隸省のもの八プロ、關東州のもの二プロである。勞働時間は、一日約九時間乃至十時間にして、之れも季節により長短を異にし、三月一日より四月三十日までは、午前六時半から午後五時半まで、この內食事休憩時間一時間を除けば、正味の勞働時間は十時間となる、五月一日から九月二十三日までは午前六時より午後六時に至るまで、このうち食事及び午睡時間二時間を引き正味十時間、九月二十四日から十月三十一日までは午前六時半より午後五時半まで、このうち食事休憩時間一時間を差引き正味十

時間、十月一日から二月末日までは、午前七時より午後五時まで、このうち食事休憩を除けば正味九時間となる、彼等の作業力は大豆其の他の袋物（袋物とは一般農産物のこと）は一袋を擔ぐ。一袋の重量は約百五十斤である。豆粕は二枚乃至六枚を擔ぐ。此の斤量は九十二斤乃至二百七十六斤に及ぶ。併も夫れを繰返すだけの體力を有して居る。能率は作業の種類によりて一定せぬけれども、一日平均約一萬斤即ち約六噸の作業力を有するわけである。然らば碧山莊宿舍に於ける苦力等の生活狀態は何うであるかと云ふに、莊内に賣店を設け、其の主食物たる麥粉の如きは、明治四十二年時價に準じて定めたる價格を以て供給し、今日に至るも値段を變更せぬ。その他石炭、衣類、靴などの如きも、常に市價より安價に供給しつゝあるが、苦力一人一月ヶの食費は洋錢約七元内外で一元は我が約壹圓に相當する。即ち一ヶ月約七圓の生活費である。されば苦力の貯蓄心に富む者は數千圓を積み居るは珍らしとせぬ。何にせよ一箇師團の兵數にも近い苦力を收容し居ることとて、特に機關を設けて監督を爲すわけに行かず、總取締一名と、苦力移動取調係二名を常置しあるのみで格別の監視はない。然しながら未だ曾てストライ

キの如き不穩の擧動に出た例なく、又荒々しい内地仲仕の弊風もない。彼等の日常生活は至つて温和にして、小禽を愛飼するもの多く、或は歌を吟じ生活を樂しむ者もある。彼等に對する慰安方法としては、莊内に劇場を設け、祝祭日には餘興として演劇又は活動寫眞を見せ、蓄音機を使用することもある。莊内には又天德寺なる寺院があつて、支那僧が之れに住み彼等の宗教心を滿足させて居る。救濟方法は數名の囑托醫師並に日支兩國の擔務員を常置して公私傷病の別なく莊内苦力の爲め無料にて施藥し施療するのであるが、彼等は一般に健康狀態良好なる爲、日常病室に收容せられる患者などは甚だ稀にて、二十名内外の病人あるに過ぎぬ。公傷死亡等の場合に於ては、埋葬費は勿論、遺族扶助料をも支給する。碧山莊は去る大正八年十月に創業十週年紀念として天德寺の隣地に萬靈塔なるものを建設し福昌公司の日支店員及び苦力六百五名の靈を祀つた。塔の寫眞を見ると、花崗石造りにして基礎臺六尺八寸、塔の高さ二丈一尺、表面「萬靈塔」の文字は釋宗演師の筆である。大連港の名物たる埠頭仲仕の苦力は内地勞働界の現狀に顧み、參考に資すべきものが多からうと思ふ。（九月二十日大連にて）

星ケ浦の半日

星ヶ浦は大連の島尾である。高岡市民が島尾海岸を唯一の遊散地としてゐるやうに、大連の住民は星ヶ浦を命の洗濯場として居る。星ヶ浦は大連を距ること西南約二里の海岸にあつて、今は電車も通じてゐる。以前は黑石礁と稱する一小漁村であつたのを、風光の極めて明媚である爲、明治四十二年滿鐵會社は之れに目をつけて、海岸十餘萬坪の土地を買收してしまつた。爾來此地を避暑及遊散の場所と爲すべく苦心經營の結果、松や胡藤や、楊柳、桃などの樹木が植付けられて滿洲には珍らしい林が出來上り、園內にはヤマトホテルを建築せられた。併も滿鐵沿線各主要驛のヤマトホテルが堂々たる建築であるに反し、當地のは如何にも瀟洒な別莊風の構造で、繪ハガキになつてゐるものを見てもカメラ黨の喜ぶ好圖題である。ホテルの外に日本風の料理屋星の家の宏大な建物もあつて、旅客の爲に宿泊のできる設備になつてゐる。尙又園內には所々に和式又は洋式

の幾棟かの貸別莊もあるので、家族を伴ふた避暑避寒客は、是等の建物に若干の時日を遊び暮すのもある。何と云つても敷地が十餘萬坪もあるので、其の間にはテニスコートなどの遊技場もあり、海に面じた大連富士の山麓約七萬坪はゴルフ遊技場に充てゝある。無論砂濱には海水浴場があつて、そのあたりには松並木の枝を垂れ、所謂青松白砂の景致を愛することができる。團体の解散當日、川村滿鐵社長は此の地に於て私共の爲午餐會を催ふされたので、出發當日何となく心も急がれたけれども、星ヶ浦を一覽したくて自動車で出掛けた。坦々たる二里の大道路を急速力にて駛驅するのは實に愉快千萬のものである。あとにて聞けば、大連加賀町に電氣器具を鬻ぐ私の舊友小泉常次郎君も、此日家族を伴ふて星ヶ浦へ遊びに往つてゐたさうだが、斯うした手合を載せた支那馬車若くは自動車は、私共の自動車の前後に續々として絶えなかつた。星の家の前に於て下車し、接待員から花徽章と星ヶ浦の地圖などを渡され、ブラ〳〵と園內を逍遙してみる。星ヶ家の背面から石段を下つて砂濱へ出ると、そこには幾十組ともない家族づれの群れが跣足で磯を傳つたり、砂原を馳廻つたりして遊び戯れてゐる。それらの人々を目的

に支那船夫が小舟を持つて來て頻りに客を呼んでゐる。此界隈は例の要塞地帶にて、撮影を禁ぜられてあるのだが、旅順に於ける前例により、或局部々々を撮影するも妨げ無しとの內諾を得たからカメラ黨は諸方を驅け廻つて盛んにレンズを向け合つた同伴の坂牛君はヤマトホテルを寫さんことを主張して已まぬので、ホテルの位置は數丁の距離あるにも拘らず、私は同君につき合つて撮影に出掛けたが、二個の棟を繋ぐ廊下の石柱に蔦を絡ませたあたりの趣に見惚れ、廊下の端のベランダに立つてゐる私の姿を同君に撮つてもらつた。ホテルのベランダは海に面してゐるので、非常に眺望がよい。滿鐵の案內記には「若し夫れ煙波漂渺として海島近く點在し悠々たる歸帆を掠めて白鷗閑かに飛ぶあたり、一日の淸遊を試むるの値がある」と書いてある。況んや數日をホテルの客として氣樂にノンビリと消光したならば嘸愉快なことであらうと、一寸ブルジョアが小癪に觸り、ベランダから內部を一眄し、高岡おたや町精美堂へ借金未拂のアンスコを抱えて園遊會場へ引還へした。（九月二十日大連にて）

關東都督官邸の翁

關羽の大見榮

星ヶ浦に於ける園遊會の幾つもの餘興のうちに、演劇があつたから、私は其の假舞臺の前に在るベンチの一隅を占めて支那芝居を觀覽した。一座の俳優が第何流位に屬するのか、又其の技藝が良いのか惡いのか、固より开麼鑑別は付かないけれども、支那藝者の唄を聽くよりは、筋のわかるだけも增しであると思ふたからだ。三番の劇うち前狂言は

「單刀卦會」と題するので時代は三國時代。主要登場者は赤い顔で鬚の長い天晴れ魁偉の關羽に、魯肅に周蒼、その他軍人あまた、筋を云へば諸葛孔明が吳より三年の約束にて荊州を租借し、關羽をして之れが鎭守たらしめしに、期限來るも關羽は荊州を返さぬ爲吳の魯肅は一策を案じ、關羽を國境江岸に招待して宴を張り、兵を配つて待受けると、關羽は周蒼一人をつれて來り臨む。魯肅は宴席に於て荊州を返さぬに於ては、一命を奪はんと威嚇し、室內に兵士を招き入れたが、關羽は少しも恐れず、却つて魯肅を捕へ、魯兵若し關に一指を染めんか卽座に魯を殺さんとの氣勢を示した爲、魯及び其の兵士等は、關羽の威に屈服し、兵を配したるは關を護衛する爲であるなどと辨疎する。ソコデ關羽は意氣揚々として荊州に立ちもどると云ふので、旅大還付論の囂々たる折柄、殊に私共の團体が、前日大連に於て支那俗論の向ふを張り、不還付の宣言的決議を爲したるあとであるから、此の劇は恰も寓意の上演であるやうに思はれる。一体の此種の劇は武戲と呼ばれるもので、主として材料を三國志、水滸傳などに取り、其の勇壯なところを一場の戲に仕組み、尙武の氣象を養ひ、歷史上の英雄豪傑が中原に角逐した昔を偲ばす

は宜しいが、あまりに芝居氣が强過ぎて誇大に陷り、衣裳を無暗に金ピカにするなど滑稽な程である。劇に關する支那の書物を讀むと、武戲の有名なものには長板坡、八大鎚白水灘、八蜡廟、四杰村、三叉口、鐵公鷄などありて、關羽、曹操、張飛などは武戲に現はれるお馴染の人物であるらしい。戲の主人公たる立役のことを生と云つてゐる。此戲に於ては關羽が生である。兵士が之を捕へんとするや却て魯肅を鷲掴みと爲し、恐ろしく見榮を切つて、ウフウフ、ハハ、ハハと豪傑笑ひをするところは日本の立役と異ならぬ。誇大笑ふべしと雖も、流石に堂々たる偉丈夫の面目を見せ、眼中人なく、其便々たる太つ肚には、荊州租借期限問題などは念頭にも留めない毛の生へた不敵の魂が蟠屈してゐるらしく思はれた。但し鳴り物が非常にやかましく、中にも銅羅の聲が耳も潰れよとばかりに響き渡るのと、役者の白が高調喧騷を極めるので見る者をしてイヤ氣を起させた。支那人は一般に高調を喜び、大聲を發せなければ觀客の神經を刺戟することができぬと考へてゐるらしい。之れ恐らくは支那人の神經は麻痺して居るからであらう。殊に場所が園遊會だけに精一杯大聲を出さなければ、注意を舞臺に惹くことができぬ爲

であるかも知れぬ。就いて思ふに支那の時局は殆ど此の武戯を演し合つてゐるやうなものだ。支那人の強い芝居氣は芝居ばかりに現はれないで、無論政治の上にも現はれる。

過日は奉天に於て其の立役の一人なる張作霖君が見桑を切るのを見た。昨今の支那電報が傳へる南北群雄の行動は、金ピカの衣裳を付けた舞臺の關羽が、ウフ、ウフ、ハハ、ハハと高笑ひをやつて見せてゐるやうなものだ。こんな事を考へながら私は根氣よく次の幕を待つた。（五月二十日大連から）

呂洞賓の戀愛

「單刀赴會」の後で「三戯牡丹」と「白梁樓」とを見た。一は神話、二は史劇である。一の登場人物は、呂洞賓、牡丹仙、西王母などで、この筋は神仙西王母が誕生日の祝宴を張り諸仙を招待すると、八仙の一なる呂洞賓は、牡丹仙の美色に迷ひ、デレ〳〵として戯れかゝる。西王母は賓客たる八仙を咎めるかはりに牡丹仙の不謹愼を叱し、かゝる女は仙

人たる資格なきものなりと稱し人間に貶謫してしまつた。ソコデ相手の呂洞賓も戀愛至上主義の爲、仙人を廢業し、早速人間に墮して牡丹仙を訪問し、互に喃々として情話を交換すると云ふ、一種の久米仙物語であるが、仙人のデレル塩梅は面白かつた。史劇の登場者は朱洪武、江忠、吳徵、劉福通などで、この筋は、明の太宗朱洪武が匈奴の王なる劉福通と交渉ある爲、劉は朱を白梁樓に招き、宴半にして火を放ち朱を燒殺せんとしのたが、隨行吳徵江忠の兩人は大活動を演じて主公を救ひ出すと云ふ壯烈な場面であつた。支那人の思想と道敎とは密接の關係を有し、小說戯曲皆この道敎の影響を受けざるはない、道敎とは老子の說を中心となすもので、敎派は幾つにも分れてゐるけれども、其の所旨は淸淨無爲の究極、人間は羽化して神仙となることができると云ふのである。併も修養によつて神仙となれるものは、動もすれば人間としての本能を抑へ切れずして再び人界に墮する。それは主として男女兩性の慾情に由ると做す、肉臭紛々たるところが支那仙人の特色だ。支那の結婚は父母によつて主持せられ、當人の意志を無視する慣習ある上に、かくして强制的に嫁せられたる女子は一面に於て又守節を强制せられる。

由來此守節は專制の皇帝が、妻をして夫の爲に節を守らしむれば、臣たるものは君の爲に節を守るべしと思考したからであらう。隨つて支那婦人にして人の妻となれるものには戀愛の幸福がない。この不道理より生ずる性的不滿足よりして勢ひ戀愛至上主義を信奉するに至るは敢て怪しむに足らぬ。之れを以て慾情を殺した清淨無爲の仙人たらんよりは、寧ろ人間に墮して戀愛の滿足を求むるに如かぬとの思想が「三戲牡丹」のうちに現はれてゐるわけだ。支那新進の學者朱某氏が、近ごろ某地教育會の爲に講演を試み、戀愛結婚論を主張して、大いに支那の陋習を批難したるが如きに徵しても、社會的趨勢を見ることができる「白梁樓」は「單刀赴會」と同じく金ビカ衣裳の武戲であつたのは、僅か三幕の配合としては重複の嫌ひがある。依つて之れを傍人に問うてみると、主人側の支那通は「左樣ですね、內地人に觀せる餘興物としては、何でも露骨に誇大に喜怒哀樂の情を現はす塲當り的のものを出さうとした結果でせう。今一つは大連あたりの支那人は勞働者本位で、目に一丁字のない無學無智の者共ですから、下等觀客相手の芝居は斯うした金ビカの誇大露骨のものでなければ駄目なのです。然し支那劇も漸次に新時代

に適應して改良せられ、藝術的のものが歡迎せられるやうになりつゝあると聽いてゐます。先年內地で梅蘭芳が大いに持てましたのは、旦戲であつたからです。旦とは女形のことで、女主人公の活動する芝居のことでありますが、支那俳優の旦は、少年時代から女子同樣に育てられ教育せられるから、表情動作すべて眞の女らしく、支那の女に見出し難い特別の資格が旦に備はつてゐるのです。で支那劇の改善は旦戲の方面から手を付けられるだらうとの觀察です」と答へた。（五月二十日大連から）

星ヶ岡ホテルの翁

原本には滿洲大豆粕其の他に關し猶四五回の通信文があるけれどもこゝには略した。

二十日の夜、寢台車で奉天に引還へし二十一日奉天ヤマトホテルで朝食を取り、直ぐ釜山まで汽車をつゞけ釜山で一泊だもせず聯絡船に乘り、下の關へ着くと又休息無しで歸つて來た。奉天から北京へ遣つてもらふ事になつてゐたけれども臨城事件の直後で嫌氣が差した爲其の計畫を大連で中止した、中止してみると一刻も早く引揚げるに如かずと、こんなにして歸路を急いだのである。

（大正十二年五月稿、以上にて「古塔の影」終る）

私の初旅

十六の年に故郷の金澤から大阪へ往つた、それが私の初旅である。

何うして大阪へ往つたかと云ふに、其ころ大阪の或官廳の重立つ位置に佐藤暢といふ役人があつて、その方から役人の卵とししして適當の少年を推薦するやうに故郷の官廳へ依頼して來た爲、德久恒範と云ふ地方の役人が妙な機會で私を認め、あれを遣つたらよからうと云ふやうな話になり、僅かの間に事が決まつたのである。父母は一人子を旅へ出したくはなかつたけれども、出世の緒口になる事であるからと手放すことになり、當時私の二番目の姉の夫も地方の官吏で、其の知人の菅沼貞吉といふ醫學士が大阪に開業し

てゐるからと、紹介狀を書いて呉れた外に、父の藩士時代の舊友に笠間と云ふ銀行家が大阪に居るのへ宛て豫め父から依賴狀を差出し、笠間方で私の草鞋脱ぎをさせる手筈になつた。事がきまると廣阪通りのト一亭と云ふ西洋料理店で私の爲の送別會を開かれたが、來會者は皆堂々たる大人ばかりで、會費は一人當り貳參拾錢であつたことと思ふ、それで十分飲食をした上に折詰の土產さへあつた。さうした物價の廉い時代に、大阪へ往けば初給が六圓で直ぐ七圓に昇給させ、あと追々引立てると云ふことであつたから、小供の身として先づ破格の待遇であると言つて送別會でも大いに祝はれたものである。其の頃金澤から大阪へ往くには、金石港から小さな汽艙で敦賀へ出て、敦賀から長濱迄汽車、長濱から湖上汽船で大津、其處から又汽車で大阪と云ふ順序であつたけれども、船は危險と云ふ親ごころから敦賀迄人力車で陸行する事になり、六十近い老車夫を賴んだ。父母と姉の夫と二三の友人とに野町の端迄見送られたが、愈々父母と故郷に別れるのだと思ふと胸の迫るやうに覺えた。

當時の人力車は二人乘本位で、一人乘用は稀有であつた爲、私も矢はり其二人乘に載せ

られ、ズックの旅行鞄を横に置いても座席は尙十分餘裕がある。人力車の車體は外部一面ペンキ繪を描いてあつたもので、牛若辨慶、楠公子別れ、信玄謙信、養老の孝子、鯉の瀧登り、竹に雀、牡丹に唐獅子と云つたやうな俗惡でケバ〳〵しいのが普通で、中には紅白石松模樣、鱗模樣、菱形くづしのやうな物もあつた。廣阪通りの家に居た頃は、前通りを通る人力車の繪模樣を見て、人物、花卉、動物などに分類し毎日統計を取つたとさへある。私の大阪行に乘つた人力車も石橋か何かの繪樣であつたと思ふ。車體の底にある鐵の心棒には眞鍮の輪を五つ六つ箝込んであるのが、進行と共に絶えずガラ〳〵と高鳴るやうな仕掛けになつて居て、不完全な國道の事とて、大きな石に挽き當てる毎に車は飛上がり、車輪はクワチャン〳〵と凄さまじい響を立てたものだ。

野々市へ入ると、女共が路傍の小川で釜や鍋を磨いてゐて、あたりには柿の葉などが重くるしく茂つて居る。寺井の村では家々の軒に七夕の笹を立てゝあつたのが、金澤でやらぬ事故初旅の目に珍らしく覺えた。其村では何の家でも機を織る音が騷々しく響いてゐた。小松町の橋詰の茶店で晝食をしたが、大きな鮎を二三尾塩燒にしたのを付けて呉

れたので、代金をウンと取られはしないかと心配したが、案外の安直さに二度吃驚をした。長い間貧乏仕通しの我家では食事も質素で、大きな鮎の塩焼など云ふものばツイゾ見掛けたこともなかつた位ゆへ、面食らつたわけで、大阪着後の手紙の中へ特に此の鮎のことを書いて親共へ知らせた。茶代の如きは一々車夫から幾許置けと教へられ、其差圖に隨つたのだが、壹錢又は貳錢と云ふ額であつたやうに思ふ。手取川には橋が架かつて無かつたのか、橋は有つても其折恰も洪水の爲に流されでもしたのか、人力車諸共渡し舟で越した。渡し舟に乘つたのも之れが初めであつた。かう云ふ風で第一夜は丸岡で泊つたのであるが、日の暮れかゝる頃、車夫からもう丸岡に近づいたと言はれ、行手の方を見渡すと小さな城の天主が立つてゐた。その日の暮れかゝる寂しい國道で小さな町の中にある天主を望んだとき、私は妙に物悲しひ氣分になつた。丸岡の宿屋では六疊ばかりの二階に一人蚊屋の中へ入つたが、室の前は二尺幅の縁側に勾欄がついて、其下の小さな庭に植へた梧桐がヌツト突立ち、繁つた青葉の間に半圓の月が昇つてゐる。私は何時までも眠られずに、其の梧桐の月をヂツト眺め、今ごろ父母は何うしてゐるかと考

へ込んだ。

翌日は武生を過ぎて町の眞中に用水が縦についてゐるのを異樣に感じた。金澤にも市中の用水はあるが、片側に寄つて流れてゐる上に、武生の田舍めいた煤けたやうな町の狀と其の大きな縦溝との調和が氣に入つたので、繪にでもかいてみたいやうであつた。武生から敦賀迄の山路は、汽車で往つても吹津あたりで海を見晴らし得られはするが、鐵道の無い其頃の國道はズツト下方に通うじ、車上から長い間、海上海岸の風景を眺められた。私の鄕里から海へは二三里しか隔だつて居なかつたのと、金石港つゞきの大野港には私の祖父が老後の樂みに漁夫生活をしてゐたので、幼年から可なり海には親しんだものであるが、海といへば何處も皆金石又は大野のやうに、海岸は廣い砂濱になつてゐるかの如く考へてゐたところ、山脚海に迫り岩角へ波浪を打ちつける、此邊りの景色は一つの驚きであつた。

敦賀では具足屋と云ふのに泊ると、晩食の膳の上に伊勢蛯がついた、之れも亦初めて口にするもので非常にうまく舌鼓を打つて食べた。翌朝老車夫に見送られて停車場へ行き

汽車の初乘をしたのであるが、いよ〳〵獨り旅であるから不安のうちにも又自然に元氣が起つて來た。湖岸鐵道は當時長濱敦賀間であつた爲、長濱の汽船宿の客引に引かれ金龍丸とか云ふ外車の汽船で大津へ渡り、又汽車で大阪に着いたのが其日の晩景で、停車場から人力車を傭ふて、途中土產の菓子折を買ひ調へ、北區の何町であつたか父の舊友の銀行員方へ行李を下ろした。

主人の笠間と云ふは五十內外の人であつたが、先づ湯に往つておいでなさい、それから夕食を差上げるから、食事が濟んだら、二男に案內をさせて、どこぞ適當の下宿屋へ入れてあげやうとのことで、附近の風呂屋へ行くと其の歸りに道を間違へ大川端に出て大阪の川なるものを見た。漸く笠間方を探がして立もどり、小さな骨ばかりのやうな干魚で食事をさせてもらひ、それかれ二十歲ばかりの二男君の案內を受け、江戶堀二丁目の下等下宿屋へ一ヶ月參圓の宿料で下宿した。薄暗い室に見知らぬ男との同室であるから貧乏と雖も氣樂で我儘のできた自分の家に寢るとは甚だ勝手が違ひ、我身の上が情け無くなつたので、故鄕へ長文の手紙を書いて、旅行の模樣と下宿屋の心細い狀況とを報じ

た。

着阪の翌日早速佐藤と云ふ官人の邸へ伺候すると、應接室へ出て來られた主人は風貌の良いデップリした人物で、私を見ると、何んだまるで小供ぢやないかと頗る失望の狀に見受けられた。菅沼邸は北區であつたが、之れは快活に、よく來ましたなと笑顏を見せ折々遊びに來給へとの事であつた、間もなく辭令を受けて、江の子島ではなく、中の島の長州藩屋敷跡を仮りに使用して居た其の役所へ江戶堀から常安橋を渡り通勤し始め、夜分は附近の泰西學會と云ふところへ、職務に必要な科目を習ふ爲通學した。それは本ものゝ泰西學館でなく、私人の開いてゐる小さなデモ泰西館であつたのだ。約束通り月給は七圓に昇給した爲、同じ町の素人下宿へ參圓五拾錢で轉じ、更に中の島に同鄕人の新らたに開いた下宿屋へ移つたが、使ひ道は無いから貰ふ金は有り餘るほどであつた。

ニネビヤ

私がNの學校を卒業したのは二十四歳の夏であつた。卒業生の赴任地別を寄宿舍の廊下へ張出されたといふから、行つてみると四國のM市だ。其年の一月に母は亡くなつたけれども、成べく故郷へ近い所へ往きたいと思ふて居たのに、四國の際とあるので大にアテが違つた。支度金として給料二ヶ月分を支給せられたから、それで安い銀時計一個と古着の羽織一枚とを買つて、三ヶ年間起き臥したN堂附屬寄宿舍に別れを告げ、新橋停車場へ向うたが、固より誰あつて見送り呉れる者も居ない、眞に孤影蕭然とは之れだ。

私の從事しやうとする事業は、東京のN堂を中心とし、地方には夫れ〳〵重立つ高職者を配置しあるので、岡山の支部にMと云ふ姓の人が四國及ひ中國一圓を管轄して居るから、先づ其のMさんに會つて萬事の打合せをせよとの命令である。それ故晩景に岡山へ下車し、西中山下と云ふ町にMさんを訪ね初對面の挨拶をすると、Mさんは此事業にシックリと當てはまる温厚な物優しい中年の人であつた。六月の終りか七月の初めか、非

常に蒸暑い日であつたが、小さな庭に面した一室で晩食の饗應にあづかり、其土地に於ける同種事業の近況などを聽かされたが、其のうちには千阪高雅と云ふ同縣縣令の令嬢は、同種事業の佛國流の一員であつたところ、護衛巡査や下僕などと情的關係を生じ、一騒動が持上つたなど云ふ世間談もあつた。その千阪縣令は私の小供のころ故郷で縣令をして居た人で、その情婦を女教員に採用したとかで、稲垣示などと云ふ議員から酷く縣會で攻撃せられた有名な役人である。

西中山下は故郷の長町と云つたやうな土塀町で、小門の建つた貧乏士族の屋敷あとかと思はれる家が多く、妙に懐かしみを覺えた。M家を辭して後、旭川の橋際へ往き、以前伏見と大阪との間で乘つたことのあるやうな小さな川蒸汽に乘ると、川岸に連なる妓樓にチラ〳〵灯がともれ、川風が戰よいだ。川底の淺いため繩引にして舟を引張つたり何かして、漸やく川口の三番に着き、バラック建とでも云ふべき粗末な船宿の二階で明拂曉に出ると云ふ汽船の入り來るを待つて居た。二階から見渡せば下は一面の畑で、畑の方からランプの光りを目掛け無數の羽虫が飛んで來る。その煩さきこと、いぶせきこと

此上も無い。私は此時ふと十六歳で初旅に上つて、第一夜を丸岡の宿に送つたことを追想し、あの頃はまだ故郷に父母も揃つて居たのに、今は旅信を讀んで呉れるものは母の親しみに及ばぬ父ばかりだなどと、大分感傷的になつて來た。

翌曉船が着いたと云ふことで、舌の燒けるやうな熱い飯を食はされ、大急ぎで船に乘り四國の多度津へ渡つた。こゝから別の船に乘替へるのだが、それ迄五六時間の餘裕がある。怠屈のあまり港の石垣の上に立つて海を眺めながら、過去を憶ひ將來を考へ、一体私と云ふ船體は今後何ういふ航海をして何處の港へ到着するだらうと疑つてみた。少年のころ好んで金石港へ出かけ、大きくなつたら船に乘つて、見知らぬ遠國へ旅をしてみたいものだと、遙か彼方の水平線上に憧憬に充ちた空想の目を向けてみたり、烈日に燒ける犀川の磧の砂つばに泳ぎのあとの甲羅を干かし、夕立雷がゴロ〳〵と鳴る上流の山又山を仰ぎながら、あの深山へ分け入り、孫吳空の石猿が住んだと云ふ華果山水簾洞みたいな、異境を發見したいなどと、好奇の幻想を追ふた。その後圖らず大阪に出て、一年ばかりで病氣に罹り、一旦歸郷したものゝ、間もなく持病の遠國追慕から我家を飛び

出し、大阪東京と放浪を續け、河童時代の望み通りに、一夏を犀川の上流の山奥にも送つて、再度の出京となり、今は思ひもよらぬ四國の島流しに遇ふ。それも歸りたい時に歸り、住きたい時には何處へでも往くと云ふ自由が利けば兎も角も、運命のまに〳〵他動的に去來せねばならぬやうでは嬉しくはない。今より千七八百年以前に於ける我々の事業の先輩が、其の天職に精進した强く勇ましい事蹟を讀めば、私のやうな不心得な者は、地獄へ墮ちなければなるまいと思へども、進まぬ氣は何うしても進まず、强ひられて行く我身の姿がック〳〵哀れなものに見え出した。

Nの學窓で讀んだ、漢譯約拿書は亞米利加風でヨナの書と呼び、私共はイヲナと發音させられてゐたが、その本の事が此時頭に浮んだ。イヲナはイスラエル國の豫言者の一人で、アッシリヤ國の首府ニネヴイヤを救ふべき神命を受けたが、アッシリヤはイスラエルの敵國なるが故に行きたくはないので、船に乘つたが反對の方向にそれやうとすると大魚の腹中に嚥まれ、陸地へ吐出されてみると其處はニネヴイヤの海岸であつた。それでも尙入城を欲せず草庵を結んで蟄居中、目前に生へて一夜に實が成り忽ちに枯れた瓢

簞の蔓草を眺め飄然志を改めニネヴイヤへ入り込んだと云ふので、自分の氣に染まぬM市行きは恰かもイヨナのやうだと、笑止しくもあり悲しくもあつた。

其の晩景に多度津發の汽船の蠶棚のやうな下等室の乘客となり、翌くる日M港に着いた今日は其海岸つゞきのT港がM港の繁昌を奪つてしまつたけれども、當時のTは未だ何の設備もなく、昔ながらのM港の遠淺の沖へ船が繫つた。港から市中へは玩具のやうな輕便鐵道があるので、それに乘ると市の中央の舊城跡に松の茂みを拔いだ立派な天主が夏日の烈しい陽光に輝いて居る。汽車の窓から之れを仰ぎ見て、此の不都合の豫言者は之れぞ古へのニネヴイヤ城なるかなと密かに心の中で嘆じたのである。

（以上二篇、舊稿自叙傳の各一節）

江花叢書
第三卷

古塔の影

（終）

編輯後記

○

山には山だげの傳說、川には川だげの物語り、そして海の彼方にはひろ〳〵とした滿蒙の記錄が未知の儘に、ころがつてゐればならない筈だ海一ツ日本の本土を離れた事のない僕は、たゞ幾多の人々の、ものがたりを聞いて、海の彼方の滿洲を憧れて今日に及んだ、僕は恐らく何時になれば滿洲の土を踏む事が出來るかそれも全くの未知そのものである。

朝鮮も其通りだ。斯ふして滿鮮の地は僕の憧憬の地の一つとなつてしまつた。

○

遼陽の白塔、スンガリーの鐵橋、萬里の長城、などの話は、みんな北滿旅行者の自慢ものだ、同じそれの樣に、此書「古塔の影」に盛られた記事の中にも、いくた讀者達と共に著者得意の幾頁かを讀ませられて、微苦笑を禁ずることが出來ない所も多い樣だ。だからこそ、僕は夏は旅行記に限ると云つたのだ、其上、旅行となればもつと好いだらう。

○

椰子の香を慕ひ、雄大な大陸の氣分を味つてのち、この紀行文を讀む人も、さる事ながら、こつ〳〵と內地で聖らかないとなみに浸つてゐる人々も、全世界を通じての旅記だけは、是非一とほり目を通してをくのが至當だと思ふ、其意味で本著も世のおほかたの諸子に、僕はおせつかいにも一讀を奬むる、だが讀んで行きたくなつた……と云ふ場合には僕は知らない。

○

はや八月もたけなはの夏だ、大正十五年の眞夏だ、僅かながら僕等にも夏の休暇がめぐまれてゐる、海へ行かうか…山にしようか…せめてのことに雨晴しの海岸まで…其處は日本海の海邊だ、向ふ岸には種々の此書の語りぐさがあるのだ、僕は誰と往かう。

○

會員は其後またふえた、會費もどうにか集るが、それにしても未だ納入してくれない人はどうしたんだらう。營利事業と違つて一人分だけ會費が滯ると、之を處理するものが非常に苦しい。江花會員はみんないゝ方達だつた筈だれ—

（眞夫）

○

江花翁の紀行文は、世既に定評あり。また何をか言はむ。—と言へばそれ迄の事だ。併し僕の今茲に言はんとする事は、著者の紀行文は殆ど

其大部分が、旅の先々から通信である事だ。食后、旅館の欄に凭つて、早朝車窓の動搖中に於て、夜間船室の床上に寢そべつて、其の筆を走らす。觸目偶感は、直ちにその泉筆を迸つて、新鮮明快、如何にも感じのいゝ文章が立所に湧き出づる事だ。而も情至り、意つくして筆隨ふ。その結構剪裁、洵に至妙にして一字一句の訂正も要せぬ位だ。著者の勤勉と才氣は、茲にもその片羽斷鱗、遺憾なく、縱横に閃光するあるを覺ゆる。

○

著者は性來烟霞の癖あり。黒部、劔、探勝の草鞋ばきの膝栗毛は申すに及ばず、車窓船房の遠行に至るまで、眞に樂んで放浪巡遊す。その行く處、必ず筆を載せて、あるがまゝの自然と人生を視て、その風物と感懷とを叙するの眼快手利、洵に讃歎に値するものがある。

○

本篇は大正十二年五月、著者が第二回の滿鮮滿遊の漫記だ。史蹟やら名勝やら、天然やら、人事やら、遍く遊歷尋訪の顚末を記して、其の概觀を彷髣たらしむる。其の筆致は飽迄枯淡明淨であり、其の筆意は、極めて暢達清高である。

○

本書題して「古塔の影」と云ふ。滿目蕭條たる滿鮮の原野、隨所に聳ゆる古塔の影は、如何にその風物に光彩と雅趣を添はしむるよ。試みに安臥、目次を繰つて諷誦する處あれ雲烟生動、神飛び魂往いて、面のあたり、多感多恨の思を寄する著者の風懷に接するの思あらむ。而して清雅淨宏、一種の幽味に浸るの境地に放心するの思あらむ。僕亦、彼の地に憧憬るゝ、年あり。

○

兎まれ、本叢書も、茲に愈々第三卷を發兌して、同好君子の机案に提供し得るは、僕等の最も欣快とする處である。然り、而して僕等のみの欣快に止らんやだ。蓋し本叢書が著者の天職に呼應して、地方文運の爲に献替の誠を盡すあらんことの多大なるを、僕等が確信してゐる。願くは長き目にて、愛讀、精讀、忍讀を賜へかし。

○

尙卷末の二篇は、特に著者に其自叙傳中より、自選を請ひて之を採錄せるもの。「私の初旅」は著者が十六才の時、青雲の志を抱いて、初めて鄕里金澤より大阪へ罷りいでたる、思ひ出多い紀行。「ニネビヤ」は著者が二十四才の折、高遠の理想を抱き崇高なる使命を荷ふて、東京より四國への行脚。舊約全書「尼希比亞記」を連想して、著者の核心に觸接、頗る快適の文。銷夏絶好の佳伴たるを得ん。

○

著者は洵に不老の翁だ。精氣愈々燠發して、多年、斯界の中堅となり先達となり、重鎭となつて今尙、英氣益々高きものあり。乃ち出ては、新聞記者として、その使命の遂行に全力を盡し、入つては、舊聞記者として、鄕土史乘の爲に、讀書述作、日々止まざる、その老書生的精神の高潔には、共鳴せざらんとして能はぬ。乍今更、著者の筆硯の益々多祥ならんことを、切に祈る。

○

本書は例に依つて、その校正には著者を煩はし、裝訂意匠には熱心なる高多玉雲氏の快手に負ひ、書中隨所の寫眞は、多く著者の撮影に係り印版は一に、前田甲君を俟つた。而して編輯印刷其他には、岡村直堂、古谷夢人、東城眞夫の諸兄の勞に依るもの頗る大。茲に特記して、感謝の意を表す。

（曉堂）

○

江花會發企人の一人たる篠島久太郎氏は、江花叢書第一卷を手にされただけで、さう〳〵逝去された。忘れもせぬ、筆者は二月二十五日、本會設立計畫の相談に、氏を新宅階上の一室含翠軒に訪れた。

高岡文化の向上を常に念頭におかれた氏は、即座に參畫し、老生をひつさげて努力應援すると誓はれた。爾後陰に陽に本會創立斡旋の勞を執られた。左に記する信書は、四月二十日福光町栖霞園より筆者に寄せられたもの、以て其の心中風格を偲ぶに足る。

○

「新學年を迎へて新計畫を立て清新の氣分に滿ちたる市の教育界に御活動遊ばされることと眞に御羨ましく存じ上げます。老生は相變らず古臭い書類の中に起臥し幸に無事に暮らしてなります。江花會について種々御盡力下され有り難うございます。第一卷を昨日宅より送りまして、まだ讀んでは見ませんが善い本になりました。會員は本當の處どれ程になりましたか、城端の洲崎哲二、福光の吉江作太郎の二氏が申込まれたかどうか、御邪魔ながら一寸しらべて御知らせを願ひます云々

○

猶ほ寫眞版の絶筆は

「拜呈先日は御旅行先より貴書忝く拜見仕り候江花會費參圓也御手許へまで差上候間何卒可然御取計被下度御願申上候少々病氣蓐中如此に候早々

五月四日　篠島久太郎

岡村直吉様貴下」

こは五月四日病摩に横臥して筆者に宛てられたもの、其の晩より高熱惡寒、遂に起つ能はざるに到る、遺憾とも心外とも言ふべき言葉を知らない。

（直堂）

江花會會員芳名

（順序不同）

勤先住所	芳名
高岡市役所	早苗西藏
〃	宮田良太郎
〃	佐伯有平
高岡圖書館	國澤彌吉
〃	藤平勝利
〃	論田勝之助
工業試驗場	古谷豊吉
〃	車　健太郎
〃	山本久次郎
〃	米田鳩秀
〃	高多喜八
〃	生駒弘
〃	若林柾
〃	大崎巖
〃	只見徹
高等商業校	山本助七郎
工藝學校	熱海安吉
高等女學校	高野勝太郎
〃	一宮宗誠
〃	中川秀正
〃	林喜太郎
〃	岩間天海
〃	越前貞二
高岡商業校	小川規矩雄
實科女學校	林仲民
〃	木戸與三二
〃	小林守直
平米町校	藤澤友美
〃	竹内健太郎
〃	岡村直吉
博勞町校	圖書部
〃	林了
〃	關成若
〃	北上廣之助
〃	宮島伊重
〃	佐藤恒太郎
〃	廣瀨喜太郎
油町校	宇野津外雄
〃	泉田治吉
〃	高井茂介
横田町校	門島宗一郎
〃	大松文藏
〃	山本勝
〃	八島美作
川原町校	增山安太郎
定塚町校	正橋又三郎
〃	尾崎恒信
下關校	今井宇作
〃	山谷太作
商工實修校	池田降巖
南町	南むら子

高岡新報社	川崎直作
〃	田島清二郎
〃	片山繁次郎
〃	寺西邦太郎
〃	畑中久万吉
〃	野村米二郎
〃	高田友太郎
〃	前田甲
〃	川上美寛
〃	澤田嘉一郎
〃	筏井兵太郎
〃	作道清次郎
〃	紺野庄太郎
〃	高橋竹太郎
〃	傍島龍三
〃	藤本儀行
〃	横越儀一
片原町	山田重治
御旅屋町	村井清貞
〃	倉田長太郎
末廣町	木津太郎平
〃	梶村宇平
〃	小島德次
增山清一	
笠井久兵衛	
堀井吉平	
上野彖次郎	
大坪昌一	
平井助太郎	
南林貞吉	
野村宇平	
新村健吉	
棚田喜作	
室崎間平	
上野貞吉	
金子恕謙	
越田久水	
三邊次吉	
高野義太郎	
木津螢雪	
林爲治	
篠島泰一郎	
〃	和田
〃	山口林造
〃	山口健次
上川原町	
苗加八十郎	
筆谷榮藏	
館保二	
鳥山成三	
中山彌一郎	
藤平長門	
室崎間佐七	
寺田彦一	
上埜安太郎	
高岡商業銀行	
米澤元吉	
柳澤作次	
磯野新太郎	
西部勳	
三村政雄	
加茂善治	
上子三省	
萩行密巖	
社浦與三郎	

二番町　金村憲三
仝　塚本留吉
旅籠町　中保仁久
仝　吉崎郡太郎
利屋町　佐渡養順
仝　吉田清次郎
關町　高木桑次郎
仝　荒崎良道
大工中町　佐伯亮齋
仝　佐伯尚平
大工町　本郷榮藏
橋番町　津島隨吉
南町　蓮花宗二
仝　高島覺太郎
仝　關口長藏
仝　高島勇次郎
仝　關原三郎
鴨島町　社浦宗四郎
仝　高島秀雄
通町　河村宗作
下關　關山清

濱町　村本榮三

◉東礪波郡ノ部

戸出町　高畑幸吉
仝　河合甚三郎
鶴居孫之亟
洲崎哲二
奥村次作
織田桑翠果
宮崎勝己
大浦吉衛
大浦米藏
土田古香
神澤重治
齋藤稔
島田七郎右衛門
喜志麻豊生
篠原榮
森深覽
向出榮吉
吉江作太郎

◉射水郡ノ部

新湊町　南島間作
伏木町　牧野庄太郎
仝　田口俵太郎
大島村校　石川正則
伏木町校　北豊治

◉氷見郡ノ部

氷見町　能作米次郎

◉富山市ノ部

縣廳内　中田德治郎
仝　尾島桑次郎
星井町　馬瀨清三郎
仝　山田昌作
下金屋町　西田善左衛門
荒町　犬島滋次郎
星井町　溝神芸洞
總曲輪　稻垣清次
千石町　高田甚四郎
仝　高邑虎次
鹿島町　金山松太郎
殿町　市川茂吉郎

高岡新報支局

仝　築山了秀
仝　奥井天風
仝　杉本幸作
泉町　中村文舟
覺中町　中澤光明

◉中下新川郡ノ部

滑川町　市島宇八
仝　柚木太郎
仝　幸塚六吉
滑川町校　大熊小次郎
魚津町　五十里誠一
仝　木下敬二
仝　嘗野猛
仝　佐藤幸太郎
村椿村　稻澤盛之助
魚津女學校　山田美治
大布施村　堀内丈象
入善町　米澤元健

◉他府縣ノ部

金澤市　鍋島豊朔
仝　桂井健之助

京都府　櫻井義臣
大阪市　石黒憲輔
仝　西村德藏
仝　坂口儀作
仝　高田豊次郎
仝　粟田佐一
仝　立野雪郷
仝　五艘三郎
滋賀縣　小泉常次郎
奈良市　朝鮮
大連

右會員合計二百名、内南むら子氏一人にて毎卷十部、富山市の馬瀨清三郎氏一人にて毎卷二十部、他に二部乃至三部を希望するものありて、毎卷二百五十部印刷して、十部内外を餘すのみである

◎謹告

井上江花著　濠の藻草　大正十一年刊行
仝　上　松葉獨活　大正十四年刊行

右殘部小數あり。實費（一部各五拾錢）にて需めに應ず。希望者は本市御旅屋町倉田精美堂内本會事務所に申込まれたし。

◎寄附

本會維持費として其の后、左記の通り寄附申出ありたるに付、謹んで謝意を表す。

一金五圓也　南むら子殿
一金參圓也　林喜太郎殿
一金貳圓也　西村德藏殿
一金貳圓也　片山繁次郎殿
計金拾貳圓也

◎希望

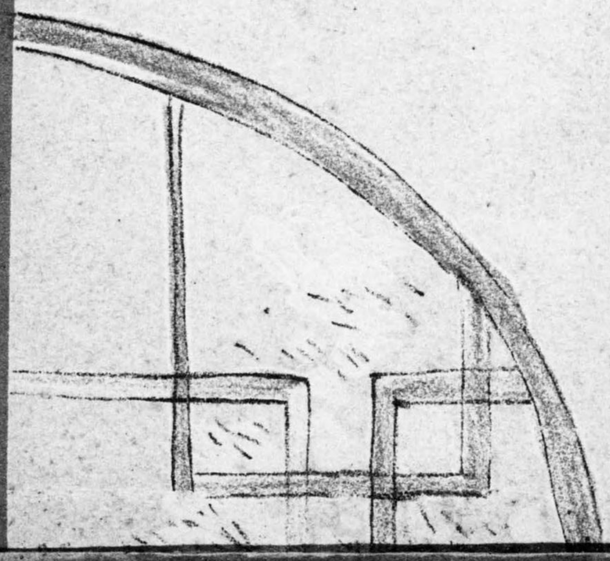
會員を此上五十名增加し、毎卷三百部宛印刷すれば、單價は更に廉くなり一般會員に之れ以上の紙數あるものの若くは挿繪あるものを提供し得ますから入會御勸誘を願ひます

豫告

來る十月發行の本叢書第四卷は「雪窓閑譚」と決定しました、本書は江花翁の得意とする鄉土史に關する隨筆的漫談で、肩の凝る史論とは其趣を異にしてゐますから豫め御愛讀を期待し置きます

大正十五年七月三十日印刷
仝　年八月五日發行

著者　井上忠雄　富山縣高岡市南町五四番地
發行者　廣瀨喜太郎（江花會代表）　富山縣射水郡佐野村木津二八二番地
印刷者　中山彌一郎　富山縣高岡市定塚町一・三三〇番地
印刷所　越中活版株式會社　富山縣高岡市定塚町一・三二九番地



548
55

終